



2017 年度

アンコール遺跡整備公団

インターンシップ報告書

金沢大学/小松短期大学

アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

2018 年 1 月





写真1. アンコール・ワット寺院前での記念写真（前列左から：河本麻実，東野香菜子，宮川愛理，杉田枝穂，須永珠緒，森田愛加，後列左から：Cheav Bunthant, Kong Sovann, 埴崎未緒，北野絵理佳，田中裕之，洪ハンナ，塚脇理人，田原綾女，米沢諒哉，福井美乃）。

写真2. 業務初日の始業式と担当職員との顔合わせ。

写真3. その日の業務内容についての担当職員とのディスカッション。

写真4. ハン・プウ副総裁をまじえての最終日の面談試問。





写真 1. その日の業務の現場へは職員が運転するバイクで移動する。

写真 2. シェムリアプ川に建設された水門の視察。水管理業務の重要性について学ぶ。

写真 3, 4. アンコール・ワット寺院での担当職員の説明。カンボジアの神話などを学ぶ。

写真 5. 古代集落ロヴィア村の子どもたちと。

写真 6. クメール住居センターでの屋外授業。

写真 7. アンコール・ワット寺院前の食堂での公団職員たちとの昼食。



写真 1. エコビレッジ開発総責任者 Mey Marady 氏による村づくりプロジェクトの解説.

写真 2. 担当者から村の工芸品の説明をうける.

写真 3. 担当者の説明をうけながらの農場の見学.

写真 4. 村の農業を支える灌漑設備について学ぶ.

写真 5. クメール舞踊を披露してくれた村の子どもたちとの記念写真.

写真 6. 有機栽培の作物を使った昼食を賞味.

写真 7. タ・プローム寺院での記念植樹祭に参加.



写真1. アンコール・トムの王宮をみんなで散策.

写真2. アンコール世界遺産の珠玉とよばれるバンテアイ・スレイ寺院の見学.

写真3. ゾウにゆられての遺跡めぐり. バイヨン寺院のまわりをゆったりと一周する.

写真4. トンレサップ湖畔のハス畑にて.

写真5. アンコール・トムの北大門での記念写真.

写真6. トンレサップ湖の遊覧. 東南アジア最大の湖でのクルージングを楽しむ.



写真 1. 鹿児島大学グループの野外調査実習. 西バライ貯水池での魚類の採集.

写真 2, 3. 鹿児島大学グループの野外調査実習. 網にかかった魚を全員で採集する.

写真 4. 埼玉大学グループの野外調査実習. ルンタエク・エコビレッジの圃場の見学.

写真 5, 6. 埼玉大学グループの野外調査実習. トンレサップ湖浸水林の見学と住民聴き取り調査.

写真 7. タ・プローム寺院のアリ塚での滋賀大学石川准教授の解説.



インターンシップでの業務地（グループ1：地域住民支援，グループ2：ルンタエク，グループ3：北バライ，グループ4：西バライ）

2017年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

目 次

1. はじめに	加藤和夫	・・・	1
2. 2017年度インターンシップの概要と成果, 今後の課題	塚脇真二, ハン・プウ	・・・	2
3. 小松短期大学からのインターンシップ学生の派遣	木村 誠	・・・	7
4. インターンシップ参加学生の報告			
1) アンコールインターンシップを終えて	須永珠緒	・・・	11
2) 人文学類・社会学コース・3年生、カンボジアへ行く	北野絵理佳	・・・	15
3) アンコールインターンシップを終えて	東野香菜子	・・・	19
4) 海外インターンシップでの経験	埴崎未緒	・・・	22
5) APSARA 公団でのインターンシップに参加して	杉田枝穂	・・・	26
6) カンボジアでの2週間	洪ハンナ	・・・	30
7) インターンシップを終えてーカンボジアとの出会いー	米沢諒哉	・・・	34
8) カンボジアでのインターンシップに参加して	森田愛加	・・・	40
9) A lot of thanks to Cambodia!!	宮川愛理	・・・	46
10) アンコールインターンシップ報告	田中裕之	・・・	49
5. チューター・アシスタントの報告			
1) 第2の故郷ーカンボジア, シェムリアップー	河本麻実	・・・	55
2) カンボジアふたたび	田原綾女	・・・	58
3) チューターとして感じたこと	福井美乃	・・・	62
4) シェムリアップで感じたこと	塚脇理人	・・・	65
6. 埼玉大学の海外フィールド実習報告			
1) 埼玉大学の海外フィールド実習	荒木祐二	・・・	69
2) 海外フィールド実習に参加して	小林 京	・・・	73
3) カンボジア海外フィールド実習を振り返る	浅野冴佳	・・・	75
4) カンボジア海外フィールド実習を終えて	萩村真奈	・・・	77
7. 鹿児島大学の海外フィールド実習報告			
1) 鹿児島大学の海外フィールド調査実習	本村浩之	・・・	79
2) シェムリアップにおける魚類相調査実習	萬代あゆみ	・・・	81
3) カンボジアでの淡水魚類調査実習	稲葉智樹	・・・	84
8. 金沢大学の海外インターンシップに参加して	石川俊之	・・・	89
9. 資 料 : 2017年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要		・・・	92

図版1：インターンシップの参加学生たち（始業式，ディスカッション，最終面談試験）

図版2：インターンシップでの現場業務（1：西バライ，北バライ，地域住民支援）

図版3：インターンシップでの現場業務（2：ルンタエク・エコビレッジ再開発プロジェクト）

図版4：インターンシップの休日（アンコール世界遺産公園とトンレサップ湖）

図版5：埼玉大学と鹿児島大学，滋賀大学の海外フィールド実習

図版6：アンコール世界遺産公園での各グループの業務地

1. はじめに

金沢大学人間社会学域国際学類長 加藤和夫

今年度も「金沢大学／アンコール遺跡整備公団インターンシップ」が、8月20日から9月3日までの15日間のスケジュールで実施されました。平成22年度から毎年実施され、今回で8回目となったこの海外インターンシッププログラムには20名を超える応募がありましたが、書類審査で選ばれた8名の学生が参加しました。8名の内訳は2年生4名（すべて国際学類の女子）と3年生4名（人文、国際、法、環境デザイン学類から各1名。法と環境デザインが男子）でした。応募も多かった国際学類から5名の学生が参加できたことは学類長として嬉しいことでした。ほかにチューターとして3名の大学院生（金沢大学、名古屋工業大学、鹿児島大学）とアシスタント学生（横浜市立大学）が同行してくれました。また、一昨年、昨年に続いて小松短期大学の1年生2名も参加しました。

5年前から環日本海域環境研究センターと国際学類との共催として新たなスタートを切った当プログラムは、一昨年度から金沢大学教育改革GPとして採択され、5年間は大学の補助金を得て実施できることとなりました。今回もこれまで同様、環日本海域環境研究センターの塚脇真二教授の献身的なご尽力によって、事故もなく順調に実施することができました。塚脇教授には、PR活動や公団との折衝を含む諸準備、国際学類長および国際学類キャリア形成支援委員長等を含む実施委員会での参加学生の選考、事前の情報交換会の開催、緊急連絡網の作成や学内のさまざまな組織との交渉、カンボジア国内諸機関との連絡など、諸事万般にわたってお世話になり、インターンシップ中も現地で学生のサポートに細心の注意を払っていただくとともに、毎日詳細なレポートをメールで頂戴しました。共催学類の長として感謝申し上げる次第です。また、3年連続で引率教員として参加された小松短期大学の木村誠准教授、同プログラム経験者でチューターとして3年連続で同行してくれた本学大学院の河本麻実さん（自然科学研究科環境デザイン学専攻2年生）をはじめとする4名のチューター、アシスタントの皆さんにも感謝します。皆さんの経験と配慮は参加学生にとって大きな支えとなったはずです。そして、今回も快く本学の学生を受け入れて下さり、ご指導いただいたアプサラ公団職員の皆様にも深く感謝いたします。

なお、当プログラムは今年度も在カンボジア日本国大使館による日カンボジア絆増進事業に認定されました。アンコール世界遺産では唯一とも言える学生のインターンシップとして高く評価されていることの証左と言えましょう。

10月11日には参加学生たちによる報告会が開催されましたが、4つのグループの報告を聞きながら、このプログラムが、人の暮らす数少ない世界遺産での海外インターンシップとして貴重な体験の場となっていることを改めて確信しました。当プログラムが、今後ますます本学のグローバル化推進の一翼を担うものとして発展していくことを願って、ご挨拶いたします。

2. 2017年度インターンシップの概要と成果、今後の課題

金沢大学環日本海域環境研究センター・教授 塚脇真二
アンコール遺跡整備公団・副総裁 ハン・プウ

カンボジアのアンコール遺跡整備公団（略称：アプサラ公団）での海外学生インターンシップは今年度で8回目を迎えた。今回も金沢大学の8名と小松短期大学の2名の計10名の学生が同公団でインターンシップの業務に2週間従事した（写真1）。また、このインターンシップの期間に合わせての埼玉大学

と滋賀大学、そして鹿児島大学の海外フィールド実習が実施されたため、チューターとアシスタントの4名を加えての学生総数が19名、同行する教員5名という大人数になった（写真2）。このような大人数にもかかわらず、また、世界遺産の管理業務がきわめて多忙である時期にもかかわらず、担当職員たちの手厚い指導と保護のもと、学生たちの積極的な



写真1. 今年度の参加者たち

ながらも節度ある行動もあって、すべての予定を無事に終えることができた。カンボジアで流行していたインフルエンザに帰国間際の学生3名が罹患してしまったのは想定外であったが、これをのぞいては記録にも記憶にも残るような事故も事件も皆無であった。なお、罹患した学生たちは帰国後すみやかに健康を回復している。同公団のSum Map 総裁、ならびに同公団関係諸氏に心からの謝意を表したい。また、金沢大学国際学類加藤和夫学類長をはじめとするインターンシップ実施委員会の関係諸氏、同環日本海域環境研究センター長尾誠也センター長、小松短期大学庶務課の西田友紀主事ほか関係のみなさんにはさまざまな支援をいただいた。このプログラムの実施にあたっては、金沢大学からは平成29年度教育改革GP事業としての経済的支援をいただき、また環日本海域環境研究センター教育施設事業費の一部も使用した。在カンボジア日本国大使館にはこのプログラムを平成29年度日本カンボジア絆増進事業に今回も認定いただいた。これらの関係諸氏に深い感謝の意を表したい。



写真2. 5大学全員での夕食会

金沢大学からの参加学生は、人間社会学域国際学類2年生4名、同3年生1名、同学域

人文学類 3 年生 1 名，同学域法学類 3 年生 1 名，そして理工学域環境デザイン学類 3 年生 1 名の計 8 名であり，女子 6 名，男子 2 名であった。法学類と環境デザイン学類からの参加者が男子である。昨年度の参加者が特定の学類にかたよっていたため，今年度は募集の段階から参加学生の学類構成を多様化させることを目標としていたが，この目的はほぼ達成できたと判断している。一方の小松短期大学からは地域創造学科臨床工学ステージと航空・観光ホスピタリティステージの 1 年生女子各 1 名が参加している。将来の観光業務をになう航空・観光ホスピタリティステージからの初の参加者があったことはよろこばしいことであった。

これらの学生たちは 2～3 名ずつの 4 グループに分かれ 2 週間をとおして公団の通常業務に従事した。今年度の参加学生たちは，協調性や積極性，社交性などのすべてにわたって例年以上にきわだった学生たちだった。なお，金沢大学の参加学生のうち 6 名は日本学生支援機構の平成 29 年度海外留学支援制度の助成金 7 万円を，小松短期大学の学生は同短大の海外派遣支援奨学金 7 万 5 千円をそれぞれ受け取っている。これによって学生たちの経済的負担を約半分に減らすことができた。このインターンシップの企画・調整から参加学生の募集や選別，実施，そして実施後にいたるまでの日程などは巻末の資料を参考されたい。

2 年前のこのプログラムに参加し，また，昨年度と一昨年度にはチューターとして貢献してくれた金沢大学大学院自然科学研究科環境デザイン学専攻の河本麻実が今回もほぼ全行程にわたってチューター業務をつとめてくれた。金沢大学在学中にこのプログラムに参加した名古屋工業大学大学院工学研究科博士前期課程の田原綾女と，鹿児島大学の海外フィールド実習に昨年度参加した



写真 3. プログラム前半のチューターたち

同大学連合大学院博士課程の福井美乃がそれぞれ前半と後半とに分かれてチューター業務に従事した。さらに，プログラムの安全管理体制をさらに強化するため，横浜市立大学国際総合科学部経営科学系の塚脇理人が全行程にわたってアシスタントチューターとして同行している。現地での生活や公団での業務にかかる参加学生たちの相談相手，学生たちと公団職員との間に入っての連絡や時間調整，学生たちの安全管理の補助と多岐にわたる業務であったがチューターたちはこれらを的確にこなしてくれた（写真 3）。

小松短期大学からは引率教員として木村誠准教授が全行程にわたって学生たちに同行している。海外フィールド実習を行った 3 大学では，埼玉大学教育学部の荒木祐二准教授が学部学生 3 名を，鹿児島大学総合科学博物館の本村浩之教授が大学院生 2 名を引率してそれぞれ現地を訪れている。滋賀大学教育学部の石川俊之准教授は次年度以降の海外実習の実施にむけての視察を行っている。

一昨年度までのインターンシップでは、学生たちは3~4のグループに分かれ、それぞれが従事する業務の担当職員らとほぼすべての行動をともにしていたが、今年度については、昨年度同様に公団の業務が多忙であったため、学生たちを担当できる職員の不足から例年の方式をとることができなかった。そのため、今年度の学生たちは、4つのグループに分かれながらも、グループごとにそれぞれの業務に従事する日があったり、4つのグループが合同で同じ業務に従事する日があったりと業務への従事形態は臨機応変のものにならざるを得なかった。しかし、学生たちはひとつの担当業務についての理解を深めることこそできなかったが、参加の全学生がすべての業務をひととおり経験することができたし、また、さまざまな業務を理解することができたのはむしろ効果的であったと考える。

今年度のインターンシップで注目されることは、昨年度に引き続き、インターンシップ学生としての2大学の学生10名と4名のチューターたちに加えて海外フィールド実習としての2大学の学生・院生計5名という、総勢19名もの学生たちがアンコール世界遺産で活動したことである。これらの学生たちが所属する学類や学部はさまざまであり、学年も1年生から大学院生までと多岐にわたっていた。そのため、大学間の交流はもちろんのこと、専門分野や学年の垣根を超えての学生たちの交流にはよい相乗効果や波及効果を見ることができた。学生たち個々の専門分野を背景とする多様な興味が他の学生の関心を呼び、それが連鎖的に広がっていくという例年どおりの傾向を随所で見ることもできた。

さらに、海外インターンシップと海外フィールド実習とでは活動内容が異なるとはいえ、5つの大学での合同企画としてのこのプログラムの実施は、それぞれの活動の一部を重複させることで学生たちの安全管理体制をより堅固なものにすることになった。植物生態学を専門とする埼玉大学の荒木准教授や魚類分類学の鹿児島大学の本村教授、淡水生態学の滋賀大学の石川准教授はいずれもカンボジア情勢に習熟した若手研究者であり、心理学を専攻する小松短期大学の木村准教授はこれまでのこのプログラムへの参加で十分な経験を積んでいる。それぞれに専門分野が異なる4名の若手研究者の参加によって、参加学生たちは専門的な解説を現場で受けることができた。また、彼らの参加によってこのプログラムを継続させる展望がさらに開けてきたように感じる。

インターンシップ業務中、学生たちの手による記念植樹がタ・プローム寺院とルンタエク・エコビレッジで実施された。業務を離れて担当職員らとアンコール・ワット寺院などの世界遺産の見学にも行った。最終日にはアプサラ公団関係者や担当職員らとシェムリアプ市内のレストランでお別れ夕食会を開催した(写真4)。いずれも参加学生たちにとっては忘れえない思い出になったことと思う。



写真4. 最終日のお別れ夕食会

このインターンシップの成果は例年と同様、以下の3点に集約される。学生たちへの「教育効果」、成果の「現地への還元」、そして関係大学の国際貢献にかかる「周知（宣伝）」である。これまでの報告書とほぼ同じ内容になるが以下に記述する。

(1) 学生たちが大きな満足と大きな経験とを確実に持ち帰ることができた。はなやかに喧伝されるばかりの世界遺産であるが、その維持管理や観光客の便宜のためにどれほどの労力とその裏側で費やされているかを公団での業務をとおして参加学生たちは実体験することができた。また、昨今のはやりの言葉である「持続可能」のために、さまざまな苦労がその背後あることを経験した。「最初のイメージとはおおきく違っていた」とは今年も学生の口からもれていた感想である。これとともに「貧しい発展途上国」というイメージが先行するカンボジアのくったくのない人々や豊かな自然に学生たちは日々触れることができたし、さらには国際協力の舞台であるとともに地域住民が暮らす世界遺産公園の特異性を目の当たりにもした。「国際貢献」と「地域社会」というふたつのキーワードを学生たちは実体験したことになる。学生たちの報告にはこの2週間の体験が生き生きとつづられている。したがって、このインターンシップでの2週間は学生たちにとってきわめて充実したものだったと客観的に評価される。これはこのインターンシップの実施が学生たちへもたらした大きな教育効果といえる。

(2) 学生たちを指導することによって公団職員に大きな教育効果をもたらした。参加学生たちはそれぞれの担当職員たちとともに公団の通常業務に従事した。学生たちの同行が彼らの業務の支障になった点是否定できないが、インターンシップ終了後に公団上層部から、学生たちの存在が職員たちに大きな教育効果をもたらしたことを例年と同様に感謝の意とともに指摘された。具体的には、1) 学生たちを案内することで職員たちの「説明」の技術が向上したこと、2) 職員たちが説明する「楽しみ」や「喜び」を味わったこと、3) 業務についての全般的なことを学生たちに説明することで、職員たち自身が業務内容を総括することができたこと、である。これらの指摘はこのプログラムによる現地への成果の還元効果があったことをまさに示すものといえる。

(3) 学生たちの活動がアンコール世界遺産公園で大きな話題となった。安全管理の観点から、学生たちはアプサラ公団の制服を着用して日常の業務に従事したが、カンボジアではエリート集団として知られる同公団の制服を日本人の学生たちが着用するのはきわめて目立つものであり、現地の人々や日本語観光ガイドたち、彼らが案内する日本人観光客におおいに注目された。参加学生たちが制服にアプサラ公団のロゴとともに金沢大学あるいは小松短期大学のロゴをつけて業務にのぞんだことも効果的だった。さらに、アンコー



写真5. 日本カンボジア絆事業ロゴ入りクロマー

ル世界遺産を国際的に管理するアンコール世界遺産国際管理運営委員会や UNESCO プノンペン事務所でもこのプログラムでの学生たちの活動が話題となった。したがって、このインターンシップは世界遺産における両大学ならびにわが国の国際的な貢献活動として一定の宣伝効果をあげたといえよう（写真 5）。

アプサラ公団での海外インターンシップを将来にわたって継続するための基礎と実績はこれまで 8 回にわたる実施によって十分に確立できている。このプログラムを継続させるための経済的基盤も金沢大学教育改革 GP 経費の受給によってとりあえずは安定した。長期的にこれを継続するための懸案のひとつであった他大学との連携についても、小松短期大学と埼玉大学、鹿児島大学の継続的な参加、ならびに滋賀大学の新たな参加によってさらに大きく前進した。とくに、小松短期大学とアプサラ公団との大学間協力協定が 2018 年開学予定の公立小松大学へ継続されることは、このプログラムの今後の継続にはきわめて大きな意味をもつ。

このように、例年以上の成果をあげて終了し、さらには今後の継続にさらに明るい見とおいを得ることができた今年度のプログラムであったが、その一方で今後の検討と対応をさらに継続させるべきこともある。昨年度はこのプログラムでの参加学生構成は、金沢大学では人間社会学域の国際学類と人文学類とにかぎられ、しかも 8 名中 6 名が 2 年生であった。一方の小松短期大学では臨床工学ステージの 2 名のみであった。金沢大学ではこのプログラムの実施目標のひとつである「3 学域 16 学類の学生たちの多様な専門性と興味とに応える」べく、アプサラ公団内のみならずシェムリアプ州の教育機関や医療機関など公団外での派遣先の多様化を推進してきた。しかし、応募してくる学生たちの学類構成が多様性を失ってしまえば、この実施目標の根底がゆらぐことになる。一方の小松短期大学では、この 4 月に新しく開学する公立小松大学の国際文化交流学部へのバトンタッチを目指して、航空・観光ホスピタリティステージからの学生の参加をとくにうながしてきた。その結果、今年度のプログラムでは両大学ともに満足のいく参加者構成となった。しかしながら、昨今の学生たちに海外への興味がうすれつつあることや、海外派遣プログラムがとくに金沢大学で多数実施されるようになったことを考えるとこの結果には予断を許さないものがある。今年度の成功に気をゆるめることなく、このプログラムへの参加学生の多様性維持のための検討と努力をさらに継続すべきと考える。

3. 小松短期大学からのインターンシップ学生の派遣

小松短期大学地域創造学科・准教授 木村 誠

金沢大学において 2010 年度に始まったアプサラ公団での学生インターンシップに、今年度も本学から 2 名の学生が参加した。まずは金沢大学教授、そして本学の国際担当特任教授として、平素より本学の国際交流事業に対してご支援、お力添えを頂き、本事業においてはアプサラ公団をはじめとする関係各所との調整にご尽力を頂いた塚脇真二氏、そして本学学生の参加に対してご理解と温かいご支援を頂いた金沢大学国際学類加藤和夫学類長、今年度もインターンシップの受け入れをご快諾頂いたアプサラ公団副総裁 Hang Peou 氏、ほか関係の皆様にご心からの謝意を申し上げたい。

小松短期大学は、平成 28 年 9 月 2 日にアプサラ公団との間で「アンコール世界遺産での能力開発プログラム」に関する覚書を締結しており、今年度の本事業は覚書締結以降初めて実施された交流事業であった。正式な交流のパートナーとして公団に受け入れていただいたことを心から光栄に感じるとともに、小松短期大学の事業責任者、引率者としては身が引き締まる思いであった。

本学では、台湾、タイ王国、ルクセンブルク大公国への短期留学プログラムを整備しているが、本事業は海外で就業体験を経験できる唯一のプログラムである。今年度、本学からは臨床工学ステージ、航空・観光ホスピタリティステージの 2 ステージから 1 年次生 2 名が参加した（写真 1）。後者のステージからの参加は今年度が初めてであった。大学での教育内容および学生の就職する業界と



写真 1. 業務初日の笑顔

の関連性を考慮すると、航空・観光ホスピタリティステージの学生にとっては特に高い教育効果が期待できるため、このステージから参加希望者が出たことは有難いことであった。

本学からの参加学生は 1 年次生であることから、学生本人および関係者が、2 週間の海外インターンシップに対して様々な不安を抱くことは自然なことである。そのため、学生が不安なく出発できるよう、また、保護者や学内教職員には安心して送り出していただけるよう、今年度も特に事前研修に力を入れた（巻末資料参照）。本学では、海外派遣事業終了後にアンケートを実施しており、事前研修を含めて参加学生からのフィードバックを受けている。過去の参加学生の意見と引率者としてのこれまでの経験を踏まえ、今年度は事前研修にいくつかの変更を加えた。昨年度まで実施していた日常英会話の練習を今年度は実施せず、業務で頻繁に使用することが想定される英単語（灌漑、水位、水路など）と英語での業

務日誌の作成に役立つ英作文の練習を行うこととした。また、学生それぞれが教員と相談の上で1つテーマを決め、自分で調べたことを発表する時間を新たに設けた。森田愛加は「ヒンドゥー教の神話“乳海攪拌”について」、杉田枝穂は「アンコール世界遺産の地理的特徴について」を自身のテーマとして学習を行った。本来現地で学ぶ内容について、出発前に学習させることが適切であるかについては私自身随分と悩んだところである。しかし、本学学生は大学に入学してわずか半年の段階での参加となることから、現地で不適応が生じることを防ぐため、このような研修を実施することに決めた。

海外インターンシップにおいて学生が陥る不適応にはいくつかの要因が関係すると考えられるが、特に大きな要因は人間関係と業務に関連する事項についての理解度ではないかと感じている。人間関係の構築に問題が生じれば、孤立感といった感情が直接的にインターンシップへのモチベーションを下げるだろうし、困った時に助けを求める相手が存在しないという状況が、業務への理解を阻害するという副次的な悪影響も予測される。現地で受ける説明、業務で自分が求められていることに対する理解が追いつかなければインターンシップへの消極的な態度が表れてしまうと考えられる。その意味で、本学学生に業務に従事する上で必要な最低限の知識を出発前に伝えておく事には一定の意味があるだろうと判断した。このように、本学学生の現地での集団生活への適応について頭を悩ませたこともあったが、特に人間関係に関する私の心配は全くの杞憂であったことは特筆しておきたい。今年度の参加学生の人間関係はまさに理想的といえるものであり、本学の参加学生は金沢大学の学生に助けられ、またあるときは助け合い、大変充実した2週間を終えることができた。このような良好な人間関係は、全参加学生を対象とした事前説明会、過去の参加学生を招いての意見交換会などを企画し、渡航前に参加学生の交流の場を設けてくださった塚脇氏のきめ細かい配慮、そして献身的なチューター学生のサポート存在があってこそ実現できたと感じている。

学生は何か困ったことがあったとき、そのすべてを教員に話してくれるわけではない。また、たとえ学生が自分に心を開いてくれていたとしても、教員が見ている学生の姿はその学生の一面に過ぎないというのが、これまでの学生相談業務などを通じて得た私の認識である。しかし、学生が大学に相談するほどではないと判断する人間関係や日常生活に関する小さな悩みが、集団生活におけるトラブルや集団生活への不適応をもたらす最初の火種となることは十分に想定される。チューター制度は、この教員によるサポートが難しい部分を補うという役割があり、実際、比較的長期の集団生活を円滑に進める上で非常に重要な機能を果たしていたと実感している。チューター学生の田原綾女さん、河本麻実さん、福井美乃さん、そしてアシスタントとして活躍して下さった塚脇理人さんには心から感謝を申し上げたい。

今年の参加学生は非常に熱心に業務に取り組んでいたことがとにかく印象的であった(写真2)。本学学生についても、説明を受ける際こまめにメモを取る姿は心強いものであったし、グループの仲間に助けを求めながらもディスカッションの輪に入ろうとする姿勢

は担当教員としてとても嬉しく感じた。驚いたことは、ホテルに戻ってからもグループ毎にその日の業務内容の振り返りをしていったということである。世界的な観光地であるシェムリアプには、若い大学生を魅了するものは山ほどあるだろう。買い物、美味しい食事、エステサロンなど、学生たちが望めば業務後の時間を遊びに費やすことも可能であった。娯楽よりも業務を優先して行動する姿



写真 2. タ・プローム寺院での記念植樹

から、彼らがいかにこの経験を貴重な成長の機会としてとらえ、無駄にしたくないと考えているかが伝わってきた。また、私自身、杉田、森田が現地の子ども達と交流する姿、業務に励む姿から、彼女らの新しい魅力や長所を知ることができたことも大きな収穫であった。本学の学生が最後まで高いモチベーションを維持して業務に従事できたことについて、終始温かく支えてくださった金沢大学の参加学生に強く感謝を申し上げたい。

また、今年度も鹿児島大学、埼玉大学の学生と活動を共にさせて頂く機会に恵まれた。インターンシップ期間中、鹿児島大学の調査に同行させて頂き、学生は魚類の採取を体験することができた。自分自身の専攻とは全く異なる分野について熱心に学んでいる学生と交流する機会を得た事は、参加学生の学問に対する視野を広げ、自分自身の大学での学びについて改めて考えるきっかけとなったのではないかと考えている。また、鹿児島大学教授本村浩之氏、埼玉大学准教授荒木祐二氏、滋賀大学准教授石川俊之氏にはそれぞれの専門領域の立場から本学の学生に貴重な助言と新鮮な経験の機会をご提供頂いたことに心から感謝を申し上げたい（写真 3）。



写真 3. 荒木准教授から説明を受ける

お陰様で今回のインターンシップも無事に終了することができた。これは、学生が不安なく 2 週間を過ごせるよう、常に学生の様子を観察し、丁寧な対応を実践された塚脇氏の存在があつてこそ実現できたことである。私自身、引率者、国際事業担当者として塚脇氏から勉強をさせていただくことが本当に多かった。引率業務を担当する度、新しい課題や改善点に気がつき、毎日が勉強であると実感している。このことも含め、塚脇氏には改めて感謝を申し上げたい。

最後に、本事業への本学学生の参加のためにご尽力をいただいた関係諸氏に改めて深謝申し上げますとともに、本事業の更なる発展を心から祈念申し上げます。

4. インターンシップ参加学生の報告

1) アンコールインターンシップを終えて

金沢大学人間社会学域国際学類 2年 須永^{みお}珠緒 (グループ 1)

8月20日から9月3日の2週間、アンコール遺跡整備公団（アプサラ公団）でのインターンシップに参加しました。まず初めに、私がこのインターンシップに参加した動機について書きます。1つ目は、純粋にアンコール遺跡群に行ってみたい、見てみたいと思っていたからです。高校の時に世界史の教科書で見た荘厳なアンコール・ワット、ジブリ映画である「天空の城ラピュタ」のモチーフになったといわれているタ・プロームなど、毎年多くの観光客を集め、世界的にも人気な遺跡の数々に興味がありました。2つ目は、現地の人々が実際に世界遺産となっているエリアに住んでいるということで、現地の人々の暮らしがどうなっているのか気になったからです。私の出身である富山県にも実際に住民が暮らしている世界遺産である五箇山の合掌造り集落があります。五箇山を訪れたことがあるのですが、観光業と現地住民の暮らしの両立が難しいとのことでした。アンコール遺跡群は五箇山よりも更に広いエリアであり、観光客数も桁違いであるので、アンコール遺跡群のエリア内ではどのようなことが問題となっているのか、アプサラ公団はどのように問題に対処しているのかを学びたいと思いました。そして3つ目は、発展途上国の開発にすごく興味があったからです。今まで興味はありながらも、実際に発展途上といわれる国を訪れたことはありませんでした。観光業などでどんどん発展していつているカンボジアに行き、開発の現状、問題や変化などを体感できる絶好の機会だと考えこのインターンシップに参加しました。

次に、2週間のアプサラ公団での業務の内容について書きます。私たち学生は金沢大学から8名、小松短期大学から2名の計10名で4つのグループにそれぞれ分けられ活動しました。私は主にカンボジアの伝統的な暮らしなどを学ぶクメール・ハビタットグループでした。グループには分かれているものの、他のグループとの合同での活動やメンバー全員での行動も多く、多様なことを学ぶことができました。

まずは、私の担当であるクメール・ハビタットについてです。カンボジアの家の大きな特徴は床が高床式になっていて地面と床の間には2m弱ほどの空間があり、そこでは住人が日中、家事や仕事などをしています（ハンモックが掛けてあり気持ちよさそうに昼寝する姿もちらほら・・・）。床がこのように高さを持たせてあるのは、カンボジアの気候が関係しています。アンコール遺跡群があるシェムリアップは北緯約13度に位置し、1年を通して非常に気温が高い地域であるため、床を高くすることで屋内を涼しく保ち、日中は床の下の空間は日陰となり、その空間は壁がないため、風通しがよく、快適に作業をすることができます。また、カンボジアの季節は雨季と乾季に分かれており、雨季には雨がたくさん降るため洪水の危険が高まります。そこで高床式の家をすることによって浸水を防ぐといった効果もあるそうです。

そして、カンボジアの伝統的な村の形態について、伝統的な村では同心円状に家が建てら

れており、中心は神の領域であるため家を建てることは禁止されています。家と家との間に塀はなく、家同士の距離は非常に近くなっています。それ故、村の住人同士の付き合いは多く、情報交換などをし、助け合いながら暮らしています。しかし、最近では住民にプライバシーの意識が芽生え始め、自宅を塀で囲うようになったようで、ある村には、塀にガラス片を刺すことにより塀に登れなくしてあるものも見られました。近代化していく社会の中で、いかに伝統を守るかが問題となっていくのではと感じました。

自分の担当であるクメール・ハビタットについて以外にも、世界遺産地域の水管理、住民の生活支援についても学び、もちろん、遺跡の見学もしました。アンコール・ワットやアンコール・トム、タ・プローム遺跡やバイヨン寺院など有名な遺跡はもちろん、その他にもたくさんの遺跡を訪れました。造られた時期によってレンガ造り、石造りなど違いがあり、どれも荘厳で迫力があり見ごたえの



写真 1. 公園の方々と昼食

あるものばかりで感動しました。国内外の遺跡修復チームが修復した後の遺跡も数多く見ることができ、遺跡修復のあり方についても考えさせられました。遺跡を見学しながら、公園の方に壁画の背景になっているカンボジアの神話についての話を聞かせていただいたりすることで、カンボジアの思想についての理解も深めることができました（写真 1）。

水管理についても詳しく学びました。水は村の人々の生活用水や灌漑に使われるだけでなく、数々の遺跡の地盤を強くするといった用途もあり、すごく重要です。その水管理の中心となっているのがバライという貯水池です。バライは東西南北に 4 つあり、現在水が貯められていて機能しているのは北バライと西バライの 2 つで、雨季には洪水にならないように水を貯蓄し、乾季には水を放流し、調節しています。バライは池とは違い、地面に土手を築くことで水をプールしているため、水門を開けるだけで自然と水が流れ出す仕組みになっています。西バライは最大のバライで、南北に 2.2 km、東西に 8 km ととても大きく周囲をバイクで一周するだけでかなりの時間がかかりました。北バライの中心にはニャック・ポアンという寺院があり、北バライ自体の美しい景観から貯水池としての役割だけでなく、観光スポットとしての役割も果たしています。そして、これらのバライから放出された水は運河を通り、農業に使われたり、地面にしみこみ地下水となり人々の生活用水に使われたりします。

最後に、地域住民の生活支援についてですが、前述したように、アンコール世界遺産のエリア内では現地の人々が生活をしています。遺跡や環境の整備と同じように住民支援も大変重要なことだそうです。まず、エリア内の村や家庭を見学しに行くと、お土産品を作ったり売る仕事をしている人、学校へ通ったり、元気に遊んだり、家の手伝いをする子供たちが

いて普通に暮らしているように見えました（写真 2）。しかし、問題は沢山あるようで、まず、トイレ問題があげられます。村の住民の 10%しかトイレをもっておらず、森へ行き用を足すことが一般的です。しかしこれには蛇などの危険にさらされたり、女性が危険なめにあったりするだけでなく、森までは少し遠いので雨の時は行くことができないしお年寄りにとっては往復の距離が苦痛となります。更には、衛生状況が悪化することで病気が蔓延し病院へ行くためのお金がかかり、そしてお金がなくてトイレが買えないという負のスパイラルに陥ってしまいます。また、そもそもトイレの重要性を理解していないためにトイレを買おうとしないそうです。そこで、アプサラ公団の方々が地域の人にトイレの必要性を説明し、トイレの設置を促す集会をしているのを見学しました。最初に見学しようとしたときには、住民が誰一人来ないという状況を目の当たりにし、開発の難しさを感じました。しかし、ほかの村で開かれた集会では住民は真剣に話を聞いて理解していたようなので、根気強くやっていくことが大切だと思いました。



写真 2. 村で元気に遊ぶ子供たち

アプサラ公団はアンコールエリア内での新しい建築物の建て増しを禁止しているため、人口が増えている今、人口のエリア内からエリア外への移動も課題になってきています。人口移動の活動の学習としてルンタエク・エコビレッジを訪れました。このエコビレッジでは、移住してきた人々に家と畑が与えられ、野菜や植物を有機栽培し、売ることによって収入を得るといったライフスタイルが形成されていて、ホームステイを受け入れるなどをして観光スポットとしても運営されています。私もこのエコビレッジで栽培された植物を使ったお茶や、野菜を使ったカンボジア料理を食べ、すごくおいしく、また夜になると星がきれいに見えるようなので是非ホームステイしてみたいなと思いました。

このように毎日の業務でフィールドワークをし、たくさんのことを学ぶことができました。また、午前中はフィールドワーク、午後はアプサラ公団本部へ戻って公団の方々とフィードバックをすることでその日の午前に見聞きしたことを整理でき、学びが深まりました。公団の方々とは英語で話したりディスカッションをしたりするので英語で自分の考えを伝える力がつきましたが、その一方、お互いに母語は英語ではないので、分かりあうのに時間がかかるもどかしさも感じました。

最後に、インターンシップ中の生活についてです。2週間、ホテルの部屋に1人ずつで宿泊しました。シャワーが出なくなったり、お湯が出なくなったりと多少のハプニングはあったものの快適に過ごすことができました。また遺跡エリアだけでなく、自由時間にはマーケット、トンレサップ湖など色々なところに行きました。カンボジアは日本と比べ、物価がか

なり安いので安価で色々なものを楽しむことができました。お土産をたくさん買ったり、エステやマッサージに行ったり、おいしいものを食べたりと様々な経験をすることができました。私は食べることが大好きなのでおいしい食べ物を期待していたのですが、カンボジアの食べ物は本当においしくて最高でした。特に暑くて疲れた時に飲むフルーツシェイクは冷たくて甘くて格別でした（写真



写真3. フルーツシェイク

3)。カンボジアの家庭料理であるロック・ラックやアモックもすごくおいしかったです。2週間を通して、一大観光地、カンボジアの雰囲気を感じることができました。

今回のインターンシップでは日本には絶対に経験できない貴重な体験を沢山することができました。私の中で特に印象に残っていることは、マーケットの隅で物乞いをするやせ細った老人や子供、足が不自由でうまく歩けず、よつん這いで歩きながら物乞いをする若者の姿です。日本では見たことのない光景で、かろうじてテレビなどでしか見たことがなかったので実際に見るとすごくショックを受けました。それと同時に、今の自分ではそのような人々に何もしてあげられないという歯がゆさ、悔しさも強く感じました。やはり、国際協力や開発について学び、少しでも助けになりたいなと思いました。

2週間という短い時間のなかで私がこれだけ多くのことを学べたのは沢山の方々の支えがあつてのことです。本当にたくさんの方々に教えてくださったアプサラ公団の方々、引率してくださった先生方、チューターの先輩方、現地で色々なところに連れて行ってくださったドライバーのペンさん、インターンに参加するにあたって事務仕事をしてくださった方、金沢大学、小松短期大学から一緒に参加したメンバーなど沢山の方々の尽力に感謝します。多くの人との出会い、経験、衝撃、感動、を糧にして国際社会に役立てる人間になりたいなと再認識しました。行って良かった、この一言に尽きます。ありがとうございました。

2) 人文学類・社会学コース・3年生, カンボジアへ行く

金沢大学人間社会学域人文学類3年 北野絵理佳 (グループ1)

なぜ社会学コースの3年生がこの時期にアンコールインターンに参加したのか。英語も遺跡も治水も専門外の私がアンコールインターンを知ったのは、今年の3月。インターンシップフェスが開催され、私の周りでも徐々に就職について本格的に考え出ししばらく経った頃だった。私は将来どうしようか全く考えがまとまらず、自分と周りの人たちと比較して悶々と過ごしていた。そんな時、ある先輩に「一回海外でも行って見たらどう?」「毎年カンボジアに行くプログラムがあるみたいだよ」と言われた。最初は「英語出来ないし海外怖いし...」と思っていたが、いつの間にか、「学生のうちに海外へ行ってみるのも良いかもしれない」と思うようになっていた。すっかりその気になった私は、今年の夏は絶対にカンボジアに行くのだという思いで希望届を書き、幸運にもこのプログラムに参加することが決まったのである。結論から言うと、このプログラムに参加したことで私の就職への考えがまとまった訳でも、人間として成長した訳でもない。しかし、アンコールインターンは私にとって大きな収穫をもたらしてくれた。

インターン中のカンボジアは雨季。毎日スコールが降った。日本なら警報レベルの猛烈な雨が降る夜もあった。カンボジアは雨季と乾季のある熱帯気候だ。そのため、雨季に猛烈に降った雨を、乾季にいかにも利用するかが治水の大きなテーマである。そのためインターンの業務では、アンコール世界遺産の「バライ」について詳しく学んだ。バライとは人工水域のことである。アンコール世界遺産には3つのバライがあり、水が張られている西バライと北バライについて研修を受けた。西バライは縦2.2 km、横8.0 kmと最も大きなバライである(写真1)。また北バライは水中から木々が生えており、まるでマングローブ林のような景色で観光客に人気の場所だ。2つのバライには、生活用水の供給、洪水防止のための貯水地、バライの中に位置する寺院の基礎地盤を固めるという3つの役割がある。西バライは加えて灌漑の役割も担っている。



写真1. 広大な西バライ

日本で貯水施設というとダムが思い起こされるが、バライはダムのように地面を掘って作られるのではない。地面は掘らずに周りに8~12 mの高さの堤防(ダイク)を築くことでバライは貯水ができるようになっている。このダイクを修理しながら現在もバライは使われ続けているが、西バライの周りの修理を完全に終えるには機械を使っても40年がかか

るそうだ。驚くことに、11～12世紀に造られたバライは2017年現在でもアンコール周辺地域の重要な水源として使われているのだ。古代の人々が遺したものの偉大さを感じた。また、どの方法が最も効率的で効果があるかを試しながら修理に取り掛かっており、アプサラ公団の努力と工夫を感じた。

バライは貯水という本来の役割のほかに、「観光」という新たな役割も担っている(写真2)。マングローブ林さながらの景色で人気の北バライでは、クルーズ事業を始めようとしていたり、広大な西バライの周りにプラットホーム(展望台)を作って水面に映る夕日の見所として観光客に足を運んでもらえるように取り組んでいたりしたのが印象的だった。アンコール世界遺産は、人の暮らす遺産だ。このバライひとつを例にとっても、地域住民と観光客双方のことを意識しながら整備を進めていることがよく分かった。



写真2. 観光客に人気の北バライ

バライ以外にも、研修ではさまざまな取り組みを見に行くことができた。クメールハビタットという。中にはカンボジアの建築様式の展示がある伝統的な一軒家が建てられていた(写真3)。クメールハビタットは材料費の安いコンクリートを使用しているが、木造に似せて建てられているため、まるで本物の伝統家屋と変わらないように見えた。クメールハビタットは最新の事業らしく、今後は展示だけでなく宿泊施設として活用することも意識していた。世界遺産の中にある伝統家屋に泊まるなんてことが出来るのはアンコール世界遺産ならではのことだろう。観光客が安心して泊まれるようにプライバシーの確保をしっかりとやれば、人気が出てもおかしくない。素晴らしいアイデアであるため、ぜひともうまくいってほしい。



写真3. クメールハビタット

一方で、地域住民による違法な建設があつとを絶たないという問題もある。アンコール世界遺産内で建物を建てる時は、伝統家屋であれば申請すれば建設できるのだが、伝統家屋より安くできる違法な家を建てる住民が多いのだそうだ。違法な建築の取り壊しも相次いでいた。世界遺産に住む住民はどうしても法律に縛られている面も多く、不満を抱きやすい。インターン中に一度公団職員の講演を住民がボイコットした現場に遭遇したこともある。

今後も観光整備を続けていくためにも、まずは公団と住民が信頼関係を築くこと、住民の理解を得ることが大切である。世界遺産における住民支援の難しさを感じた。

そんなアンコール世界遺産の住民の暮らしは、私たちとは大きく異なっている。まず、家そのものが全く異なる。家は基本的に2階建てであり、暑い日中を過ごすために1階には壁がない。日中は1階で食事をとったり、子どもの世話をしたり、工芸品を作り、夜は壁のある2階に上がって寝ている。いくら暑いとはいえ、生活が丸見えなのにはかなり驚いた。また、家自体も木や草から住民自らの手で造っていたのにも驚きであった。そして一家にひとつ大きな甕が外に置かれている。この甕に貯めた雨水は手や体を洗うのにも、料理をするのにも、飲み水にも利用される。井戸も一家



写真4. 井戸で洗濯をする女性

にひとつ設置されており、井戸水も同じく生活用水として使われている。さらにほとんどの家にはトイレはなく、村近くの木がトイレ代わりになっているのである。自由に他の家に入りして食事をとったりくつろいだりしている様子には、村がひとつの大きな家族であるように感じた。「カンボジアでは他人の家に気軽に立ち寄っていて驚きました」と公団職員に言ったところ、「カンボジアの人はみんなフレンドリーだから普通だよ」と返された。日本での「当たり前」とカンボジアでの「当たり前」がこんなにも違っているのだということを改めて感じた。

私は実は、カンボジアについてあまり知らずにアンコールインターンに参加してしまっていた。カンボジアに来て数日が経ち、やっとカンボジアの歴史を調べてみてショックを受けた。そこで初めて、たった40年ほど前のポルポト政権下の暮らしについて知った。すると、カンボジアの人たちがこうして笑って暮らしているのを見たり、カンボジアの美味しい料理やカンボジアの伝統に触れたりできることが、本当に素晴らしいことだと感じた。

私はこのインターンを通じて将来の展望が開けたり、人間として成長したりすることはなかったと述べた。しかし、アンコールインターンを通じて、自分は意外と真面目にやりたい性格であるということや、意外と環境には慣れるのだということなど新たな自分に出会うことができた。また、自分の周囲のことで悩み考えすぎることが多かった私だが、



写真5. トンレサップ湖

世界はもっと広いということや、絶対的な「当たり前」なんてないということに気付くことが出来た。アンコールインターンを通じて、たくさんの思い出や心残りが出来た。広さや水上住宅に感動したトンレサップ湖や、探検家の気分になれたバンテアイ・サムレ、おいしかったロックラックなど、書ききれないほどの思い出がある（写真5）。

心残りと言えば、タイガーというレストランのアイスも食べ損ねたことや、体調不良でプールに入り損ねたこと、路地裏の中華料理屋に行けなかったことなどだろうか。特に英語が話せないことになかなか聞きたいこともうまく聞けなかったことは今でももったいなかったなと悔やんでいる。英語が下手でもコミュニケーションはできるが、やはり言語が使えたほうが詳しいことも聞けたし、



写真6. エコビレッジで記念植樹後に

気の利いたことも言えるだろう。これを機会に英語を勉強して、留学生との交流会に参加したりしていろんな話がしたいなと感じている。最後に、アンコールインターンで初めて会ったにも関わらず、メンバーの皆と仲良く過ごせたことは本当に良かった。メンバーはもちろん、先生方、公団の方、チューター、アシスタント皆のおかげで楽しく充実した2週間を過ごせたことを心から感謝している（写真6）。

3) アンコールインターンシップを終えて

金沢大学人間社会学域国際学類 2年 東野香菜子 (グループ 2)

8月20日から9月3日までの2週間、カンボジアのシェムリアップにて、アンコール遺跡整備公団のインターンシップに参加した。私がこのインターンシップに参加しようと考えたきっかけは、1年生のとき、国際学類の授業でこのインターンシップの説明を受け、興味を持ったことである。アンコール遺跡という誰もが知るような世界遺産に関する仕事に携わるチャンスは二度とないだろうと考え、応募を決めた。また、もともと東南アジアの国々の人々の生活や考え方などに興味があり、カンボジア人と直接会話する機会が多いこのインターンを通し、東南アジアについての理解を深め、今後の学習につなげたいと思い参加した。

私たちが今回インターンシップとして参加させていただいたのは、アンコール遺跡整備公団の数多くの部門のうちの水管理の部門である。シェムリアップは東南アジア最大の湖であるトンレサップ湖に面していることもあり、古代から洪水で多くの被害を受けてきた。水管理の部門では、そのような洪水問題や干ばつ問題、住民の生活の中の水資源問題を解決するため、ダムのようなものを管理したり、住民に衛生管理の方法などを呼びかけたりしている。また彼らは水管理についてだけでなく、アンコール遺跡群周辺の景観を守るための管理などもしている。

業務初日、公団の方々の役割と、私たちのインターンシップでの活動の内容を聞き、次の日からモーターバイクなどで各地へ向かい(写真1)、フィールドワークが始まった。フィールドワークの後には公団のオフィスに戻り、理解を深めるためディスカッションをした。互いの母語は通じないため、説明、会話は全て英語である。相手の英語も自分の英語も完璧ではないが、ジェスチャーや絵を用い、なんとかディスカッションをした。



写真1. モーターバイク通勤

2週間のフィールドワーク、ディスカッションを通し、公団による水管理がいかに重要かを知った。カンボジアは雨季と乾季があるため、雨季には洪水が起こり、乾季には干ばつが起こる。雨季に降る雨を「バライ」という貯水池に貯めて洪水を防ぎ、灌漑や農業、生活用水などを考慮し、川に流れる水量を一年通して調節しなければならない。シェムリアップの地形は北東から南西にかけて緩やかな傾斜となっている。その方向にシェムリアップ川が流れるため、四方に土手を築いたバライでその水をせき止めれば、バライのゲートを開くだ

けで水が南西に流れ出るのである。モーターなどは使わないが、とても単純で効率的なやり方である。

さらに、公団による水管理は洪水防止だけでなく、アンコール遺跡群の維持にも大きく役立っている。バライに貯蓄された水が地下水として寺院の下の土を湿らせ、強くするのである。アンコール遺跡の寺院などを支えるには水分を含んだ強い土が欠かせない。実際に私たちは土の乾燥により崩壊した寺院を見せてもらった(写真2)。バライによる洪水や干ばつを防ぐ水管理は、住民の生活を守るだけでなく、アンコール遺跡群の維持にもつながっているのである。人の住む世界遺産にふさわしい方法だと感じた。

また、公団には水管理だけでなく、世界遺産としてのアンコール遺跡群の景観を守るという役目もあった。シェムリアップに到着し、最初に持ったのが「意外と田舎だ」という感想だった。世界中の人々を惹きつけるアンコール遺跡群のある街であれば、人口も増え、古い家、新しい家でびっしりであるに違いないと予想していた。しかし実際、家はまばらで、そのひとつひとつはカンボジアの伝統的な構造であった。公団はアンコール遺跡群周辺の景観や環境維持のため、新しく家を建てることを禁じている。また、その様式はクメール様式というカンボジアの気候に適した伝統的なものである。業務では、建築途中で公団によって中断させられた建物を見た(写真3)。広範囲にわたって建築物の増築を禁止することはあまりにも厳しく、無理があるのではないかと感じたが、それが、現在シェムリアップが世界中から多くの観光客を惹きつける理由のひとつなのだろう。景観を守りたいという意見と増築して現代的に暮らしたいという意見の対立、人が暮らす世界遺産ならではの問題であり、簡単には解決できないと感じた。

フィールドワークやディスカッションなどでの公団の方々との英会話を通し、ノンネイティブ同士が英語を用いて会話することの面白さを知った。日本人もカンボジア人も、母語ではない英語を使って、なんとか伝えようとする。難しい単語はお互い伝わらないことが多

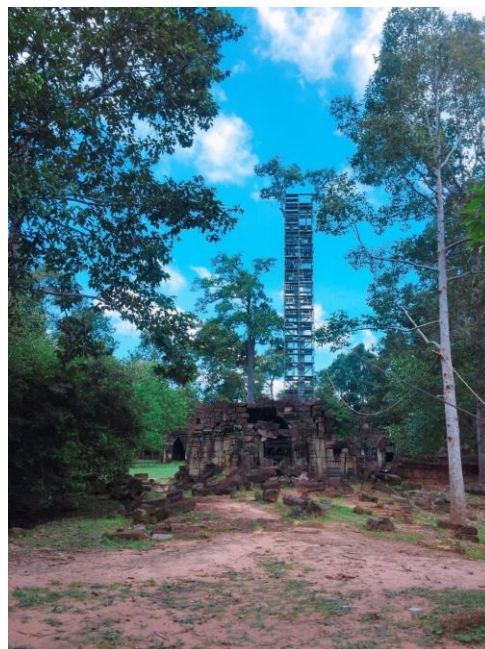


写真2. 土壌の水分不足で崩壊した寺院



写真3. 建築を中断させられた建物

いため、易しく言い換えたり、ジェスチャーや絵を用いたりもする。お互いが努力して理解しよう、理解してもらおうと必死であるため、言いたいことが伝わったときの達成感は大きい。綺麗な英語ももちろん大切だが、日本とアジア諸国のつながりが強くなってきた今日、観光の面などにはこのような英語がかなり重要だと思う。

カンボジアでの生活は、とても充実していた。ホテルに到着した初日は、土足であることやバスタブが無いことなどに驚き不安になったが、すぐに慣れ、快適に生活することができた。水道の水が汚いことを除けば、衛生面もさほど悪くなかった。食事には少し不安があったが、海外独特の臭みなどもなく、味付けがどこか日本料理に似ており、どれもとても美味しかった(写真4)。治安は想像していたよりも良かった。2週間のあいだでスリやぼったくりなどのハプニングは特に無かった。オフの日は近くのホテルのプールに行ったり、スパを体験したり、ナイトマーケットで買いものをしたり、トンレサップ湖に行ったり、ネイルをしてもらったりした。カンボジアというと発展途上国で現代的でないと思われがちだが、実際は伝統的な面を残しつつも新しくお洒落なカフェやレストランなどが多くあり、活気を感じた。



写真4. ある日のランチ

このアンコールインターンシップの私にとって最も良かった点は、カンボジアで暮らし、働いている現地の人々と直接関わる機会が多いところだった。業務の日のディスカッションだけではなく、一緒に食事をして会話したりすることで、もともと興味があったカンボジア人の生活や考え方に少し触れることができた。今回の経験を通し、実際に現地の人々と会話してみなければ発見できないことがたくさんあることを学んだ。

そして今回のインターンシップをきっかけに、東南アジアの人々の生活や考え方、若者文化などに対する興味がさらに大きくなり、今後の研究の対象にしたいと思うようになった。そのために、大学生活中に1年程度東南アジアで留学をし、実際に暮らして理解を深めていきたいと考えている。また、海外で働くということがどのようなことか、イメージすることができ、私の将来の選択肢のひとつとなった。今までの考えを大きく変えてくれたこのインターンシップを企画してくださった塚脇先生やその他の金沢大学や小松短期大学の先生方、現地で親切にいただいた公団の皆さんやその他のカンボジア人の皆さん、毎日を共に過ごしてくれた仲間の学生たちにはとても感謝している。

4) 海外インターンシップでの経験

金沢大学人間社会学域国際学類 3年 埴崎未緒 (グループ 2)

8月20日から9月3日までの間、アンコール遺跡整備公団のインターンシップに参加した。人生初海外、初インターンシップだった私にとって今回の15日間で見聞きしたものはすべて目新しく、興味深いものにもたくさん出会った。

私がこのインターンシップに参加しようと思った理由は3つあった。1つ目は日本以外の国の文化や価値観を、講義でただ知識として耳に入れるだけではなく自分の目で見てみたいと思ったからだ。2年前に当時アンコールインターンシップに参加した人たちの報告会を見学してからこのインターンシップにずっと興味を持っていたが、昨年は部活動を優先してしまったため、今年こそはと思い応募した。2つ目の理由は人がその中に住んでいるという非常に珍しい世界遺産について知りたいと思ったからだ。このインターンシップに参加して現状と問題点を公団の方々を見て回ることで観光客として訪れるよりも深くこの地について学び、また、カンボジアを近くに感じる事ができたと思う。最後の理由は、異国の地での滞在を通して自身の英語力の向上と今後の英語学習への動機付けにつなげたいと思ったからである。大学生活の中で普段出会う外国人と言えば金沢への観光客や金沢大学への留学生ばかりだ。いずれも日本への強い興味を持って来日していて、彼らの中には日本語を上手に操る人も多くいる。私がチューターや地域交流プログラムのアシスタントとして関わったことのある留学生はいずれも日本語が上手だったため、私は誰かと英語を使ってコミュニケーションを取る経験がほとんどなかった。英語を母語としない外国人と英語を使ってコミュニケーションを図り不自由を感じることで帰国後も英語の勉強へのモチベーションを保ちたいと考えたのだ。

今回私たちが業務に従事したアプサラ公団はアンコール世界遺産を維持管理する国内管理組織であり、常勤職員だけでも約800名を擁するカンボジア最大の公団である。今年のインターンシップは昨年と同様に、一か所の業務ではなくクメールハビタット(クメールの伝統建築のモデルハウス)や北バライ、西バライ(ともに貯水池)、ルンタエク・エコビレッジなどを皆で訪れてそれぞれの現状や問題点について学ぶという形だった。グループごとに一か所の業務に集中した方がより深く学べたのだろうと思うが、多くの場所を皆で見学して回ったことでいろいろな場所を知ることができ、他のインターン生の感想や意見を聞くこともできた。以下はそれぞれについての記述である。

最初に訪れたのはクメールハビタットだ。クメールの伝統建築はトップフロアとグラウンドフロアに分かれた高床式がその特徴である。これは熱帯気候のカンボジアに合った作りであった。クメールハビタットが現在抱えている問題は、何を使って作るかということだ。かつては木で家を建てていたが、木を伐採することが禁止されてしまい、コンクリートを木に見えるように色を塗って建てられた家もあるそうだ。また、木が高価になってしまったた

め伝統的な家は減ってしまう。私はそのことを時代の流れに合わせた変化であり、コンクリートの方が丈夫で長持ちするのでさほど問題はないのではないかと思い、「木で作られたクメールハウスとコンクリートで作られたクメールハウス、どちらがいいと思う？」という問いに対しコンクリートと答えた。しかし「きちんとケアをすれば 80 年持つという木に対してコンクリートは 50 年から 60 年くらいしか持たない上に、コンクリートを木に似せて塗っても手触りなどは同じではない」と返されて何も言えなくなってしまった。話をしてくださった公団の方の表情や話しぶりは伝統建築が時代の影響を受けて変化してしまうことへの少しの戸惑いを含んでいるように感じた。しかし、やはり金銭的な問題から木でクメールハビタットを建て続けることは厳しく、人々の気持ちと折り合いをつけるのが難しい問題だと感じた。

次に行ったのは西バライだ（写真 1）。バライは掘るのではなく土手を作って水を溜める点で池とは異なるということを何度も説明された。池を掘らずに土手を作った理由は、アンコール遺跡群は山と湖の間に位置していて北東の山から南西の湖にかけてゆるい傾斜になっているため、掘らずに土手を作れば水を利用する際に楽であること、昔はポンプがなかったため池を掘っても水をくみ出せなかったことの 2 つだ。西バライは 2.2 km×8 km という巨大な貯水池で、水の供給、地下水のサポート、灌漑利用、洪水防止の 4 つの役割がある。バライの中心にはメボンと呼ばれる小さな寺がある。メボンはバライの水位を測るために欠かせないものだ。

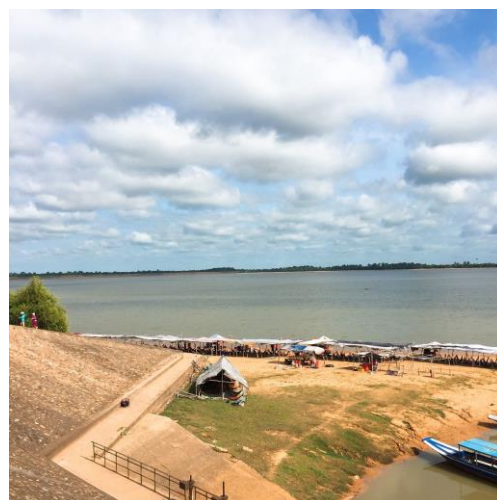


写真 1. 西バライ

次の日に訪れた北バライは、水の中に木々が点々と生えていて幻想的な光景ではあったが、その木々から発生したリンが水質汚染を招くという問題がある。北バライの水はアンコールトムシティの住民の生活用水に使われるため、こっそりと木を切ってはいるものの、現在の北バライの風景は観光客受けするものであるため、今後どうしていくかは悩みの種となっている。バライにおけるキーワードは地下水だろう。特に北バライ担当の職員の方は、なぜ地下水が失われることで建物が崩壊してしまうのかを丁寧に説明してくださった。そのおかげでアンコール・ワットなどの寺院の周りの水も地盤の土を支えるためにあるのだと分かった。ただしアンコール・ワットは寺院が山、周りの水は海として神が住んでいる世界を表すという象徴的な意味の作りでもある。

最後に訪れたのはルンタエク・エコビレッジである。かつては 1 万人だったアンコール世界遺産の中の人口は現在 13 万人にまで膨れ上がっている。世界遺産の中は家を新たに建てるのが制限されているため、余剰人口を遺跡の外に移動させる必要がある。そこで生ま

れたのがルンタエク・エコビレッジであり、伝統的なクメールの暮らしを再現することがコンセプトだ。近頃はこの村独自の色を打ち出して観光客を呼び込む試みがなされている。村は非常に可愛らしく、確かに観光スポットに良さそうだと感じた（写真 2）。しかし本来の目的である遺跡の中の住民の移住はなかなか進んでいない。その一番の理由が立地条件の悪さだ。市街地から遠く、学校や病院やマーケットが少ないため利便性に欠ける。高校や大学に行きたい子供がいる家庭はここに住みたがらないだろう。村人は決して裕福ではないので車は持っていない。もし村の中に学校を作ったとしても、高い学歴を求める子供は都市部に出ていきたいと願うだろうし、その際に車は必要になる。村の住民の送迎用バスがあればいいのではないかと提案はしてみたが、日本の過疎地域でも実現していないこの案はあまり現実的ではないかもしれないと感じている。



写真 2. ルンタエク・エコビレッジ

業務以外の時間や休日には蓮池やトンレサップ湖に行ったり、象に乗って遺跡を一周したり、マーケットやスーパーで買い物をしたり、ネイルやマッサージをしてもらったり、日本ではできない経験をすることができた（写真 3）。また、孤児院を訪問する時間もいただいた。日本でも小さな子供と関わる機会がほとんどなかったため相手をできるか不安だったが、パワフルな子供たちに引っ張られて帰るころには汗だくになるくらいに動き回って交流することができた。孤児院以外でも、私たちに花をプレゼントしてくれた古代集落の暮らしが続くとされるロヴィア村の子供たち、

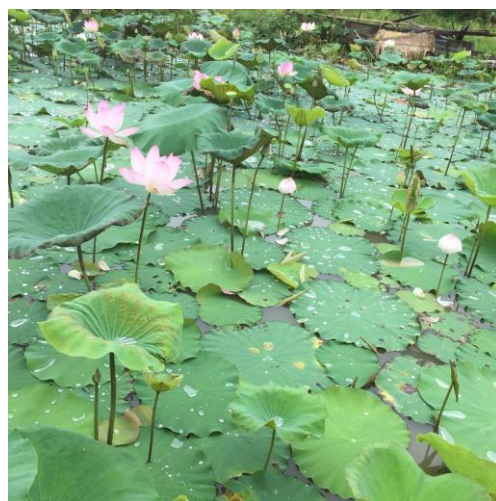


写真 3. 蓮池

目の前で蓮の花を咲かせて手渡してくれた蓮池の男の子、ルンタエク・エコビレッジでダンスを披露してくれた女の子たちなど、カンボジアでは多くの子供たちに出会ったが、彼らは皆素直でキラキラした瞳で私と目を合わせてくれた（写真 4）。村やマーケットで出会った大人たちは笑みを絶やさずに私たちに接してくれて嬉しかった。彼らに微笑み返ししながら、私はいつも塚脇先生がおっしゃっていた「愛嬌と低姿勢」という言葉を思い出していた。彼らの笑顔は彼らが幸せに暮らしていることを十分に物語っていたし、また、レストランで注

文と違うものが出てきてもつい許してしまうような愛嬌があった。カンボジアは想像以上に治安のいい国だったが、それも優しくて愛嬌のある彼らの存在のおかげだと思う。いつか私が旅行者としてまたカンボジアを訪れることがあるとすれば、その目的のひとつはカンボジアの人々の笑顔から元気をもらうことだろう。

今回のインターンシップでは一生のうちでもう二度とできないような貴重な経験を積むことができた。また、語学力の低さや勉強不足などからもどかしい思いをすることが多く、

その中で自分を見つめなおす機会を与えてもらった。2週間で気づかされた私自身の課題を克服し、人生の糧としていきたい。最後になってしまったが、このインターンシップに参加するにあたってお世話になったアプサラ公団の皆様、塚脇先生、木村先生、大学関係者の皆様、チューターの皆様、そしてインターンメンバーへの感謝の気持ちとともに報告書を締めくくろうと思う。



写真4. 花をくれた子どもたち

5) APSARA 公団でのインターンシップに参加して

小松短期大学地域創造学科臨床工学ステージ1年 杉田^{しほ}枝穂 (グループ3)

私は8月20日からの2週間、アンコール遺跡整備公団 (APSARA 公団) でのインターンシップに参加させていただきました。元々海外へ行くことが好きだった私は、学校で行われたインターンシップの説明会の際に「このカンボジアのインターンシップに参加してみたい!」、そう思いました。去年参加している同じ大学の森瀬陽人さん、田中麗那さんが、同じステージの先輩で仲良くさせてくださっていることもあり、たくさん話を聞かせてくださいました。その話を聞いて、さらに行きたいという気持ちが強くなりました。

私がこのインターンシップに参加したいと思った理由は3つあります。1つ目は、目的をもって海外経験ができると思ったからです。中学・高校在学時に姉妹校との交換留学の形で3度海外へ行きましたが、その時はほとんどが観光でした。そのため、決まった目的はあまりなく、ただ漠然と海外の人たちと交流しているという感覚でした。今回は遺跡の管理・保全に関する就業体験を行うという明確な目的があり、その中で、自分で考えて行動することが貴重な経験になると思いました。2つ目は、アンコール遺跡での活動を通じて、実際の世界遺産とはどのようなものなのか知りたかったからです。アンコール・ワット寺院は世界の人々が最も訪れたい世界遺産にも選ばれており、歴史的にも有名で教科書にも載せられています。そんな場所に私も訪れてみたい...そう単純に思いました。3つ目はカンボジアという国の福祉の状況について知りたかったからです。母の影響もあり、私は小さい頃から福祉に興味を持っていました。今まではあまり海外の福祉のことは考えておらず、なかなか目を向けてきませんでした。この機会にカンボジアという発展途上国の福祉を取り巻く現状を自分の目で確かめてみたいと思いました。

カンボジアへ行く前は、やはり衛生状態や治安など、不安がたくさんありました。何よりも心配だったのは言葉の壁です。APSARA 公団の方とのコミュニケーションは英語だと聞いていましたが、話している英語を辛うじて聞き取ることができても、話すことが苦手な私は、とても不安でした。また発展途上国ということや、東南アジアという地域であることから、周りからは病気や感染症などについてたくさん心配されました。

しかし、いざカンボジアで生活してみると、思っていたよりも過ごしやすい環境だと感じ始め、不安もどんどん消えていきました。ホテルもきれいで、周りには私たちの口にも合うレストランが何件もあり、毎日がお腹いっぱいの日々でした。さらにコンビニエンスストアや大型ショッピングモールもホテルから徒歩圏内にあつて、日常生活で困ることはほとんどありませんでした。一番の不安だった言葉の壁についても、現地の方々は私の拙い英語を一生懸命に聞いてくださいましたし、チューターのみなさんや金沢大学の先輩方にもたくさん助けていただいたおかげで、なんとか意思疎通を図ることができました。

APSARA 公団での業務は主に、水管理の中心となっている北バライと西バライ、開発中

のルンタエク・エコビレッジ、昔の建築様式が学べるクメールハビタットと 4 つのグループに分かれていました。実際には、2 グループ合同で業務を行ったり、全員で村を訪ねたりと集団で行動することが多く、多様な経験をさせていただきました。全ての業務を経験させていただいたことで、幅広い視野を持って、環境について、また日本で生活していると深く考えることの無い水管理の重要性について考えることができました。

私たちのグループは北バライを中心として活動を進めていました（写真 1）。北バライへ行く前、大きな水門を案内していただきました。ここで山から流れてくる水を調節し、適切な量の水を遺跡の土台固めに使用したり、農業用水に使用したりすることでした。また、大雨などで洪水になりそうなときは、この水門によって大量の水が市街に流れ出ていくのを防ぐ役割も担っていると聞きました。水門によって環境を維持し、アンコール地域の街を守るといふ、とても重要な役割を担っていることに感心しました。



写真 1. 北バライ

北バライは別名 Jayatataka と呼ばれており、東西 3.6 km、南北 930 m と、西バライに次ぐ大きさの貯水池で、真ん中にはニャックポアンと呼ばれる寺院があります。アンコール遺跡群に存在する水の貯水が完了しているバライでもあり、生活用水の為の貯水はもちろんです。遺跡を支えるための貯水となっています。私は初めてその話を聞いたときは、全く意味が分かりませんでした。話を聞いていくと、土に水を含ませて地盤を固めており、その水は多くても少なくてもダメで、適度な水量が必要なのだということでした。水と砂によって強度を固めることが、遺産の建築構造上重要で、これらが水管理における重要な業務のひとつだと知った時はなるほどと思いました。また、北バライの観光地としての魅力を高めるための工夫について、話し合いや意見交換も行いました。公団の方々は観光客を呼び込むためにはどうしたらよいか、私たちの意見を聞いてくださり、実現できることなのかどうかを真剣に考えてくださっていました。

現在アンコール遺跡群の中では、家の新築や一定の高さを越える建築物の建設は景観保護の為に禁止されています。しかし、人口が増えて続けているため、違法建築物が増えてきているのも事実のようです。公団としては、そういった状況を改善し、余剰人口を郊外へ移すため、新しく村を作って人々を移動させる



写真 2. ハグしてくれた男子と

ことを進めています。ルンタエク・エコビレッジと呼ばれるこの村は、古代の村を再現する試みでもあります。私たちは滞在中この村のモデルとなったロヴィア村も訪問することができました。ロヴィア村を見学させていただいたとき、村にはたくさん子ども達がいて、人懐っこく可愛らしかったことがとても印象に残りました。子どもたちはみな小さい頃から一緒に育ってきているため、仲が良いのはもちろんのこと、下の子の面倒見もとても良いと感じました。私たちにもたくさんお花をプレゼントしてくれたり、ハスの実を分けてくれたりと...優しい子ばかりでした。別れ際、懐いてくれていたひとりの男の子がハグをしてきてくれたことはとても嬉しく、泣きそうになりました（写真 2）。このときのことはいつまで経っても頭の中から離れません。

様々な村や地域を訪れる中で、最も印象に残ったことがあります。それはタエック集落という所でトイレの設置を中心とした衛生管理についての講習会が行われた時です。インターンシップに参加した理由でも述べたように、私は福祉についての興味が大変強かったため、この時の講習会の様子から学ぶことはとても多かったです。トイレの設置の問題は衛生面の問題に加え、費用面での問題、伝染病の問題など、たくさん問題が関係していることが分かりました。トイレの設置には、現地の人にとって金銭的な負担がかかってしまうことから、反対する人や設置を渋っている人が多いようです。一時的な費用の負担が長期的に大きなメリットをもたらすこと、設置の必要性を説明している様子を見て、これが発展途上国で起こっている衛生問題のひとつなのかと思いました。病気にかかって高い治療費を払うよりは、トイレを作って大切に、衛生環境を整えていく方がよっぽど効果的なのだということ説得している様子がとても印象的でした。また、トイレを済ませた後や食事前の手洗い、特に石鹸を使用して手洗いをしていくことが大切だと教えている光景を見て、私たちが当たり前と思っている知識が、決して当たり前ではないということ強く感じさせられました。

カンボジアでは業務以外でも、大変充実した日々を送ることができました。業務中も、業務以外の時間もたくさん遺跡を見ることができ、今まであまり目を向けてこなかった遺跡や歴史などにも興味を持つようになりました。ニャックポアンでの業務では一般の観光では立ち入ることのできない場所へも入らせていただき、遺跡の裏側を見ることができてとても新鮮な気持ちでした。休日はみんな船に乗り、水上住宅を見ながらトンレサップ湖を周遊したり、ゾウに乗って遺跡の周りを歩いたりもしました。人生初めてのゾウは思ったよりも揺れてびっくりしましたが、普段は見ることのできない高さの景色を見ることができて気持ち良かったです。日本では口にすることの無いカエルやココロギを食べた



写真 3. お昼に食べたカエル

り（写真 3）、格安の値段でネイルや買い物をしたり、カフェでくつろいでみたりプールで騒いだりもしました。また、短い時間ではありましたが孤児院にもお邪魔させていただき、カンボジアの中高生とも触れ合うことが出来ました。これまでの自分が経験していなかったことをカンボジアで満喫することができ、とても充実していました。また、この経験を今回のインターンシップメンバーで楽しめたことがより一層楽しさを増したのだと思います。

2 週間のインターンシップを通して、本当にたくさんの貴重な経験をさせていただきました。その経験からアドバイスをもらい自分自身が成長できた部分も大いにありました。しかし、その中でも様々な課題を見つけることができました。最後の公団の方とのディスカッションでは、今回の業務について様々な質問を受けましたが、思い通りの英語が話せず、自分の思いを十分に伝えることが



写真 4. 最後のディスカッション

出来ませんでした（写真 4）。自分の積極性を生かすことが出来ずとても悔しかったです。思ったことを口にできないもどかしさから、終わってから涙を流してしまいました。これは今後、英語を勉強していく中で自分の糧になると思っています。この悔しさをバネに、さらにたくさんの海外の方とスムーズに話すことが出来るようになりたいです。

2 週間という短い期間の中で、たくさんの人との出会いがありました。訪ねたそれぞれの村ではもちろん、近くのホテルの従業員の方やカフェの店員さん、宿泊させていただいたホテルのフロントの方々、様々な場面でクメール語も教えていただきました。日本で普通に生活していたら出会うことの無かった人たち、することの無かった経験、深く考えなかった生活への意識など、様々な新しい経験に溢れたこのインターンシップに参加させていただいて本当に良かったです。公団の方々や、インターンシップに参加したメンバーに出会えたことも自分にとってプラスになる出会いとなったと感じています。充実した密度濃い 2 週間になり、とても幸せな時間を過ごすことが出来ました。今後もこの出会いと繋がりを大切に、いつかまたカンボジアを訪れたいと思います。

最後に、私たちを受け入れてくださった APSARA 公団副総裁 Hang Peou 氏を始めとする APSARA 公団の皆様、貴重な機会を与えてくださった小松短期大学の米谷恒洋学長、事前説明会から帰国までお世話になった塚脇真二先生、木村誠先生、快く送り出していただいた臨床工学ステージの先生方、様々な準備をしてくださった庶務課西田友紀さん、終始私たちを安全に送り迎えしてくださった運転手の So Pheng さん、チューターとしていつも気にかけてくださった麻実さん、綾女さん、美乃さん、アシスタントとして支えてくださった理人さん、2 週間で共に過ごした大好きな 9 人のメンバー、送り出してくれた家族に心から感謝しています。本当にありがとうございました!!!

6) カンボジアでの 2 週間

金沢大学人間社会学域国際学類 2 年 洪ハンナ (グループ 3)

8 月 20 日から 9 月 3 日までの約 2 週間アンコール世界遺産整備公団インターンシップに参加し、大学生活の中で最も刺激的で思い出深い日々を過ごした。まず、このインターンシップに参加しようと思った動機は 1 年生のときに授業内で塚脇先生からインターンシップの説明を受けたことと、実際に参加した上級生から業務の内容や現地での生活を聞いたことだった。説明を受け、アンコール遺跡群は世界遺産であるにも関わらず人々が遺跡内に暮らしており、この稀な状況に必要な業務を現地の人々自らが行っているという事実を知った。その事実を知り、アンコール遺跡群がどんな状況なのかまたアプサラ公団の業務の様子を実際に自分の目で見て確かめたいと強く感じインターンシップに参加することを決めた。また、わたしは住民支援に興味をもっていたため、このインターンシップに参加することで遺跡内の住民支援に関する知識を得られるのではないかと思ったことも参加の動機である。さらに、現地の食や生活様式も体験したいという思いもあった。

実際に自分がインターンシップに参加し、様々な体験をすることができ、深く学ぶことができた。業務は北バライチーム、西バライチーム、ルンタエク・エコビレッジチーム、コミュニティチームと担当を決め行なったが、担当場所での業務はもちろんのこと、自分の担当場所以外での業務や、インターンシップ参加者全員での業務も多くたくさんの分野について学ぶことができた。

まず、インターンシップで深く学んだことのひとつは、水資源とその仕組みについてである。アンコール遺跡群の中にあるバライについて、実際に行って見るだけでなく、その水がどこから流れてくるのかまたバライの水はどのような役割をもっているのかなども学んだ。バライとは地面を掘ってつくられるものではなく、本来の地面のままで堤防を設けそこに水をためておく人工水域のことである。わたしは北バライ担当だったので北バライについて特に詳しく学んだが、なぜ水が遺跡に必要な不可欠なのかという建築学的なことも学んだ。遺跡群内の遺跡の周りにはお堀があり、そのお堀の水は土でできている遺跡の基礎を強くし固め遺跡が崩れるのを防ぐ役割をしているようだ。遺跡の周りにお堀についてそのような役割があるということを考えもしていなかったため、この説明を受けたときはとても感心した。バライはそのお堀内の水をためておく役割だけでなく、人々の生活を支え、洪水を防ぎ、田に水を供給し、自然環境を守るなどの大切な役割をもっていると学んだ。

また、バライは、特に北バライについては景観の美しさから観光客にとっても人気があり、観光資源としても大切な役割をもっている。しかし、バライは堤防を修繕しなければならないことや、北バライはバライ内にある木の景観維持と木によって水質汚染してしまうという様々な問題があることも学んだ。わたしは北バライと西バライどちらも行って見て、西バライもとても大きく静かで素敵だと思ったが北バライを初めて見たときの美しく幻想的な

景色がとても印象に残っており、北バライ派である（写真1）。



写真1. 北バライ

次に、インターンシップで深く学んだことのひとつは、遺跡内の人々の暮らしと村の人々の暮らしについてである。業務の中でカンボジアの伝統的住居について学んだが、その維持について問題があることを知った。遺跡内では世界遺産であるため景観を維持しなければいけないが、伝統的住居を建てるための材料である木材は遺跡内の木を切り倒すことは禁じられているため木材を入手するには高い経費がかかってしまう。そのため、人々はセメントで家を建てペンキを木材に近い色を塗り木材風になっている。カンボジアの伝統的住居を学んだのと同じ日にこの問題についてのディスカッションを行ったが、木造の正式な伝統的住居を建てることはもちろん景観維持のために必要であるが、住民たちの負担を考えるとセメントで伝統的住居のような見た目にせざるを得ないとも思われ、とても難しい問題だと思った。

さらに、遺跡内では人口が増加しているが家を増築することは禁じられており、そのために違法な建築物が建てられていることも知った。また、村の衛生問題についても深刻だと思った。タエク村を訪ね、村人に対するトイレの講演を一緒にきいた（写真2）。村では人々は森で用を足し、家にトイレがないことが当たり前になっておりトイレが衛生環境を守るためにいかに大切か知らない人が



写真2. トイレについての講演

多い。この現状を知り、日本ではトイレがないなんてことはありえないことであつたのでまず驚いた。しかし、村の人にとっては、トイレを建てるよりスマートフォンを持つためにお金を貯めたいという気持ちをもっていたり、やはりトイレの知識そのものが乏しかったりという厳しい状況なのだと思った。世界遺産と人々が共存しているからこそその問題やカンボジアの村での問題など、日本で勉強しているだけではきっと知らなかったであろう問題について学びそれらについて深く考えることができ、とても刺激を受けた。

インターンシップを通して、アンコール遺跡群の現状やアプサラ公団の方々がどのような業務を行っているのか実際に自分の目で見ることができ、また自分自身もその業務に参加することができ、わたしのインターンシップ参加の動機であつたことは達成できたと思う。また、遺跡の住民だけでなくその他の村に対する公団の衛生についての講演を行ってい

ることや、遺跡内の人口増加に伴い増加した人口を移すためにルンタエク・エコビレッジをつくり住民に様々な職を提供するなど、住民のためにたくさんの活動を行っていることがわかった(写真3)。公団の方々は遺跡内だけでなく遺跡にまつわることのすべてについての業務をしていると肌で感じることができた。様々な業務を行うため、対処しなければならない問題も多いということもわかった。わたしは問題を知るだけでなくその問題への解決策を考えることで大きく成長することができたと思う。



写真3. ルンタエク・エコビレッジ

インターンシップでは業務以外にも食や交通、街の様子など現地の生活様式も体感することができた。業務後や休日には買い物やマッサージに行くなどとても楽しむことができた。カンボジアで食べた料理はどれも美味しく毎回の食事がとても楽しみだった。アモックやロックラックなどのカンボジア料理だけでなく、タイ料理、洋食など様々なジャンルのレストランがありカンボジアでは何でも食べられるなど思った。他にもシェイクがとてもおいしく、ほぼ毎回の昼食でシェイクを飲んだ。日本に帰ってからわたしはタロイモのシェイクをととても恋しく感じる。また、カンボジアにはとてもオシャレなカフェがあり、とても驚いた。Blue Pumpkin というカフェは特にオシャレで2階がとてもくつろげたので回転率は悪いが日本にもできたらいいなと思った(写真4)。



写真4. Blue Pumpkinでのアイスタイム

またナイトマーケットやパブストリートのとても賑やかな様子はとても印象的だった。夜遅くまで観光客が買い物をしたり、食事をしたりしていて、少なくとも金沢ではそのような様子は見られないと感じた。シェムリアップは観光都市だからか、とても客引きが多くお店の人や売り子さんたちは様々な言語で観光客に話しかけていたのが印象深かった。たくさんアジア人が来ていたが、お店の人は日本人、韓国人、中国人をすべて見分けて客引きをしていたのでそれぞれの国の人の特徴をもっているのだなと思っておもしろいと感じた。業務で移動する際にも乗ったが、カンボジアでは多くの人がモーターバイクを利用しており、交通量も多く見られた。モーターバイクでの移動は、はじめは落ちそうな気がして少し怖かったが慣れると風をきって走るのがとても気持ちよくバイクでの移動がとても好きになった。カンボジアは全体的に日本より物価が安く、安さにはじめは驚いていたがカンボジアの

物価に慣れてしまったので日本に帰ってからしばらくは日本のものがとても高く感じた。このようにカンボジアの生活様式を体感することができ、観光客としてもカンボジアを楽しむことができた。

さらに、カンボジアでの 2 週間で特に印象に残っているのは現地の方々がとても温かく、優しくわたしたちに接してくれたことだ。村を訪ねたときには、異国から来たわたしたちに対して、優しくほほえんでくれ快く写真をとることを承諾し、挨拶をすれば必ず返してくれた。街中では客引きのためということもあるが、知っている日本語を笑顔で言って明るく話しかけてくれた。公団の方々



写真 5. 村の子どもたちと

はわたしたちに丁寧に業務を説明してくれ、積極的にコミュニケーションをとってくれた。特に伝統的なカンボジアの村を訪ねたとき、村の子どもたちがとても人なつっこく、常にわたしたちの後ろをついてきていたり、花をプレゼントしてくれたりしたことはとても印象に残っている (写真 5)。この 2 週間で現地の方々との交流はわたしの中でとても忘れられないものとなった。

今回、アンコール遺跡整備公団インターンシップに参加し、このインターンシップでしか経験できないことをたくさん経験できた。この 2 週間は新たなことをたくさん学び、多くのことを体感することができ、本当にかげがえのない時間を送ることができた。また学ぶだけでなく、カンボジアでの学びをどうやってこれから広めていくか、活かしていくかという課題とコミュニケーション力をさらにつけるという課題をみつけることができた。またいつの日か新たに成長した姿でカンボジアに帰りたと思う。

最後に、このインターンシップを無事に終わることができたのは、優しく指導して下さった塚脇先生、木村先生、わたしたちを常に気遣ってくれたチューターのみなさん、わたしたちを受け入れて下さった公団の方々、インターンシップに関わるすべての方々、送り出してくれた両親、そして一緒に頑張ってきた 2017 年度参加学生のみんなのおかげである。深く感謝申し上げます (写真 6)。



写真 6. 最後の業務後の 1 枚

7) アンコールインターンシップを終えてーカンボジアとの出会いー

金沢大学人間社会学域法学類 3年 米沢諒哉 (グループ 3)

今回、8月20日から9月3日までの2週間、カンボジア国立アンコール遺跡整備公団(以下、アプサラ公団)での海外インターンシップに参加した。このインターンシップに参加した動機として、私がかねてから3年生の時に、自分の適した進路を選ぶための能力を養うインターンシップに参加したいと思っていた。また、去年の夏休みにニュージーランドで約1か月間、初めての語学研修をしてから国際関係に興味を持つようになった。そこから国際交流が好きになり、様々な国際交流をしているうちに、海外を視野に入れながら今後生活をしていきたいと思った。そこで、就業体験であるインターンシップが海外でも行える海外インターンシップの存在を知り、かねてからインターンシップに参加したいという思いと国際交流をしていきたいという思いが重なって、海外インターンシップに参加したいと思った。

この海外インターンシップの説明会に参加した時、まず世界遺産でインターンシップができるのかという驚きと感動があり、心惹かれ、純粋にやってみたいと思った。業務内容の説明を聞いた時に、地域社会関係でエコビレッジのマスタープランの作成に真剣に取り組む様子が伺え、実際にエコビレッジを作るにあたって責任を持って議論をしたり、案を考えたりなどとてもやりがいのあるプログラムだと思い、本当の就業体験をこの身で感じたいと思った。また、観光開発関係で現地の人々の話を聞いたりして国際交流をしてみたいと思った。とても充実した内容だと思いこのアンコール遺跡整備公団インターンシップに参加した。心の中では、過去に塚脇教授の授業を履修していた時に、カンボジアの話をよくしてくれていて、カンボジアに行きたいという強い思いもあった。

現地では、アンコール遺跡群のある広大なエリアを管轄しているアプサラ公団にお世話になりインターンシップを行った。業務内容として、大きく北バライ貯水池の環境保全・観光整備事業、西バライ貯水池の環境保全・観光整備事業、ルンタエク・エコビレッジの整備事業、クメールハビタットでの伝統的建築事業などがあつた。その中で私のグループは北バライの担当を従事した。今年も例年と違い、ひとつの業務をひとつのグループのみが担当するのではなく、各グループが全ての業務を経験できた。

私たちのグループは北バライを担当した。北バライ(別名ジャヤタタカ)はアンコール・トムの北東に位置し、バライの中にニャックポアンという寺院が存在する(写真1)。ニャックポアンまで

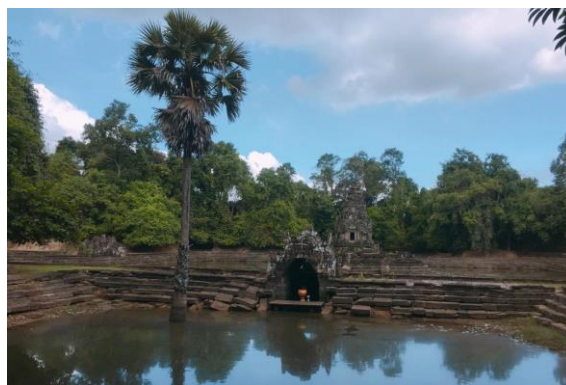


写真1. 北バライのニャックポアン

はひとつの橋を渡っていく。そもそもバライとは貯水池のことであり、カンボジアの人々の生活や遺跡を保護する働きがある。北バライの景観はすごく美しく、橋の真ん中から周りを見渡すと左右に水面が広がっている風景が見える。水面には蓮や木が生えている。橋を渡っていくと、ニャックポアンにたどり着く。ニャックポアンの周りも木が生い茂っており、そこだけ現実世界から別の世界に移動したような幻想的な空間が広がっている。景観もよく、観光客が多い場所であった。

北バライで業務を行っているといろいろなことが学べた。まず、バライとスランの違いである。カンボジアに来て1日目にスラ・スランという場所を訪れた。そこにもバライと同様水が張っており、一見違いが分からない。しかしバライとスランには違いがありバライは土手が人工的につくられ、水をためる場所は最初から自然にあるのに対して、スランの水をためる場所は掘って人工的につくられたという違いがある。また、北バライ近くの水路を調節するダムも学び、シェムリアップ川の水面を管理する働きとアンコールの区域を守る働きがあることが分かった。

一番の学びは、なぜアンコールの水は重要なのかということである。アンコールの区域にはバライや水路、ダム、シェムリアップ川など水に関係するものが多くある。それらの水はもちろんカンボジアの人々の生活に欠かせない役割を担っているが、それだけではない。アンコールの水は遺跡を保護する観点から非常に重要なのである。アンコール遺跡群と呼ばれるように、たくさんの遺跡が存在する。遺跡の建築的視点から、水がないと遺跡の土台がもろくなり、結果として壊れたり、劣化したりなど損傷を受けやすい。そのため、遺跡の土台には砂の層があり、泥団子と同じ原理を利用して、砂を水で固め、土台の強度を強くする。したがって、遺跡を保護するのに水が重要である。しかし、水が多すぎても良くないので、水を調節・管理するダムなども必要だと分かった。北バライを担当して、すごく実務的な調査や業務を行え、世界遺産の下でインターンシップが体験でき、とても価値ある時間だった。北バライは観光客も多く、観光の面からもいろいろと考えることができるので、環境保全と観光整備の融合を、北バライをお手本としつつ、いろいろな場所で考えていきたい。北バライ担当の **Nhem Reaksmeay** さんお世話になりました。

前に述べたように、今年も例年と違い、各グループが全ての業務を経験できたので、それらの内容についても話したい。まず、西バライについて、西バライも北バライと同じくバライである。アンコール・トムの西側に位置している。同じバライなのだが、見た目は全然違う。西バライの方が北バライよりも大きく広大であった。しかし、北バライほどの観光客はいなかった。西バライの水は澄んでいて、きれいだった。土手も大きく、人の手や機械によってつくられていることが分かった。西バライ自体北東から南西に向かって傾斜がある関係で、左右の土手の大きさも違っている。8月は北東の方が干からびていて、木も生えていたのだが、10～11月になると雨季になりバライいっぱい水がたまる。土手の作り方や、西バライの灌漑システムなどを教えてもらい、北バライ・西バライそれぞれ特徴があるのだと感じた。見た目から、働きからといろいろ違うふたつのバライを調べられ、お互いの特徴

が比べられ良かった。

次に、クメールハビタットについてだが、インターンシップ中にクメールハビタットというカンボジアの建築の歴史が展示されている場所を訪れた。歴史的にクメールの家は 5 種類あり、気候・文化・活動がポイントである。どれも木造で高床の作りであった。豪華そうなものもあれば、素朴なものもあり、文化の歴史が垣間見えた。屋根の作りが時代によって特徴があり、高いものから低いものへと変わった。現在カンボジアは家を建てるために木を伐採したらいけないという決まりがあり、木造の家からコンクリートで家がつくられている。ただ、木造文化の見た目を保全するために、外側を木の色を塗り、木造っぽく見せていることが分かった。古くからの文化を壊さないように工夫していることが学べた。

最後に、ルンタエク・エコビレッジについて、ルンタエク・エコビレッジはルンタエクにあるエコビレッジというひとつの村である。アンコール区域の人口が増え、その移住先の一つがルンタエク・エコビレッジである。10 年前からの計画であり、10 年前は無機質な土地だったが、現在では人もいて、家もあり、寺院もあり、農場もあり、自然もあってと上手く機能している村である。自給自足の生活で、ひとつの家庭にひとつの農園がある。学校もあり、60 人の生徒が勉強をしている。ルンタエク・エコビレッジでは村の女の子による伝統的な舞踊を見せてもらったり、レストランで村の農場で育てた野菜などを頂いたりした。とてもおいしかった。帰る前に植樹をして、自分の名前の木を植えた。すくすくと育って、大きくなってほしい。ルンタエク・エコビレッジでは自然を傷めない生活など、日本ではあまり見られない生活を見ることができ、必ずしも文明が進んでいることが良いわけではないのだと感じた。実際、村人たちは笑っていて幸せそうだったので、日本の生活が全てではないのだと思った。

カンボジアで 2 週間過ごしていると、カンボジアの生活や環境、食、文化、人々などいろいろなことが発見できた。インターンシップ中に何回かカンボジアの村を訪れたことがあった。ホテルの周りの都市とは違い、村は高層な建物などなく、家と寺院と村人が行っている市場などがあった。市場には野菜や果物、飲料水のほか、その場で調理した鶏肉や魚などがあった。魚の上に小バエが飛んでいたりなど、衛生的に大丈夫なのかなと疑問に思う食べ物結構あった。塚脇先生に買ってもらったランプータンという果物はおいしかった。

村には野良の猫や犬、鶏が多くそこら中にいた。猫は人懐っこく、近づいてもあまり逃げなかったのが、日本の猫と違うなと思った。昔はなかったのだが、最近の家は塀ができていくということを知り、プライバシーや安全面から見て必要なものではあるが、塀のない昔の暮らしも、村人たちがお互いを信頼しているという表れなので、心が豊かな国民性であると思った。

村には子供たちも多く、一緒に走ったり、抱っこなどをして遊んだり、写真を撮ったり、お花をくれたりなどととてもかわいく、純粋な子たちばかりで癒されると同時に、カンボジアの優しい国民性の元が感じられた (写真 2)。タエク村を訪れたとき、ちょうどアプサラ公団が村人に対しトイレの設置の講演会をするときで、講演会の様子、村人の生の声や反応な

ど、このインターンシップでしか体験できない現地感覚が味わえ、刺激を受けた。ホテルの周りやナイトマーケットの周りの景観と村の景観は全然違い、ひとつの都市でもこれほど差があるのかと思った。これが単純に格差と言っているのかどうかかわからないが、都市と村で環境がかなり違っていたので、格差が問題なら、その格差を是正する政策があるのかどうか気になったし、その策を考えるのも面白そうである。



写真 2. 村の子どもたちと

国民性に関して、カンボジアで2週間過ごしていて終始カンボジア人は優しいと感じた。村を訪れたときも、マーケットで買い物をしているときも、トゥクトゥクを利用しているときもカンボジア人の優しさが滲み出ていた。挨拶をしたら、挨拶を返してくれるとても暖かい国であった。孤児院に寄った時があるが、その孤児院にいた子供たちもしっかり挨拶をしてくれたし、一緒に楽しく遊んでいるうちに、こっちも汗をかくほど熱中したりなど元気な子供たちだった。日本の折り紙と一緒に折って、ハートを作り合ったことは今でも忘れられない。

カンボジアでの食事毎日の楽しみのひとつであった。塚脇先生が連れて行ってくれたところだからかもしれないが、カンボジアでのご飯はとてもおいしかった。カンボジアにも中華料理屋さんやファストフード店などがあり、食の多様化が感じられた。中でも、結構な頻度でお昼ご飯お世話になったフォーや、日本であまり見られないクーシンサイが絶品であり、日本に帰って来てから恋しくなるほどおいしい料理であった。パブストリートの Tiger でご飯を食べたのも良い思い出である。分らず頼んだ B52 というお酒は火がつきそうなほどに強く、友達に助けをもらいながらも四苦八苦して飲んだのが懐かしい。また、マーケットで虫を食べたのも強く印象に残っている。テレビなどで虫を食べるのを見たことはあったのだが、まさか自分がカンボジアで虫を食べるとは想像もつかなかった。見た目はバッタやコオロギみたいな虫で、素揚げだったので形がそのままであった。頑張ってみると、食感がカリカリとしていて、味はガスエビのような味だった。まずいことはなく、見た目が虫なだけで味はしっかりしていた。案外パクパクと食べることができ、自分に驚いた。しかし、現地で現地の食べ物に挑戦することは現地を知るのに大切なことだと思うので食べられてよかったし、これからも挑戦していきたい。シェイクはどこもとてもおいしかった。毎日のように飲んでいて、食で十分に楽しめてよかった。

もちろん、せっかくアンコールに来たのだからアンコール・ワットに行った(写真 3)。人生のうち一回は絶対に来たいと思っていて、このアンコールインターンシップで幸せなことにインターンシップをしながら、アンコール・ワットに行けてよかった。私たちが行っ

た日は残念ながら雨が降っていたのだが、それでもアンコール・ワットに入れ、説明を聞きながら回れて面白かった。初めて見るアンコール・ワットには圧倒され、心が響くほど感動した。中は思っていた以上に広く、高かった。聖池からのアンコール・ワットも見ることができ、堪能できた。アンコール遺跡群を回って、一番好きな遺跡はタ・プロームであった。遺跡と自然の混ざり具合がとても美しく幻想的であり、違う世界にいるという感じがした。木は遺跡を守る働きをしているので、遺跡にとってかけがえのないものであり、遺跡と自然のペアで初めてひとつのものをなしているところが個人的に好きである。タ・プロームで植樹まで体験でき、自分の植えた樹が世界遺産の樹として成長してほしい。



写真 3. アンコール・ワット

カンボジアに行く前は、カンボジアのことを全然知らなく、東南アジアの一国で発展途上国とか、貧困とか、子どもたちが学校に行けないなどのマイナスなイメージが多かった。また、行く前に親に地雷に気を付けてなど言われ、危ない国とも思っていた。しかし、カンボジアで2週間過ごし、生の空気を吸い、生活や環境、人々を見ていると全然マイナスなイメージはなくむしろご飯がおいしかったり、遺跡が美しかったり、人々が優しく暖かい国であったりとこれまでのイメージのカンボジアではなく、本当のカンボジアを感じる事ができた。地雷なども無く、危険な状況にも陥らず、安全な国であった。実際に行ってしか感じる事のできないカンボジアを知れただけでも大きな収穫であった。固定概念にとらわれるのではなく、経験したことで物事を考えることが大切である。この肌身で感じたカンボジアを親や友人などに伝えて、カンボジアの素晴らしさを伝えたい。

アンコールインターンシップを通して、多くのことが経験でき、学べた。海外インターンシップということもあり、現地では英語でコミュニケーションをとらなければならない。初めのころは英語を聞き取ることが難しく、専門用語も多く大変だった。英語を聞き取り、自分の頭の中で整理して、それをまた英語で話さなければいけないので、時間もかかりコミュニケーション自体一苦勞だった。しかし、ずっと英語を聞いていると、徐々に聞き取れるようになり、最後の方は自分から質問や意見を述べるなど、コミュニケーションができたと思うので、インターンシップでの成果である。

また、アプサラ公団の人や村の人、ホテルの従業員、マーケットの店員さんなど現地の人々と国際交流ができた。カンボジアの今の生の声が聞けたり、カンボジアの現状からお土産品、値切り交渉など幅広い内容の会話ができ、こちらも日本のことを話したりなどいろいろな交流ができ、参加動機のひとつである国際交流が達成された。インターンシップの点でも、世界遺産の下で実務的な調査や見学ができ、普通では体験できないことまで行えたこと

は非常に価値のあるものだった。ひとつひとつの業務に責任をもって取り組み、考え、意見交換し、学び、活動でき、100%のインターンシップを体験できた。世界遺産の下でインターンシップを行えたことは自分の誇りです。

2週間を思い返してみると、キャパシティーオーバーなほどいろいろなことができた。インターンシップができた、アンコール・ワット、タ・プローム他多くの遺跡を見に行けたり、トンレサップ湖でクルージングしたり、毎日おいしいご飯を食べたり、トゥクトゥクに乗ったり、バイクを二人乗りしたり、ヘナタトゥーをしたり(写真4)、マッサージをしてもらったり、ナイトマーケットで



写真4. ヘナタトゥー

お買い物したり、象に乗ったり、野生のサルに会ったり、虫を食べたり、いろいろな人と話したりなど書ききれないくらい多くのことができた。カンボジアに行く前までは知らないこともたくさんあったが、2週間カンボジアで濃すぎるほどの毎日を過ごすことで、新しいことが次々と感じられ、カンボジアが好きになった。カンボジアと出会い、カンボジアのことを少しでも知れたことがこの2週間の最大の成果である。2週間何でもでき、とても有意義なものであり、価値のある最高の時間だった。

今後、海外で生活するとしてもしないとしても、まだまだ自分の英語は力不足だと痛感したので、英語の勉強を継続したい。それとともに、行ったきりになるのではなく、日本に戻ってからが大事だと思うので、いろいろな経験・就業体験を自分の進路に活かし、現地で感じたリアルなカンボジアを親、友人、周りの人に発信していきたい。

最後になりますが、たくさんお世話になった塚脇先生、木村先生、チューターの麻実さん、綾女さん、美乃さん、理人くん、運転手のペンさん、素晴らしい経験をさせてもらったアプサラ公団の皆さま、最高のメンバーたち、この事業に関わって下さったすべての人に心から感謝申し上げます(写真5)。本当にありがとうございました。オークンチュラン！！



写真5. みんなとの写真

8) カンボジアでのインターンシップに参加して

小松短期大学地域創造学科航空・観光ホスピタリティステージ1年

森田^{まなか}愛加 (グループ4)

この2週間という期間はあっという間で、とても充実していました。私にとって、カンボジアでのインターンシップは初めての海外経験であり、初めてのインターンシップでした。不安や期待でいっぱいの中、2週間がスタートしました。

私はこのインターンシップに参加するかずっと迷っていました。募集期間が過ぎた後もやっぱり参加したいという気持ちが消えず、再募集の時にやっと行動に移すことができました。参加が決まってからは不安になることが沢山あり、やっぱりやめといたほうがいいのかも、とネガティブな考えに陥ることもありました。しかし、2週間という短い期間でポジティブに物事をとらえられるようになりました。参加に迷っていた時の自分に「行動して良かったよ！」と伝えに行きたいと思います。

参加が決めた時点ではカンボジアやアンコール世界遺産についての知識が少なかったのですが、事前研修を通してカンボジアについて知ることができました。アンコール遺跡群の遺跡の名前、何故出来たか、地理的条件、アンコールワットの壁に描かれた乳海攪拌のストーリーについて。すべて初めて知ることでした。知れば知るほど早くカンボジアに行きたい、実際に行って見てみたいという気持ちが出てきました。

2週間のうちに沢山の場所を訪れることができ、多くの人と関わることができました(写真1)。西バライ、北バライ、ルンタエク・エコビレッジ、クメールハビタット、この4ヶ所で業務を行いました。業務初日は西バライ(Western Baray)へ行きました。西バライはアンコール・トムの西側に位置する貯水池です。東西に8 km、南北に2.2 km という大きさで、アンコール



写真1. グループの仲間との記念植樹

地域最大の貯水池であり、最大56,000,000 m³の水を貯めることができます。しかし、これ以上に水が貯まってしまうと、西バライ中央に位置する寺院(西メボン)が壊れてしまうとのことでした。西バライには4つの大きな役割があります。1つ目は水を供給すること、2つ目は地下水の維持、3つ目は灌漑、4つ目は洪水を防ぐことです。この西バライによって人々の生活は支えられているのだなと感じました。貯水池という私の中では地面に穴を掘って水を貯めるというイメージのものでした。しかし、西バライでは土で作られた堤防で囲むことで水を貯めるという方法を用いているそうです。実際に行って見た西バライ

は広大で海のようにでした。休日には多くの人が泳ぎに訪れるそうです。中央に位置する西メボンには遠すぎて見えませんでした。朝日や夕日を見る事のできるスポットとして観光客も沢山訪れるようです。今回は朝日も夕日も西バライから見ることはできませんでした。次にカンボジアを訪れる際は絶対に見に行きたいと思います。西バライ周辺にはマーケットがあり、賑わっていました。

次に北バライに行きました。北バライにはダムがありました。このダムができる前は、この周辺では洪水が起こっていたそうですが、ダムができたおかげで洪水が起きなくなったそうです。北バライにも西バライと同じように中央に寺院（ニャックポアン）がありました。ニャックポアンについては事前研修の時に木村先生に教えていただいていたので、実際に見る事ができた時の感動は大きかったです。昔の病院として作られたらしく、中央に石像があり、以前は口から水を吐き出していたようです。四方の石像それぞれに意味があり北側にはゾウ、南側にはライオン、西側には馬、東側には人間の像が配置してありました。北バライの作りは複雑でしっかり理解することができませんでした。古代の人は頭がよく、今も仕組みについて完全に分からないため、新しく運河を作ることができず、壊れたら治しているのだと APSARA 公団の方がおっしゃっていました。北バライは西バライとは大きく違い自然の中というイメージが強かったです。水の中に生えている木でさえも風情がありました。

ルンタエク・エコビレッジはアンコール世界遺産エリアに新しく家を建てるのが禁止されているので、郊外に新しく村を作り、増えた人口をそこに移住させようという目的で作られた村でした。土地を買収して、APSARA 公団の主導でエコビレッジを作りが始められました。初めのころは店も学校無く、住みたいと考える人は多くなかったそうです。しかし、今は学校も店も寺院もあり、生活しやすいとのことでした。歩いて村を見て回ったのですが、今まで見て来た村とは大きく違って綺麗だなという印象を受けました。小さな子供が APSARA 舞踊を披露してくれたのですが、そのクオリティの高さに驚かされました。踊り披露の後にお話する機会があったのですが、とても無邪気な笑顔で話してくれました。子供の可愛さは世界共通だなと思いました。カンボジアに行って子供と関わるのが沢山あったのですが、関わるたびにカンボジアの子供は日本の子供よりしっかりしているなど思わされました。外で思いっきり遊んでいるからかもしれません。

西バライ、北バライに業務へ行く際にバイクの後部座席に乗って行ったのですが、人生で初めて乗るバイクに最初はドキドキでした。乗っているときに落ちてしまったりしないかな、とか、タイヤに巻き込まれたりしないかな、とか沢山不安はありました。しかし一度乗ってみるとはまってしまいました。朝から太陽が照り付けて暑い暑いという感じの中、風を切って前に進むバイクはとっても涼しかったです。

カンボジアで過ごす間は日本にいて体験できないことや、ものに触れてみようと思っていました。シェムリアップ空港に着いたとき、外の空気がジメジメしていて、沖縄に行った時を思い出しました。夜なのにこの暑さか...これから 2 週間やっていけるのかな、と不

安になりました。空港からホテルに向かう途中に翌日の朝ご飯と水を買いにコンビニへ行ったのですが、アイスの種類が多くていきなり元気になりました。アイスを買って食べてみると日本のアイスより甘かったです。コンビニの中をブラブラしていると、私がフルーツの中で一番好きなバナナのジュースが売っていました。日本にいてもなかなか売っていないので買ってしまいました。おなか壊れないか心配でしたが、食べ始めたらそんな心配とはさよならできました。またアイスを食べにカンボジアに行きたいと思います。

慣れない環境での生活で、戸惑うこと、混乱することがいっぱいありました。レストランに行っても、クメール語が分からないためどんな食べ物かわからないというピンチもありました。しかし、塚脇先生がおすすめしてくれた食べ物はどれもおいしかったので、ピンチをチャンスに変えることができました。特に空心菜炒めやロックラックはとてもお気に入りになりました



写真 2. お気に入りのロックラック

(写真 2)。もし日本のスーパーで空心菜を見かけたときは、ぜひ炒めてみることをお勧めしたいです。ロックラックはサイコロよりも少し細長いステーキで、味付けも日本人が好むような味付けでした。滞在中に 3 回くらいロックラックを食べたことは、今でも良い思い出のひとつです。

メンバーの皆もカンボジアの料理を気に入っているようでした。それほどおいしかったということなので、それを聞いてなんだか嬉しかったです。ついついたくさんの写真を撮ってしまいました。辛いものは本当に辛すぎてピリピリしましたが、そんな時は、特製スムージーでした。スムージーは店によって全然味が違って、みんなでおいしいお店を探したり、みんなで違う味を頼んでひと口とは言わずふた口くらい交換して飲んだりしました。スムージーを飲みまわす中で、インターンシップメンバーの仲も深まっていきました。食事をみんなで取ることによって、団結力が生まれてみんながひとつになりました。

今年の参加者は、ほぼ毎日みんなで夕ご飯を食べに行きました。私は最年少で、周りは金沢大学の方ばかりでしたが、仲良くしてくれて、楽しくご飯を食べて、おしゃべりすることが出来ました。出発前、小松空港でみんなと仲良くなれるか不安な気持ちを持っていた自分に「大丈夫だよ」と伝えに行きたいです。すぐに新しい環境に溶け込むのはあまり得意ではなく、積極的になれなかった昔の私にバイバイを伝えたいです。このインターンシップでは、みんなと仲良くなり、協力し合って 2 週間過ごせたので、自分に自信がついたと思っています。これから新しいことにチャレンジするとき、迷ったり不安になったりすることがあっても、このインターンシップを乗り越えて、成長したことを思い出せばやっていけます。

いろいろな業務をする中で私が学んだことはたくさんありました。カンボジアの歴史や水の管理、遺跡の保全のことはもちろんですが、笑顔溢れるカンボジアの人たちと接していると、幸せの秘訣を教えてもらったような気がしました。カンボジア人は優しいと聞いたことはありますが、実際に行ってみたら本当に優しくかったです。笑顔で「ハロー！！」といえばみんな笑顔で「ハロー」と返してくれました。「バイバイ！！」といえばみんな笑顔で「シーユー」と返してくれました。笑顔で挨拶をすることはみんなを幸せにするということが分かりました（写真3）。小学校で先生に言われるようなことですが、笑顔で挨拶することは、日本では意外に出来ていないことでした。基本的なことですが、実はこういうことが一番大切なことかもしれません。日本で生活する中でも、カンボジアで学んだ笑顔と挨拶で楽しんでいこうと思います。忘れないように、メモ帳に笑顔と挨拶と書いておこうと思います。



写真3. 結婚するふたりと笑顔で記念撮影

カンボジアの人たちの笑顔に癒されて幸せな気分でしたが、日が経つにつれて色々なことが見えてきました。笑顔で幸せそうですが、実は苦勞をされていて、大変なことがたくさんあるということです。今までの私は、楽しければおっけ！という考えを持っていて、深く物事を考えることなく生きてきました。しかし、これを機に物事を違う側面から見てみます。

最初は村に行き、子供が可愛いと思っていましたが、平日の昼間なのに、家の手伝いや売り子をしているということは、学校に行けていないのではないかとことを思いついたとき、とても複雑な気持ちになりました。笑顔で接してくれる子供達ですが、大変な思いをしているのかもしれないと感じました。そう感じた私は質問をしてみました。この積極性もカンボジアで身に付きました。質問の結果、なんと、子供たちは午前、午後の部で学校に行っていることが分かりました。だから、平日の昼間なのに絶えず子供が街中にいるのだと知りました。それを聞いた私は嬉しくなりました。安心しました。そして、聞いてみて本当によかったと思いました。インターンシップ期間中、不思議に思ったときには、質問してみる事がとても大事だったので、このことを忘れず、授業でも分からないことがあったら聞いてみたいと思います。

毎日毎日いろいろなことを知って、学んで、私は少し疲れてしまいました。そして、朝起きてみたら体調が悪かったので1日休むことになってしまいました。先生、他の参加学生とチューターに心配と迷惑をかけてしまいました。ごめんなさい。体調管理は大事とメモ帳にメモしました。慣れない環境でも普段通り生活できるみんなはすごいとも思いました。参加学生の中には、水道水で歯磨きをしておなか痛くなりそうになった人もいまし

た。日本は水道水を飲むことができる珍しい国だということを知り、嬉しくなりましたが、他の国に行ったときには要注意です。レストランで出される水も、これは絶対ミネラルウォーターだと思っても、警戒しないと次の日の朝大変なことになるかもしれません。コーラを頼むと、氷が入ったグラスとコーラの缶が渡されましたが、氷が解けた後の水はあまり飲まないほうがいいらしいです。スムージーに夢中になっていたら、そんな噂を聞きました。

清潔な水は手に入れることが難しいとのことで、特に問題なのは下水道でした。「なんでこうなっちゃうの?」と思いましたが、複雑な問題が絡んでいます。世界各国が目立とうとして、カンボジアに下水道を作りました。その結果、下水管が複雑に入り組み、うまく機能しなくなるうえ、新しく下水管を作ることを困難にしています。これでは、支援の意味がない。そう思いましたが、やはりこれは難しい問題でした。先進国がよく、発展途上国に技術支援をしているという話を聞くことがありましたが、やるなら他の支援する側の国としっかり連携をとって話し合ってからやらなきゃダメだと伝えたいです。そうしないと、そこで生きているカンボジアの人たちや、APSARA 公団の方々が困ってしまいます。特に水の管理は、伝染病の予防につながるため重要だということを知り、これからの技術支援は是非工夫して進めて欲しいと思いました。

このインターンシップで素敵な仲間に出会えました。はじめは人見知りして皆さんと楽しくお話することができませんでした。業務や休日のショッピング、プール、昼食や夕食時を共に過ごすことで皆さんへの愛が日に日に増えていきました。最終日や小松空港ではお別れすることがとっても辛かったです。そして GROUP 4 の田中さんと愛理さん。英語を話せず聞き取れず、専門的な知識も無い私の事を最後までサポートしてくださってありがとうございました。おふたりはディスカッションの時公団の方の話になるほどなるほどと、難なく聞き取れていてその姿がとってもかっこよかったです。夕食後に 3 人でカンボジアビールTシャツとカンボジア産パンツを履き、お揃いコーディネイトでアイスを食べに出かけたのは永遠に忘れられない思い出になりました。楽しくて面白い二人ですが、すごく努力家で、私が持っていないものをたくさん持っていました。尊敬できる場所、ぜひ真似したいところが沢山あります。おふたりと業務に従事でき、沢山の刺激とやる気ももらいました。次は Pho のTシャツを求めてベトナムに行きましょうね。本当にありがとうございました。

実際現地に行くことでしかわからないことがたくさんありました。このプログラムにかかわっていただいた、塚脇真二先生、木村誠先生、Hang Peou 副総裁をはじめとする APSARA 公団の方々、インターンシップに関わっていただいたすべてのみなさんにとっても感謝しています。今度会った時にはありがとうございましたと大きな声で伝えたいです。現地に行って、カンボジアの人たちと話してみたいと思っても、英語が下手で話せないこともたくさんあり、残念な気持ちになりました。ただ、そのおかげで英語を話せるようになりたいという気持ちが、インターンシップに参加する前と比べると 2 倍くらいになりました。

した。このインターンシップを通して、学んだこと、知ったこと、やってみようと思ったことをこれからの生活に活かし、少しずつ行動に移していきます。そして、またこのメンバーでスムージーを飲みカンボジアに行きたいと思います。そして、その時は英語でお話できるように、英語の勉強も頑張っていきたいです。

この 2 週間を通じて数多くの貴重な体験ができ、沢山のことを学んで帰ってくることができました。本当に、ありがとうございました。

9) A lot of thanks to Cambodia!!

金沢大学人間社会学域国際学類 2年 宮川^{あいり}愛理 (グループ 4)

私がこのインターンシップの存在を知ったのは約1年前。1年生の時の必修授業で、去年の参加者の皆さんからアンコール・インターンシップについてお話を伺いました。その時に“このインターンシップに行きたい”と強く思い、今年やる気満々で応募しました。見事参加できるとわかったときはとても嬉しく、“よくやった!”と自分を褒めたりもしてしまいました。私がこのインターンシップで惹かれたのは観光と深く関われる部分です。元々観光産業に興味があり、将来の就職先の選択肢にも入れていたので、世界でも稀な、実際に人々が生活している世界遺産であるアンコール遺跡群で仕事ができることはとても魅力的でした。また、海外経験がほとんどなかった私にとって、自分の英語力を試す良い経験にもなりました。ただの語学研修にはあまり参加意欲がなかった私にはこのインターンシップは最適でした。

業務では、4つのグループに分かれ、西バライ、北バライ、ルンタエク・エコビレッジ、クメール様式の建築を視察し、説明を受けました。実際には4つに分かれての業務はありませんでしたが、グループ分けがあったことでよりメンバーとの仲が深まりました。積極的に皆に話しかけてくれてコミュニケーション力の高い田中さんと、明るくていつも皆を笑わせてくれる“もりたま”こと森田さん。ふたりのおかげで少しづつ思える業務もやりきることができました。グループ活動がなかった日も夜に集まってミーティングをしたのはいい思い出です。一番仲が良かったグループだと自負しています(写真1)。グループだけでなく、このインターンシップのメンバーは皆話しやすくまとまりがあり、最後にはアットホームな雰囲気が流れていたような気がします。遊ぶときは遊ぶ、業務のときは真剣に取り組む、というメリハリもしっかり付けることができる素敵なメンバーだったと思います。塚脇先生や木村先生も今年のメンバーをととても気に入ってくださり、嬉しかったです。



写真1. 大好きなグループ4

私が所属したグループ4は西バライの担当でした。西バライはアンコール地域にある4つの貯水池の中で最も大きな貯水池であり、56億 m^3 の水を貯めることができます(写真2)。バライには必ず中心にお寺があり、水位がその貯水池の限界量を超えると崩れてしまいます。そのため現地の人々は神様を祀っているお寺を守るため、水位に敏感だったように感じました。一方で、そのお寺にはバライの水位を測るという役目もあります。この見方は私自

身思いつかなかったもので、まだまだ視野が狭いなど痛感しました。また、バライは貯水池と言ってもその役割は様々にあるということ、私は説明を聞いて初めて知り驚きました。アンコール地域においてのバライの主な役割は、地下水を補填する、住民に水を供給する、灌漑を行う、洪水を防ぐ、の4つです。特に地下水はアンコール地域にとって必要不可欠です。日本とは違い、道路がまだあ



写真 2. 西バライ

まり整備されていないカンボジアでは砂でできた土壌を見かけることも多いです。この土壌は地下水で湿ることで強くなり、アンコール・ワットやバライの中心のお寺など重要な建造物の崩壊を防ぐことができるのです。

このように、バライはアンコール遺跡群の観光地としての価値の存続において重要な役割を担っています。この他に、近年西バライの観光地化も行われています。バライの周りの少し高くなっているダイクと呼ばれる堤防に2か所、綺麗な朝日と夕日を見ることができ展望台が設置されていました。また、バライの近辺では地域住民が出店を出して衣服や食べ物を観光客に売っていました。アプサラ公団の方は出店を出すことを地域住民にだけ許可していて、貧しい暮らしをしている彼らに職を与えているんだと教えてくれました。これは観光客にも地域住民にも利点であり、良い案だと感心しました。観光産業において、その地域住民に不利益になることを避けつつ開発などを進めていく必要があると思うので、今回のインターンシップは新しい視点をもてたり観光産業の現実を見られたりしてとても勉強になりました。

実際に現地の人々が生活する村や彼らが利用する市場を訪問した時は驚きがたくさんありました。まず野良犬、猫、鳥、牛の多さに驚き、生の肉がそのまま売られてハエがたかっていることに驚き、住む家もほとんどが屋外であることに驚きました。それらの場所にはほとんどトイレがなく、現地の人々にはまだトイレが不必要なものだと認識されています。私たちが参加させてもらう予定だった衛生講座が住民のボイコットによって中止となったことがあり、彼らのことを思っただけの講座なのにと残念に思いました。住民の衛生面での問題はまだまだ山積みなんだと実感しました。元々なかったものを普及することの難しさを目の当たりにする良い機会でした。まずは住民の意識を変えるところから取り掛かなければならないのです。また、病院も整備されておらず、医療費も高いため住民は苦しい現状です。少しずつでも楽な生活を送れるように改善していかなければなりません。

この2週間で出会った現地の人々は皆私が想像していた何倍も優しく、見ず知らずの私たちが家に入っても嫌な顔ひとつせず受け入れてくれました。私たちは頻繁にかわいい赤ちゃんに話しかけたり触ったりしに行っていましたが、毎回その家族の方も皆笑顔で接

してくれました。子供たちはとても人懐っこくて慣れてくると私たちについてきてお花をくれたり手を引いてどこかに連れて行ってくれたりして、とてもかわいくて癒されました(写真3)。人の温かさに触れて、自分の心まで広がったような気さえました。目を見て挨拶をすることはやはり大事だと改めて思い返しました。日本に帰っても忘れないでいようと思っていたことを、今報告書を書きながら思い出しています。



写真3. 人なつっこい子どもたち

孤児院を訪問することができたことが私はとても嬉しかったです。親がない環境でどう育っていくのだろうと少し疑問でしたが、孤児院の子供たちは皆しっかりしていて明るくて驚きました。逆に私たちが元気づけられて仲良くしてもらったような気がします。彼らはお互いのことを思い合っていて本物の家族のように見えました。これらの出会いも大事にしていきたいと思います。

カンボジアでの生活は、最初は知らないことばかりで不安でしたが、すぐに慣れてきて快適に日々を過ごすことができました。食事先生のおすすめのお店をまわって、美味しいものばかり食べていました。特にシェイクは絶品ばかりで、日本ではほぼ飲まないくせに、カンボジアでは毎日飲んでいました。ホテルから近かったり、皆が気に入ったりしたお店が行きつけのお店のように



写真4. パブストリート

なっていたのも、カンボジア生活を満喫していた証拠だと思います。ナイトマーケットも外国の雰囲気が溢れていて素敵でした(写真4)。バイクに乗って業務へ向かったのも風がとても気持ちよくて楽しかったです。何をするにもすべてが初めての経験で、刺激を受けに受けた2週間でした。あと1週間は欲しかったなと思うくらいあっという間で、今後の人生の中でも大事な経験になるのだろうと思います。最後に、このインターンシップで出会ったメンバー、お世話になった先生方、参加させてくれた家族に心から感謝して、報告書を終わようと思います。皆さんほんとうに有難うございました！！

10) アンコールインターンシップ報告

金沢大学理工学域環境デザイン学類 3年 田中裕之 (グループ 4)

インターンシップの 2 週間に携わってくださった、塚脇先生、木村先生をはじめとする大学関係者の方々、アプサラ公団の皆様、そしてカンボジアの皆に特大のオーケンチュランを届けたいです。参加して良かったです。もう 2 度とできないような体験、一生忘れない思い出が出来ました。本当にありがとうございました。この 2 週間で経験したこと、感じたことを生かして、これから頑張っていきます。特に、船に乗る前には酔い止めを飲まなければならないことを学びました。カンボジアの皆さん、トンレサップ湖を汚してしまいすみませんでした (写真 1)。日本産マーライオンは帰国後、田中マー君と呼ばれ、無事、陸地で快適に生活しています。



写真 1. トンレサップ湖で力尽きる

報告書の構成は志望動機、目標、業務内容、暮らし、学びとなっています。まず志望動機についてです。ちょうど 1 年前にあたる 2 年後期のはじめ、私はふらっと立ち寄った海外留学説明会でアンコール遺跡整備公団インターンシップと運命の出会いを果たしました。出会えて本当に良かった…。その時話されていたのが今回チューターをしてくださった環境デザイン学類の先輩の河本麻実さんでした。その説明会でこのインターンシップでは土木を主な学習内容とする環境デザイン学類でも自分の専攻に関連する体験ができることを知り、目からウロコが落ちてきました。その頃、私は高校時代から興味を持っていた都市・交通計画をはじめとする幅広い内容の講義を受けていましたが、私は、理系科目が苦手で、その弱さは例えるなら UFO キャッチャーのアームでした。だから数学の単位をキャッチするのに苦労していました。こういう無駄なユーモアは意外とカンボジア人にうけました。日本ではスベリます。理系のくせに理系科目が苦手なので、他の部分で勝負できないと将来自分のやりたい職に付けたとしても、埋もれてしまうなと思っていました。だから、カンボジアで環境デザインの専攻を生かしながら英語で業務を行うことが輝いて見えました。私はその場で来年応募することを決め、選考をなんとか通り参加できることになりました。理系の皆さんにもおすすめのプログラムです是非！

次に目標です。1 つ目はカンボジアを 2 週間楽しみ尽くすこと、できるだけ積極的に現地の人々とコミュニケーションをとり、様々な価値観や知らないことに出会うことを一番楽しみにしていました。次に、将来のためになる学びが多い 2 週間にしようと思いました。大学で学んできた土木、建設、都市計画の勉強は異国の地においてどのように生きるのか、ま

た生きないのか知るということと、自分の狭い視野を少しでも広げることを目指しました。

次に業務についてです。このように多くの希望をもってカンボジアに向かったわけですが、初日ですぐに大きな壁にぶち当たり絶望を感じました。それは英語力の無さです(写真2)。カンボジアの公用語はクメール語ですが、公団の方々は英語を話せるため、現地では英語でコミュニケーションをとっていました。カンボジアでは英語で話すことは当初から知っていましたが、アジアの人の英語



写真2. 伝統建築について学ぶ

は聞き取りやすいという油断がありました。しかし実際には、自分の圧倒的英語力不足とカンボジア特有の発音でリスニングに苦労しました。周りの文系の学生も苦労していましたが、正直このままでは自分は2週間何もできないと不安になりました。その不安はすぐに悔しさになりました。せっかくここまで来たのに、カンボジアの人たちとコミュニケーションが取れなくて楽しめないなんて勿体ない、やるしかないと思って、初日の業務を終えてホテルに着いた瞬間から英語の勉強を始めました。幸いホテルにはWi-Fiが繋がっていたので、スマートフォンを使ったリスニングの勉強が可能でした。

それでも、どうしても聞き取れない、伝えたいことが伝わらないという状況が続きました。しかし、そこで暑さで頭がおかしくなった私はあることを思いつきました。それは、相手から話しかけられているから聞き取れないんだ、自分から話しかければそんな問題は起きないということでした。朝、公団の方のバイクで業務に向かう際など、相手から話しかけられたら一巻の終わりなので、とにかく自分からマシンガントークをしかけました。それはそれは信じられないくらい低レベルな英会話でした。今思い出ただけで笑えますが、これはシンプルでとてもおすすめの方法です。バイクに乗ったら「Good morning! Yeah! How are you?」でOKです。バイクが細道に入り、話しかけられそうな雰囲気が出てきたらすぐに察知する。そして目に入ったものの質問をぶつける。「Oh this lake is big big~! How much?」でOKです。昨晚食べたものを覚えておき、「クーシンサイ is good good!~ last night!」これはOKではありませんでしたが、基本的には自分の質問に関する返答くらいは何とか聞き取ることができます。英語力不足を気にして海外に行く勇気が出ない理系の学生には特におすすめしたい方法です。おそらく僕はその後先生に怒られます。

ここで、3種の神器を紹介したいと思います。それは、笑顔、低姿勢、ボディランゲージです。これらのおかげで、たくさんの人と距離を縮めることが出来ました。孤児院や村を訪れたときも早く打ち解けることが出来ました。カンボジアに行ってから心が幼くなった気がします。何か、言葉ではうまく表せませんが、彼らに真つすぐきれいな目で見つめられると、なんだろ、言葉では表せません。古代の村と呼ばれる、昔からの伝統的な村を訪れたと

き、私は今まで感じたことのないような感情で胸がいっぱいになりました。なんだ、この暖かい村は！そこにはゆっくりした時間が流れ、子供たちが無邪気に遊び、大人たちも私たちに微笑みかけてくれました。言葉では表せませんが、みんな良い顔をしていました。内面からあふれ出てくる笑顔、何か、カンボジア人が優しいと言われる所以が分かった気がしました。

アプサラ公団の方の説明の合間を見て、抜け出して、子供達に遊んでもらいました。その子供たちにお菓子をあげました。子供たちは嬉しそうな顔をしました。すると、一斉に皆でどこかへ走って行ってしまいました。不思議に思いました。その後まもなく、子供たちが一斉にこちらへ向かって走ってきました。どうしたどうしたと見てみると、子供たちの手には今摘んで来たであろう花が握りしめられていました。顔が笑顔の状態で固まって動かなくなる経験は初めてでした。その花を渡されたとき、普段ドライアイで苦しんでいるとは思えない目の潤いを感じました（写真 3）。例えば、田舎とか発展途上国とか貧しいとか、そんな〇〇だからという背景なんてものは関係なく、ただただ、純粋に子供たちのその行動は私の涙腺を崩壊させる破壊力を持っていました。その後みんなに合流するまでに少し時間がかかりました。その花を日本に持ち帰り作ったしおりを見ると今でも胸が熱くなります。優しい村で優しい大人に育てられた子供たちの笑顔には優しさが濃縮されていました。塚脇先生にお前ここに残るかと言われたとき、残ります、と言ってしまいそうでした。



写真 3. ロヴィア村で子どもと遊ぶ

また、孤児院に行ったときには 10 人近くの子供たちに遊んでもらえました。久しぶりにシャボン玉がしたかったので良かったです。あんなパワフルなシャボン玉遊びは初めてでした。楽しかったです。とても楽しかったです。折り紙も皆でしました。手先が器用な女の子におり方を教わりました。バイバイするときには時間がかかりました。もらった蝶々の折り紙は大切なお守りです。この蝶々を見ていると、どこにでも飛んで行けそうな気分になります。先日終わった東京でのインターン中、何度見返したか。またカンボジアに行ったときには、また皆に遊んでもらえたらうれしいです。英語の勉強頑張ろうねって約束したので次は英語でたくさんお話ししたいです。小さいことにイライラしたり、しかめっ面でいたりするより笑顔で過ごそうと思いました。幼稚で子供っぽいことかもしれませんが、いくつになっても花や蝶々の折り紙をもらった時の気持ちを忘れないようにしたいです。

ただの旅とは違い、インターンシップなので、塚脇先生や木村先生、公団の方々のおかげで良い面だけ見てあ～良かったで終わりではなく、他の方向からも物事を見させていただくことが出来ました。笑顔で遊んで楽しかった、けどここにはこういう問題があつてこん

なことに困っていて、こういう対策が必要だという話も聞くことが出来ました。そのおかげで、ショックなことはありましたが考えなければならぬ多くのことを知りました。このインターンシップに参加しなければこんな物事の見方はできなかつたらと思うことすらありました。本当にありがとうございました。

メンバーの10人は4グループに分けられ、各グループで異なった業務に取り組みました。実際にはグループ合同で一日を過ごすことが大半でしたが、私は、グループ4のひとりとして西バライという貯水池の担当になりました。グループ4のメンバーは国際学類の2年の宮川愛理さん（リーダー）、小松短大の1年の森田愛加（もりたま）と僕でした（写真4）。メンバーの10人や先生の話やグループ4の話をする



写真4. グループ4の最終報告

の話をする

と止まらないので、止めておきますが、とにかく最高のメンバーでした。グループ4は毎晩ホテルで集まって、その日の業務についての復習をするという謎のグループでした。西バライについての説明で分からないことや聞き取れないことがあればその集会の時に確認して、要点をノートにまとめるなどしていました。その場で理解できればこのようなことはしなくても大丈夫なのですが、どうしても理解できなかったことも三人寄れば文殊の知恵で解決できました。西バライの構造や歴史は他のメンバーの報告書を読んだり、本で調べたりすればわかると思うので、ここでは特に印象に残った話について紹介したいと思います。

まず初めて西バライに行ったとき、いや、海やんっ！と突っ込んでしまいました。それほど大きかったです。これを10世紀の人々が手作業で作ったというから驚きでした。西バライや運河などをはじめとするカンボジアの水循環システムはその時代の人々によって考えられて作られ、今も尚人々の生活に寄与していると知ったとき鳥肌が立ちました。この水循環システムは大変効率が良く、大規模であり、公団の方々も先人の知恵には感嘆している様子でした。そんな西バライには修理が必要になっている箇所が多くあります。その修理について印象に残った話を紹介したいと思います。それは、**dyke**と呼ばれる貯水するための盛り土の修理を機械と手作業の両方で行っているということです。僕は最初、全部機械でやればいいのと思いました。しかし、手作業による修理も行うことによって雇用を生み出しているそうです。機械を使えばひとりしか雇えないところを、手作業による修理も行うことによって10人の雇用を生み出し、西バライ周辺の住民に給料を渡すことができるということでした。現地の人々の生活のことを考える間もなく機械で全部やっちゃえばいいのと思った自分を恥ずかしく思いました。

この話を聞いたあと、日本をはじめとする先進国の技術支援の方法について気になり聞

いてみました。カンボジアにインフラ技術支援で最新鋭の機械を輸出する国はたくさんあるようですが、実際には暑さで故障したり、故障しても替えの部品が無く修理できなかったり、現地の人には操作が困難であったりするそうでした。他にも、技術輸出に関する問題点をたくさん聞くうちに、やはり現地の人々の話を聞かないと本当のことは何もわからないのだなと感じました。大切なのは最新鋭の機械を与えるより、カンボジアの技術を向上させるという観点に立つことではないかと思いました。利害関係や貿易のことを何も知らない自分ですが、現地の人々のことを第一に考え、行動できる技術者になりたい。そう思いました。

話はそれますが、私はカンボジアから帰国した次の日から東京の建設コンサルタント最大手の企業で 2 週間インターンシップをさせて頂けるという有難く恐れ多い機会がありました。そこでは最大手なだけあって海外の案件も多くありました。ある国に大規模な高速道路を設計するという案件を見たとき、そこに住む人々はどんな生活をしていて、この道路建設に対して現地の人々はどう思っているか知りたいと思いました。このような考えはカンボジアに行く前には無かった気がします。社会人になって、どんな立場でどこに何を設計するにしても、現地に足を運んで、現地の方々の話に耳を傾け、現地の人々を第一に考えることを大切にしたいと思いました。きっと口で言うよりもとても大変で、難しいことだと思いますが、働き始めてもカンボジアで学んだこの考え方を失わないように、この報告書を見返して、初心を忘れずにいきたいです。

西バライの業務がメインでしたが、他にもエコビレッジという村を訪れる機会がありました。ここは都市部の過剰人口を解消するために郊外に作られた村です。どのように村を作っていたのかの歴史の説明を聞きました。とても迷走を繰り返していることが分かりましたが、3 年前に責任者がマラディさんに代わってからは比較的安定していることが分かりました。今は観光産業をメインにしており、人口も増えているようです。とても興味がある話だったのでマラディさんに山のように質問をぶつけてしまいました。すべての質問に丁寧に答えてくださり、感謝の気持ちでいっぱいです。たくさんのことを教わりましたが、一番印象に残っている話があります。それは私が、何を一番に考えてむらづくりをしているかと質問した時です。するとマラディさんは住民たちが寂しい思いをしないようにとおっしゃいました。僕は足元から崩れ落ちるとはこのことかと思いました。一目惚れではなく、一聞き惚れという言葉を広辞苑に追加して、使い方の例にこの話をあげたいです。移住してくる住民の不安をやわらげ、寂しい思いをさせないためにイベントや集会を開くなどしているそうです。質問が止まらなかったのも、連絡先を交換して後日食事に誘いましたが、日程が合わず行けなかったのも、カンボジアにはまた行かねばなりません。

次に暮らしについてです。僕は 2 日目でおなかを壊しました。理由は簡単で、水道水で歯磨きをしていたからです。

次に学びについてです。ここまでで述べた通り、本当に多くのことを考えさせられる 2 週間でした。ここで得たことは大きなきっかけになると思うので、せっかく得たきっかけを無

駄にせず，これから頑張っていきたいと思います。頑張ります！

5. チューター・アシスタントの報告

1) 第2の故郷—カンボジア, シェムリアップ—

金沢大学大学院自然科学研究科環境デザイン学専攻2年 河本麻実

過去に3度もカンボジアに来ることはないだろうと思いながら、公団の方と涙のお別れを毎年していましたが、8月上旬に行われたインターンメンバー最後の交流会でチャーターとしての参加が急きょ決定しました。そのため、渡航前のサポートができず申し訳ない気持ちと、年下でほぼ初対面の10人と2週間過ごすことに不安と緊張の気持ちを抱えていました。しかし、学生最後の夏にこのプログラムに関わることができることを心から嬉しく思い、現地では学生に自分が経験してきた以上の経験ができるようサポートしようと決意して参加しました。

急きょ参加が決まった関係で航空券が取れなかったため渡航が早まり、学生と同行することはできませんでした。そのため、学生を迎えられるよう塚脇先生と共に準備をして前日を過ごしました。具体的には、制服の調達をしたり、現地で使用する携帯電話のSIMカードや名札を学生ごとに整理したり、街の雰囲気やスムージーの味を確かめたりと多岐に渡りました。ガイドブックに載っているような有名店では観光客は一度しか訪れないため仕事が雑になっており味が落ちていることを聞き、残念に思いました。しかし、目が合えば微笑んでくれるマーケットのおばさんやお姉さん、やたら日本語が上手なトゥクトゥクのお兄さんなどに活気にあふれる雰囲気は変わっておらず、始まるカンボジアでの生活が楽しみになりました(写真1)。



写真1. トゥクトゥクから

今年のメンバーは金沢大学から8名、小松短期大学から2名、名古屋工業大学、鹿児島大学からもチャーターが2名、横浜市立大学からアシスタントとして1名の14名の学生で構成され、性別学年ともに様々でとても個性が豊かでした。よく学び、よく食べ、一所懸命な姿は毎年恒例で私も元気をもらいながら過ごすことができました。

チャーター2名は途中で交代があったり、新しくアシスタントがいたりサポート勢が例年とは異なる体制でしたが、安心感のあるメンバーでそれぞれがうまく役割を果たせていたと思います(写真2)。個人的には、同じ環境デザイン学類で学部時代を過ごした名古屋工業大学の綾女さんと、共通の思い出深い場所であるシェムリアップで過ごすことができるのを楽しみにしていました。また、昨年のインターンシップで出会い、お姉さんとして慕っていた鹿児島大学の美乃さんとの再会も心待ちにしていました。彼女たちがシェムリアップに向かう便が遅延して滞在時間が減ったのは残念でしたが、学生たちは大きなトラ

ブルもなく到着することができ、一安心してインターンシップが始まりました。

業務では4グループに分けられましたが、グループでの業務はほとんどなく、全体か2グループで動くことがほとんどでした。午前はダムや水門、バライなど水に関する現場に出向き、午後は公団でディスカッションを行うというスタイルは例年と大きく変化がありませんでしたが、特に今回は公衆衛生に関する業務が新しく取り組まれていたのが印象的でした。



写真2. チューターズ（アンコール・ワットにて）

遺跡周辺の村においてそれぞれの家庭に清潔なトイレが整備されていないことで衛生状態が悪化し、住民に健康被害が出ているということが課題としてあげられていました。そこで、公団のスタッフの方々が村で住民に対してトイレについて説明会を開催しているところを見学しました。住民が参加してくれない村もあり衝撃を受けましたが、見学させていただいた説明会では子供から高齢の方まで集まり、集まった住民のほとんどが最後まで出席していました。この日、公団のスタッフから教わったことの中で最も印象的だったのが、“Teach them how to fish is better than give them fish”という言葉です。住民と協力して村づくりを行うためには、「回答を与えるよりも、やり方を教えることが重要である」ということを教わりました。インターンの時から冗談を言い合う特に仲の良いスタッフからの言葉で、普段仕事以外の話をする人が多いからこそ説得力があり、心に響きました。近い将来、社会人として公団のスタッフのような立場で働く際には、この言葉を大切にしようと思いました。このように、チューターとして参加しても、インターンの時と同じように新しい学びがたくさんあり、何度でもカンボジアに行きたいと思う大きな理由だと感じました。

休日の過ごし方は例年と同じで、土曜日の午前中はハス畑に立ち寄った後、東南アジアで最大の湖であるトンレサップ湖でクルージングをさせていただき、午後はフリータイム、日曜日の午前中はアンコール・トムで象に乗ったり、寺院を観光したりした後、郊外にあるバンテアスレイという小さくて美しい遺跡に訪れて過ごしました。訪れる場所は毎年変わりますが、年によって学生の興味がそれぞれ異なり、過ごし方も異なるのがおもしろいと感じました。去年は遺跡の彫刻や修復について注目が集まったように感じていましたが、今年は遺跡にいる動物や子供に集まっていることがあり、ほほえましく見ていました。たしかに、当たり前のように牛が道路を歩いている風景は日本では想像ができないくらい新鮮で、私にとってはカンボジアに来たと実感させてくれる風景になりました。

今回はチューターとして参加でしたが、達成したい目標を持って臨みました。それは、楽しむことです。学生が安全に安心して、異国の地で過ごすことができるように、情報提

供したり必要に応じてサポートしたりするのがチューターの仕事ですが、それだけではなく、このプログラムがきっかけで大好きになったカンボジアを学生には何事も楽しんでもらいたいと考えていました。そのためには自分自身が楽しむことが大切だと考えました。

これについては、何度も明るく元気な学生みんなのおかげで新しい発見や楽しみがあり、業務も休日も時間が経つのがあっという間でした。滞在中はスマートフォンや遺跡に入るための許可証の紛失、体調不良などトラブルが発生したこともありましたが、学生の安全に影響する大きなトラブルに発展することはありませんでした。また、学生だけで解決することも多く、チューターが必要ないことにさみしくもありましたが、とても頼もしく感じました。そして、帰りの小松空港でみんなから心温まるメッセージをいただきましたが、楽しいだけでなく、カンボジアが大切な場所になったことが伝わってきて、チューターとして少しはみんなの役に立ったのかなと嬉しく思いました。

一方で反省点としては、昨年までの記憶が曖昧であることが挙げられます。特にお金についてです。出発前にホテル代などの必要経費も含めてドルを準備しておくのですが、見積もりが甘かったようで、2週目にはお金が足りず楽しみを我慢させてしまったのが悔いとして残ってしまいました。持ち物や過ごし方に関する報告書に書ききれない細かい部分は忘れていたことがメモに記録しておくのが役に立つと思いました。昨年書いていた、毎日訪れた場所や美味しいお店、メニューのリストはとても役に立ちました。今年も美味しく居心地の良いお店、また食べたいメニュー、マッサージ店など追加事項がいくつか増えたので、来年以降のチューターの方にすべてをたくしたいと思います。

最後になりますが、今年も無事にインターンシップを終えることができました。一緒に過ごした学生みんな、チューターの綾女さん、美乃さん、アシスタントの理人くん、このような貴重な機会をくださった塚脇先生、木村さんをはじめ、インターンシップの実施に当たりお世話になった先生方、現地で出会った皆様に心から感謝致します。

2) カンボジアふたたび

名古屋工業大学大学院工学研究科博士前期課程 2年 田原綾女^{あやめ}

3月末、塚脇先生に「あやめさん、チューターやらない？」と言われ、私は「是非！」と即答した。

4年前の2013年、金沢大学理工学域環境デザイン学類2年生だった私はこのインターンシップに参加した。APSARA 公団のスタッフの方々や先生から現地の生活文化と歴史を多く学び、肌で感じ取った。目に映るもの全てが新鮮で、何よりもカンボジアの時間がゆったりと流れる感覚に魅了されたのを覚えている。インターンに参加してからの4年間は、カンボジアの情報を耳にする度に「次に行けるのはいつだろう」と考えていた。そういったこともあり、チューターのお話を頂いたときは嬉しさで一杯であった。以下に、悲願の再カンボジア記録を示す。

私の旅の始まりは、まさかの上海から始まった。セントレアー上海間のフライトが遅延し、シェムリアップ行きの飛行機に乗り損ねたのである。中国語が一切分からない中で、なんとか翌日のフライトの座席を確保し、中国に入国することが出来た。上海のホテルではWi-Fiへの接続が不安定だったが、何とか塚脇先生ともうひとりのチューターの河本さんに連絡が取れた。ハプニングにも関わらず、先生にはこちらのことは気にせず上海を満喫してきなさいと仰って頂き、心が軽くなった。河本さんには学生のお世話だけでなく私の心配までもらい、非常に心強かった。

そんなふたりのおかげもあり、当初より1日遅れで無事にシェムリアップ空港に到着することが出来た。空港には河本さんとアシスタントの理人くん、そして運転手のペンさんに迎えに来て頂いた。3人の顔を見たときに溢れ出た安心感は忘れることが出来ない。ホッとした勢いで、空港からホテルまでの15分間、上海で経験したことを物凄いスピードで喋り倒してしまった。しかし、後々よく考えると河本さんとは1年半ぶりの再会、ペンさんとは4年ぶりの再会、理人くんとは初対面だった。

翌日の朝、私はドキドキしながらホテルのロビーにいた。すると続々と学生がロビーに集まってきた。インターン前の決起集会にも参加できなかったため全学生と初対面であったが、「おはようございます！」と全員が笑顔で挨拶をしてくれた。じきに塚脇先生と小松短期大学の木村さんも到着し、朝礼で無事を報告した。皆さんに温かく歓迎して頂き、スムーズに業務を始めることができた。

インターン業務には、現地視察とオフィスでのレクチャーの2種類がある。私はチューターとして学生の予定管理や体調管理、写真撮影など、サポート全般を行った。業務期間は、インターン前半の8月22日から29日までの7日間。後半は鹿児島大学の福井さんにバトンタッチを行った。

視察では、アンコール・ワット、タ・プローム、北バライ、西バライ、様々な遺跡をAPSARA

スタッフの方に案内して頂いた。訪れたのは2回目だが、やはりアンコール・ワットを目の前にした時の迫力と内部のディテールの繊細さは感動そのものだった。学生のみならず口をあぐりと開けて見入っていた。しかし、タ・プロームだけは4年前と見え方が違った(写真1)。今回は、ただその神秘さに興奮したような記憶があるが、今回は人間の無力さを感じた。タ・プロームは、人の手によって作られた建造物に、植生が侵食し、現在では人工物を自然が支配するような形で思いもよらない美しい空間となっている。この空間はどう考えても人間によっては作り出せない何かがあり、一生懸命デザインしても追いつかない魅力があるように感じた。そんなありのままの姿が魅力のタ・プロームだが、観光名所であるが故の問題も抱えている。改修によって人の手が加えられつつあるのだ。それが安全性の確保と現状維持のためだということは理解できるが、「手つかず感」を残しながら長い年月を経て形成された空間を改修していく難しさは計り知れないように感じる。



写真1. タ・プローム寺院

今回のインターン業務は、遺跡に加え、現地の暮らしを視察することも多かった(写真2)。中でも印象的であったことは、遺跡群内にある村を訪れた際のちょっとしたハプニングである。村の人々は世界遺産に住んでいることになるが、観光地ではないため、ありのままの暮らしを目にすることが出来る。当初の予定では、その村の住人の方々を集めて APSARA スタッフからサニタリーに関する講習会を開くことになっていた。シェムリアップの農村では、トイレの問題が深刻となっている。現状、トイレは10軒にひとつといった割合で、未だに茂みで用を足すことも多いという。このような現状は、衛生問題だけでなく怪我や事件に発展する可能性が高い。以上のような背景から APSARA は一丸となってトイレの普及に努めている。写真つきで分かりやすいパンフレットも作成しており、事態の深刻さと APSARA の本気具合を窺い知った。



写真2. 村の子どもたち

しかし、講習会の時間になっても村人は誰一人として現れない。村人たちによ

るボイコットだった。遺跡内の村では違法商業施設の増加も問題となっている。その問題に対し、APSARAは商業施設建設後に立ち退きを命じていた。人々は違法と知りながらも、生活のために、それなりの費用を投じて建設を行っていた。そういった背景を知らずに、他の重要な問題も差し置いて厳しく取り締まるAPSARAへの反抗だとスタッフの方々は仰っていた。「僕たちも全員から好かれているわけではないんだ」と言うスタッフの方の何ともいえない顔が印象的だ。その日は予定を変更し、人々の暮らしについてレクチャーを受けながら視察を行った。

以上のような視察を受け、午後はオフィスにてスタッフの方々によるレクチャーを行った。この時間、チューターとしては特に仕事がなく、オフィス裏のハンモックでウトウトして過ごした。そのハンモックは普段スタッフの方々が仕事の合間のお昼寝用に使っているもののように、改めてゆったりと時間が流れるカンボジアタイムの虜になった。一方で学生のみんなは、積極的に質問したり、互いに知識を共有したりするなどして非常に真面目に取り組んでいた（写真3）。



写真3. 野外でのレクチャー

それは業務に限った話ではない。業務後の自由時間や休日も、何事にも興味を持ち好奇心の塊といったような印象である。市場に行くと、みんな両手いっぱい荷物を抱えて買い物を楽しんでいた。私自身も、みんなの身に着けているものが日に日にカンボジアのものに変わっていく姿を観察して微笑ましく思っていた。買い物以外にも、ネイルやマッサージ、カフェ巡りなど。全員が業務だけでなく遊びにも全力で取り組んでいた。オールドマーケットで自由行動をしていても、気づくと全員が同じカフェにいることもあり、仲もとても良かった（写真4）。本当にワイワイと楽しく、朝から晩まで濃い毎日だった。しかし、先ほども述べたように、私は前半のみの参加だったため、皆カンボジアにも慣れ、楽しさもピークの頃にお別れをしなければならなかった。帰国の3日程前から、寂しさと名残惜しさ、そして最後までチューターとして任務遂行できない悔しさでいっぱいだった。いよいよお別れの時は、ボロボロと涙が溢れて止まらなかった。空港へもペンさんの車の定員を無視して、乗れるだけ乗って、トランクにも乗って、お見送りをしてもらった。乗り継ぎの上海空港では、みんなから頂いた温かいメッセージと贈り物を見て、またひとりでウルウルとした



写真4. 集合写真の撮影

ことを覚えている。

滞在中、ふと「果たして私にチューターが務まっているのだろうか」と思い、先代チューターである絵美さんに「チューターの仕事って何ですか?!」と相談したことがあった。するとすぐに「あやめ自身が思いっきり楽しむこと。そうすればみんな楽しくなるから!」というお返事があった。今、大量の写真を見返してみると、みんなも、そして私も、驚くほど笑顔でいっぱいだった。どうやら、チューターとしての仕事は無事果たせたようだ!

最後に、楽しい思い出を一緒に作ってくれた学生の皆さん。ボケも業務も完璧にフォローしてくれた理人くん。8日間先輩チューターとして、友達として一緒にいてくれた河本さん。少ない引継ぎ期間にも関わらず、学生だけでなく私までとっても頼りにさせて頂いた福井さん。ミスをしても、お酒がまわって絡んでも、いつも優しく接して頂いた木村さん。そして、このインターンシッププログラムを主催し、私をチューターとして誘って頂き、みんなをまとめ上げて頂いた塚脇先生。皆様のおかげで、こんなにも楽しく終えることができました。本当にありがとうございました。

3) チューターとして感じたこと

鹿児島大学大学院連合農学研究科博士課程 2年 福井美乃

昨年、カンボジアのアンコール・ワットの魚類相調査メンバーとして参加したご縁から、今年また、金沢大学のインターンシップの後期チューターとしてカンボジアへ渡航させていただけることとなった。

今回はチューターが4名、全期間参加が2名、前後半それぞれへの参加が1名と例年よりも人数が多らしく、その分参加学生へのケアもしやすい環境だった。私自身はじめてのチューター業務、さらに事前研修や前半の業務後、学生間の連携が深まったところへの参加は、不安や緊張が全くなかったといえは嘘になる。それでも、先にカンボジア入りしたチューターから定期的に連絡をもらっていたおかげで参加学生の様子を知ることができ、私を含む一部の学生は金沢から離れた場所におり、対面することが難しかったため SNS で事前に自己紹介を行っていたので、合流後もスムーズに打ち解けることができたと思う。渡航決定後すぐに SNS のグループを作成してくれた先輩チューターの田原さんに感謝だ。

業務も後半となれば、参加学生もみな慣れたもので、てきぱきと仕事をこなすディスカッションも活発で、込み入った事情を通訳したり、レポートの英語表現を添削したりする以外は、業務中にチューターが率先して手を貸す必要のある場面はほとんどなかった。公団の方々の説明を聞き、初めて行く遺跡をじっくりと鑑賞する時間もあった。アンコール・ワットの保全に関する話や、周辺住民の生活に関する話を聞くことができ、ひじょうに有意義な時間を過ごせたと思う。



写真 1. 遺跡内は観光客でいっぱい

業務中のチューターの仕事は、大きくふたつ。写真を撮ることと、学生の様子を把握することだ。今回、塚脇くんという素晴らしいフォトグラファーがいたので、私は早々に写真撮影係を辞退して、学生の動きを観察することにした。今年参加した学生は皆積極的で、業務中の質疑応答も活発に行われているように感じた。ただ、それぞれが視察やインタビューに熱中するあまり、時折グループからはぐれてしまう学生が現れる。そういう学生に声をかけたり、引率の先生方、職員の方々とスケジュールの確認を行ったりして、業務全体が時間内にうまくまとまるように心配りをすることが大切だ(写真 1)。この点、チューター経験の豊富な河本さんの働きぶりは素晴らしく、見習うことばかりだった(写真 2)。

業務後、食事の手配や翌日のスケジュール確認を行うことも、チューターの大切な仕事だ。参加学生 10 数名の希望を聞きながら、レストランをアレンジするのはなかなか難しい。ま

た、食事中に会話から外れて寂しい思いをしている学生がいないか気を配ることも忘れてはいけない。さらに、全員がそろそろ数少ない場面で、体調の悪い学生はいないか、元気のない学生はいないかと、さりげなく様子をうかがう。初めて海外に出た学生もおおり、不安や緊張をどのようにほぐしていくか、チューター4人（前半チューターの田原さんは SNS のビデオ通話で参加してくれた！）で意見交換も行った。食事後のお勘定を取りまとめるのもチューターの仕事だが、ドルとリエル入り混じった会計は一苦勞だった。来年以降のチューターの方々には、常に小額紙幣を準備しておくことをアドバイスしたいと思う。

自由時間に、参加学生がどこで何をしているか把握するには、SNS のグループチャットが役立った。さらに現地用携帯を常に持ち歩き、突然の予定変更やトラブルに備える。各学生の動向をメモするためのメモ帳は必需品だった。渡航前には想像もしていなかったが、チューターは、業務中よりも業務前、業務後のほうが忙しかった。先生方のご配慮もあって、大きなトラブルはなかったが、長期



写真 2. 最後尾で今後の予定を確認しあう

間の慣れない土地での生活からくるストレスのせいか、食欲不振を訴える学生もいた。そういう学生には、ポカリやゼリー、果物の差し入れが喜ばれた。普段の食事の買い出し中に、どこに何が売っているかを確認しておくくと便利だった。

急な寒さやちょっとした休憩用に、大きなストールを持ち歩いていたのだが、これも重宝した。日差しがきついときや横にして休ませたいときに、さっと広げて使うことができる。学生数人まとめて座らせて、ひざ掛けにすることもできた。普段、自分の研究で海外に出る時の荷物は極力少なくするが、チューターとして参加する場合は、あらゆる場面に備えて思いつく限りのものを持っていくとよいと思う。

チューターとしての働きが最も期待されたのは、帰国時だった。学生全員の預け荷物が、小松空港まで届くよう手配されているか、また、重量オーバーはないか確認し、オーバーしているときはスタッフと交渉する。小松短期大学の木村先生ご指導の下、必要な書類の準備を確認して号令をかける。トランジットタイムの変更はないか、ゲート変更のアナウンスはないか、常に注意する。10 数名の学生が移動するので、どれだけ注意しても注意しすぎることはない。これまでに多くの海外調査を体験したこともあり、気を付けるべきことが明確に分かっていたのが役立った。これは私に多くの経験とアドバイスをくださった指導教員に感謝する。

参加学生のケアを行う一方で、学生の皆さんから学ぶことも多かった。積極的に問題解決に取り組む姿勢や、限られた時間の中で、いかに充実した時間を過ごすかの工夫は、学部生ならではのフレッシュさがあり、良い刺激となった。お別れの日、忙しい毎日の中でい

ったいいつ準備してくれたのだろうか、素晴らしいメッセージカードを贈られたとき、うれしさと寂しさでいっぱいになった。出会った皆さんと、これから先もずっと何かの形でつながっていられたらと心から思う。

今回、初めてのチューター業務で至らない点多かったが、ほか 3 名のチューターの支えがあり、最後まで業務を行うことができた。うまく行かないときには、その場その場で先生方が大学の垣根を越えてアドバイスをくださった。他大学の先生方や学生と交流する機会を得て、私自身も少し成長できたように思う。このような素晴らしい機会を恵んでくださった塚脇先生をはじめとする先生方、そしてアプサラ公団の職員の方々、そして滞在中に出会ったすべての方々に心から感謝したいと思う。

4) シェムリアップで感じたこと

横浜市立大学国際総合科学部経営科学系経済学コース 2年 塚脇理人^{まさひと}

8月20日から9月3日まで行われたアンコール遺跡整備公団のインターンにアシスタントチューターとして参加した。私の業務はインターン生とともに金沢からシェムリアップを問題なく移動すること、そしてシェムリアップでの写真撮影であった。本文では私がカンボジアで撮影した写真を中心に今回のインターンを振り返る。

今回のインターンは小松から上海を経由しシェムリアップに向かうところから始まった。上海空港では乗り継ぎまで3時間程度の予定であったが、シェムリアップ行きの飛行機が遅延し、5時間近くの待ち時間となった(写真1)。結局シェムリアップに到着したのは深夜になってしまい、インターン生には疲れとホテルに着いた安堵感が見られた。

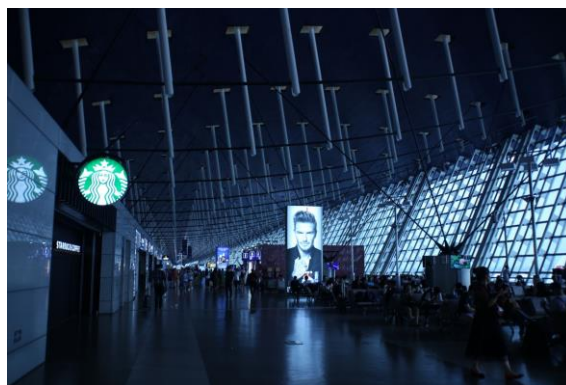


写真1. 上海浦東国際空港

翌日からカンボジアでの生活が始まった。カンボジアは気温がとても高く、汗かきの私にタオルはかかせなかった。さらに雨季ということもあり何度かスコールに見舞われた。スコールのあと気温は少し下がるが湿度は上がるように感じた。カンボジアではなにより安心して飲める水分が重要であった。慣れないカンボジアの気候や食事に体調を崩すインターン生もいたが、インターン生同士でのおもいやりもあり皆助け合って生活していたように思う。

滞在中にはさまざまな遺跡を訪れる機会が何度もあった。私自身初めてのカンボジアであったため、遺跡の壮麗さ、昂然たる様に圧倒された。インターン生も遺跡のその表情に感銘を受けているように見えた(写真2)。



写真2. 遺跡とインターン生

私はその中でもアンコール・ワットに強い関心をもった。アンコール・ワットは12世紀前半に建設されたヒンドゥー教寺院であり、ほかの遺跡に比べ規模が

大きかった。内部の壁画にはヒンドゥー教の神話が長い絵巻物のように描かれ、私はその作りの精巧さに驚いた。12世紀のクメール族がこの壁画を用いてどのようなことを表現したかったのか、次に訪れる機会があれば神話を紐解いて考えてみたいと思う。また、アンコー

ル・ワットはやはりかなり大規模な観光地でもあった（写真3）。雨季にもかかわらずたくさんの観光客が訪れている。アンコール・ワットの前には十分すぎるほどの出店があった。その多くは土産店で観光客は店員のおばちゃんに捕まっっているいろいろ勧められていた。インターン生も服や雑貨などをしつこく勧められ困っているようであった。他にはジュースやシェイクを販売している店も多くあり、どれも美味で皆楽しんでた。

今回シェムリアップに訪れて強く思ったことがある。それはカンボジアという国の穏やかさである。動物たちがのんびりと生活している様子がたくさん見受けられた。アンコール遺跡内にあるサルは他のサルたちと助け合い生活していた（写真4）。村の中にあるネコは他のネコと寄り添うようにして寝ていた（写真5）。動物たちはみな自由気ままに生きていた。これはシェムリアップに住む人々にも共通していることかもしれない。私が触れ合ったシェムリアップの人々は皆性格がおだやかであったように思う。日本に比べて生活水準は高くないのに皆のんびり楽しんでいるように感じた。

同時に「カンボジアの恵まれない子供たちを助けよう」などと謳っている日本のボランティア団体に疑問を感じた。日本人の価値観で見ると、観光客相手に必死にお土産を売っている子供たちは恵まれないように思えるかもしれない。しかし、そのような子供たちがお母さんと笑いあって生活する様子も見られた。日本人の価値観を押し付けてボランティアを行うことが本当にその人たちの生活を良くするのだろうかとの疑問に思った。そのようなことを行うより、今回のインターンのようにアンコール遺跡群の生活用水の現状を学びそれについての改善策を皆で考え伝



写真3. アンコール・ワット

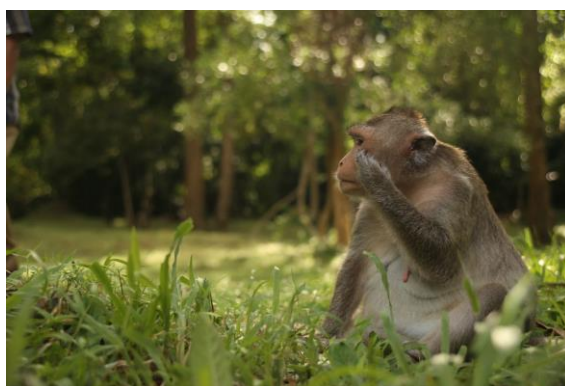


写真4. のんびりと過ごすサル



写真5. 眠るネコたち

えていくほうが、長期的に見た時に現地の人々の生活をよくすると考えられるのではないだろうか。

このようなシェムリアップの状況は日本のメディアからでは得られないと感じた。このような機会をくれた父、最初から最後まで引率していただいた木村先生、サポート側としての在り方をご教示していただいた他のチューターの方々、公団職員の方々、その他関係各位に心より厚く御礼申し上げます（写真6）。



写真6. 4人のチューター

6. 埼玉大学の海外フィールド実習報告

1) 埼玉大学の海外フィールド実習

埼玉大学教育学部生活創造講座・准教授 荒木祐二

金沢大学の海外インターンシップに参加するのは今回で6度目となる。本年度の埼玉大学海外フィールド実習には、埼玉大学大学院教育学研究科2年生（萩村真奈）と同教育学部2年生（浅野冴佳，小林京）の計3名が参加した。以下に，本年度の活動を振り返る。

筆者らが合流したのはインターンシップ業務の折り返しを過ぎた8月28日となった。到着時，埼玉大学の学生たちには移動の疲れが見てとれたが，お昼ご飯を食べるとすっかり元気になり安心した（写真1）。金沢大学と小松短期大学の学生たちとはタ・プローム寺院内で対面した。インターンシップの学生たちはすでに慣れた様子で遺跡内を散策し，遺跡に絡みつく巨木のスポングや絞め殺しの木に興味を示すと矢継ぎ早に質問してきた。初対面にもかかわらず距離感を感じさせない参加意欲に思わず笑みがこぼれた。

チューターの活躍は本年度も目を見張るものがあり，参加学生の安全確保に欠かせなかったと思う。チューターを務めた河本麻実さんはベテランの雰囲気醸成し，福井美乃さんも慣れた様子で参加学生たちを引率していた。また，さりげなく参加学生たちの安全を見守り，はぐれる学生がいないか確認してから最後を歩いてくる塚脇理人くんも貴重な存在だったと思う。3人の支援を受けて，参加学生たちは安心して活動に取り組めたことだろう。

インターンシップの傍ら，埼玉大学チームはアンコール遺跡内やトンレサップ湖の森林・水圏環境におけるフィールド実習を実施した（写真2，3）。トンレサップ湖の視察には滋賀大学の石川俊之氏と同行し，プランクトン採集をとおした水圏生態系のしくみについて説明いただいた。同じく同行した塚脇真二氏には，船上からドローンを飛行させてフィールド研究における空中写真の重要性を説いていただいた。筆者からはトンレサップ湖は雨季と乾季で景観が劇的に変化する世界的にも稀有な自然環境を呈し，周囲の森林は半年ほど湖に浸かる浸水林であり，そこに適



写真1. 昼食のフォーを味わう学生たち



写真2. アンコール・トムにて

応できた植物をいま目の当たりにしていると
いった話を伝えた。カンボジアに来なければ味
わえないフィールドの醍醐味を体感し、専門家
たちによる解説を現場で聞くことができ非
常に貴重な経験になったと思う。

トンレサップ湖では水上住宅で暮らす住民
へのインタビューも行った。突然の訪問にもか
かわらず躊躇なく家に招いてくださるカンボ
ジアの方々の大らかさに驚きつつ、ここでの教
育事情や出産・子育てに関する話を聞いて、学
生たちは教育の大切さや生活を支える社会基
盤の重要性について考えさせられていた。ま
た、宿泊先では鹿児島大学の本村浩之氏から、
採集した魚のサンプルを魚類標本にする工程
を説明していただいた(写真4)。水族館でのア
ルバイト経験を有する学生もいたことから、本
村氏の分類学に関する話を興味深く聞いてい
たようである。

また、シェムリアップ市内の孤児院を訪
問して子どもたちに折り紙を教えたり、
一緒にマスゲームをしたりして交流を
図った体験は、教育学部に身を置く学生
たちにとって感慨深いものとなった(写
真5)。最終日に実施したアプサラ公団職
員たちとの記念植樹(写真6)ならびに
ルンタエク村における有機農法による
作物栽培の圃場視察(写真7)も、埼玉
大学にて「スクールガーデニング」とい
う植物栽培実習を受講していた学生た
ちにとって関心の高いイベントになっ
たと思う。

本年度の海外フィールド実習の開催
にあたり、今回初めて埼玉大学グロー
バル化推進経費に申請したところ、無事に
採択されて学生分の旅費を工面するこ
とができた。申請時には過去の報告書を



写真3. プランクトン採集の見学



写真4. 魚類標本作製の見学



写真5. 孤児院で折り紙を教える

添付させていただき、その内容が評価されたことを素直に喜びたい。その一方で、今回の滞在が実質3泊4日の短期間になってしまった点を反省したい。筆者の業務上の都合とはいえ、参加してくれた3名の学生には申し訳なく感じている。また、各所の案内では筆者がほとんどの場面で通訳をこなしてしまう点も併せて反省したい。金沢大学・小松短期大学のインターンシップ参加学生のように、自分の気持ちを自分の言葉で話してカンボジアの人たちと心を通わせる体験をしてほしいと願っている。そのための手立てを引き続き検討したい。

しかし、筆者のそんな反省をよそに、学生たちが終始笑顔で活動に臨み（トンレサップ湖上での船酔いを除く）、あらゆることに興味を示してくれたことで救われた気がする。とくに、食事に関しては筆者の想定をはるかに上回る好反応をみせてくれた（写真8）。女子学生ならではの反応なのかもしれないが、食に対する情熱は今後の引率のあり方を検討するための情報として役立てたい。本年度の参加学生は淑やかでやや控えめではあったものの、カンボジアの自然や人々の暮らしに直に触れたことで、社会のあり方や自分がやるべきことを教育に携わる立場から深く考えてくれたと思う。この点は自信をもって断言できる。

インターンシップは活動全体が醸成され、アプサラ公団職員たちも毎年の恒例行事として参加学生たちを快く受け入れてくれている。今後も、学生たちの成長を後押しする本活動にかかわらせていただき、同時期に埼玉大学のフィールド実習を継続していただけることを願っている。末筆ながら、この度の渡航であらゆる面でお世話になった塚脇氏をはじめ、魚の標本整理の現場を見学させていただいた鹿児島大学の本村氏、トンレサップ湖にてプラン



写真6. 公団職員との記念植樹



写真7. ルンタエクでの作物栽培の見学



写真8. ルンタエクで有機野菜の料理を堪能

クトン採集調査を解説していただいた滋賀大学の石川氏，本学学生も気遣ってくださった小松短期大学の木村氏，今回お会いできなかったものの安定して支援いただいているアプサラ公団副総裁の Hang Peou 氏，公団職員たち，とりわけトンレサップ湖での住民インタビューに協力してくださった Sin Pisey 氏，運転手兼通訳として助力いただいた So Pheng 氏，その他ご支援いただいた関係各位に心より感謝申し上げます。

2) 海外フィールド実習に参加して

埼玉大学教育学部学校教育教員養成課程 2年 小林 京^{みやこ}

私は、8月28日から8月31日までの4日間、カンボジアでの海外フィールド実習に参加しました。私は以前から発展途上国支援に興味があり、いつか発展途上国を訪れてみたいと思っていました。そんな中、荒木先生の授業でこの海外フィールド実習の話聞き、参加させていただけることになりました。

カンボジアでは、遺跡に行ったり、トンレサップ湖に行ったり、エコビレッジを訪問したり、ナイトマーケットでお買い物をしたりして過ごしました。盛りだくさんの4日間の中で、日本での普段の生活ではできない、たくさんの貴重な経験をしました。

遺跡はアンコール・ワット、アンコール・トム、タ・プロームに行きました。それぞれ、とても迫力がありました。細かく繊細な彫刻がなされていたり、とても高いところまで石が積み上げられていたり、昔の人の技術に圧倒させられました(写真1)。アンコール・ワットは30年以上かけてつくられたと言われていたそうです。30年という長く感じますが、何百年も前にあの大きな遺跡をつくったのだと考えると、短く感じてしまうほどでした。



写真1. アンコール・ワットの彫刻

遺跡ではフランスや日本、インドなどの支援により修復作業が行なわれていました。ただ形をなんとなく直せば良いというわけではなく、どこまでどのように修復するのか、など様々な問題を抱えていることを知りました。また、アンコール世界遺産は人の住んでいる遺跡群であるため、観光地にするにあたって、様々な問題が生じることを考えさせられました。遺跡を修復するのは簡単ではないということとともに、人の住んでいる遺跡を観光地にする事の難しさを実感しました。

トンレサップ湖では、水上生活をしているご家族のお宅に上がらせてもらい、直接お話を聞くことができました(写真2)。家が湖に浮いているため、家の中も船のように少し揺れていました。水上で暮らしていて本当に生活は成り立つの



写真2. トンレサップ湖の水上住宅

だろうか初めは疑問に感じていましたが、話を聞くと、学校があつたり、船で生活に必要なものを売りに来てくれる人がいたり、と想像していたよりも生活はしやすいと思いました。しかし、一番上の男の子は兄弟の面倒を見るために学校に行っていないことなど課題となる点も多く見受けられました。

ナイトマーケットでは、生まれて初めて値段を交渉してお買い物をしました。初めはどうすればいいのかよく分かりませんが、だんだんお買い物の仕方が身につきました。可愛いものがたくさん売っていて、日本と比べるとかなり安い値段で買えるので、ついたくさん買ってしまいました。また、カンボジアの方々が日本語で話しかけてきたことに初めはとも驚きました。まさか異国の地であれほど日本語を聞くとは思いませんでした。

金沢大学、小松短期大学のインターシップの方々、鹿児島大学フィールド実習の方々とは短い時間でしたが、活動を一緒にしたり、お食事をしたりしました。活動のひとつひとつをととても真剣に取り組んでいる姿が印象的でした。なかでも、孤児院に訪問したとき、英語を使いながら子どもたちと積極的に楽しそうに遊んでいたのをよく覚えています。

カンボジアでの4日間の中で私が一番衝撃を受けたのは、交通事情です。移動は主にタクシーだったのですが、道路ではバイクやトゥクトゥクがぶつからないすれすれのところを通るのでドキドキしました。道路はゴツゴツしているところも多く、タクシーが泥にはまってしまうか、心配になるところもありました(写真3)。日本の交通が整備されていることを再認識しました。タクシー以外には、一度だけトゥクトゥクに乗りました(写真4)。窓がないので風が気持ちよく、外の景色はとても迫力がありました。



写真3. 郊外でみられた未舗装の道路

今回、この海外フィールド実習に参加することができて本当に良かったです。国を開発する取り組みの中で出てくる様々な問題、発展途上国ならではの問題を、身をもって感じることができました。この先カンボジアをはじめとする発展途上国に対して、私自身は何ができるのだろうかと改めて考える良い機会にもなりました。関わってくださった方々に感謝しています。ありがとうございました。



写真4. 市内を走るトゥクトゥク

3) カンボジア海外フィールド実習を振り返る

埼玉大学教育学部学校教育教員養成課程 2年 浅野冨佳

大学2年生の夏休み、私はとても素晴らしい体験をしました。4日間のカンボジアのフィールド実習中に、繊細なレリーフをもつアンコール遺跡群をまわったこと、おいしいクメール料理、トンレサップ湖での調査に同行したことや優美なアプサラダンスを見たこと…、どれも一生忘れられない経験です。

この実習に参加するにあたって、ただ受動的に参加するのではなく、カンボジアについてしっかりと学んでから行きたいと思い、事前にカンボジアについて調べたほか、3つの目的をたてました。1つ目の目的は、アンコール遺跡群を自分の目で見てその場の空気に触れること。2つ目の目的は美味しいものをいっぱい食べること。3つ目の目的は子ども達の教育環境について知ること。この3つの目的は4日間で達成出来たと思います。

私はアンコール・ワットを始めとした、遺跡群の荘厳さや彫刻の精密さに驚きました。その中でも一番のお気に入りにはタ・プローム遺跡です。退廃的な雰囲気と静けさを持ち、寺院を押しつぶさんばかりの巨大なスポングの幹は血管のように遺跡に絡みついでいて生命の迫力を感じさせました(写真1)。タ・プローム遺跡のレリーフの中には削り取られ、見えなくなっていた物もありましたが、中央祠堂付近に残るレリーフには、美しいデバター(女神)の彫刻が施されていました。アンコール・トムでは、巡礼中の現地の人をみかけました。遺跡は、私たちにとっては観光地であるけれど、カンボジアに住む人々にとっては聖地として重要な物であり、観光客の振る舞い方を考えさせられました。



写真1. 巨大なスポングの幹

また、カンボジアは素晴らしい遺跡だけでなく、食べ物も美味しかったです。現地に行ったら、絶対に食べたいと思っていた“アモック(写真2)”。普段は魚が苦手あまり食べないのですが、白身魚がふわふわで柔らかかったのがほんとうに美味しく、何回もおかわりをしました。フルーツのスムージーは、いろいろなところで飲みましたが、どれも絶品で



写真2. クメール料理”アモック“

した。他の大学の学生達と食事の時間を過ごし、自分の知らなかったことや、どのような活動をしているのかを話すことが出来て、とても楽しい時間を過ごせました。エコビレッジの見学では、職員の説明に熱心に耳を傾け、真剣に考える様子や、積極的に英語を使って質問をしたり、コミュニケーションをとったりする金沢大学や小松短期大学の学生の様子が印象に残っています。

フィールド実習では、いろいろな場面で子ども達と接する機会がありました。カンボジアを訪れて特に感じたのは、子どもたちの多様な「学び」に対する意欲です。孤児院で遊んだ子どもたちも学ぶことが好きと、話してくれました。いっしょに折り紙をして遊んだときも、真剣に手裏剣の作り方を覚えてくれたり(手裏剣の作り方に似た折り方がカンボジアにもあることを教えてくれました)、英語で話しかけてくれたりと何事にも一生懸命で、学びに対して積極的でした。

写真3は、エコビレッジでの子どもたちによるクメール舞踊の歓迎です。ステージでクメール舞踊を披露してくれた女の子の横で、小さい女の子たちが、お姉さんたちの踊る様子を真剣に見ていました。そして時々、腕を動かしたり、座ったり真似をしている姿がとてもほほえましく、印象的でした。また、現地の方へのインタビューで伺った水上生活をしている家族では、長男は弟の面倒



写真3. クメール舞踊を真似る子どもたち

を見るため学校へ行けない上に、他の兄弟も、学校まで泳いで向かうそうです。これは、まだ教育設備が整っていないこと、誰もが平等に学べるわけではないこと等、日本とは違う教育に対する課題を見つけました。私には孤児院の子ども達、エコビレッジの子ども、トンレサップ湖にすむ家族の兄弟達は、みんな学ぶ機会を欲しているように見えました。子ども達の「学びたい」という意欲に、私は何が出来るのだろうと深く考えさせられる場面がありました。

今回、実習に参加したことで、今まで以上に支援に興味を持ちました。しかし、現地の人とコミュニケーションをとるときに自分の英語が伝わらなかつたり、相手の言葉が分からなかつたりと歯がゆい思いをした場面もありました。また、カンボジアについてインターネットで調べたりする以上に、実際に体験してみて、現地で触れて、初めて知ることが多くありました。これからはもっと英語を学び、いろんなことにチャレンジしていきたいです。このような2度と無い機会をつくってくれ、4日間引率してくれた荒木先生をはじめ、本当にたくさんの方にお世話になりました。心より感謝いたします。ありがとうございました。

4) カンボジア海外フィールド実習を終えて

埼玉大学大学院教育学研究科教科教育専攻 2年 萩村真奈

私は、今回の実習で初めてカンボジアを訪れました。4日間という短い滞在でしたが、その中でたくさんの貴重な体験をすることができました。

初日は、到着してからすぐ昼食にフォーを食べました。カンボジアでの食事が自分の口に合うのかとても心配していましたが、一食目からとてもおいしいごはんを食べることができました。また、そのときに飲んだマンゴースムージーもとてもおいしかったです。昼食の後は天空の城ラピュタのモデルでもあるタ・プローム寺院へ行きました(写真1)。大きな木々が遺跡中に絡みついていて、とても幻想的な光景でした。



写真1. タ・プローム寺院

2日目は、トンレサップ湖へ行き、船の上で行う水中光環境調査や植生調査の様子を見学しました(写真2)。普段船に乗ることはないの、気持ちの良い風や波を感じることができて楽しい経験となりました。船酔いもしてしまいましたが、船酔いしたときには体に対して上下ではなく左右の揺れにするために横になると良い、ということも知ることができて勉強になりました。



写真2. トンレサップ湖上

さらにそのあとに、湖上で暮らす家族にインタビューを行うこともできました。暮らしのすべてが私の知っているものとは異なっていて驚くことばかりでした。一番衝撃的だったのは、湖に排せつし、その湖の水を使用して料理を作っていたことです。聞いた時は衛生面がとても心配になりましたが、生まれた時からそこで生活していれば大丈夫だそうです。物も少なく、一見恵まれない環境であるように思いましたが、子どもたちは湖で楽しそうに遊んでいてとても生き生きしていました。子どもたちのお母さんも「今が幸せ」と語っていて、一方

的にそこを恵まれない環境だと思ふことは間違っているかもしれないと思ひました。しかし、今よりも快適で衛生的な生活ができるようになればもつといいと思ひます。

湖から戻ってからは、マーケットを見学したり、ネイルをしてもらったりしました。細かいデザインだったのにも関わらずあつという間に仕上がって感動しました。夜はアプサラの伝統的な踊りを見ながらビュッフェ形式のごはんを食べました。また、そのとき初めてトゥクトゥクにも乗りましたが、アトラクションのようにスリリングで、楽しかったです。



写真3. アンコール・ワットの壁画

3日目は、朝からアンコール・ワットとアンコール・トムへ行きました。天気にも恵まれて、世界遺産を堪能することができました。とくにアンコール・ワットの壁画は、方角ごとに違いがあつて面白かったです(写真3)。

また、鹿児島大学の魚類採集の調査の様子も見学することができました。鹿児島大学の学生たちはとても熱心に丁寧に魚の標本を作っていました。初めて魚の標本作りの様子を見学しましたが、繊細な作業とできあがった標本のきれいさにとても感銘を受けました。

夕方からは、孤児院へ行って現地の子どもたちと遊びました。言葉がうまく通じなくても折り紙やゲームを通じてコミュニケーションを取って距離を縮めることができましたし、何より子どもたちは純粋で優しく、とても短い交流だったのにもかかわらずお別れがとてもさみしかったです。

最終日はタ・プローム寺院での植林祭に参加しました。遺跡を守るために植林をしていて、私たちもその植林体験をしました。私たちは木を植える作業でいっぱいでしたが、金沢大学や小松短期大学のインターンシップの学生たちはすぐに現地の参加者とコミュニケーションをとり、和気あいあいとした雰囲気とても一生懸命に植林をしていました。

今回の実習を通して、ただ観光をしに来るだけでは分からなかったであろうこともたくさん学べて、カンボジアという国を身近に感じるようになりました。また、たくさんの人とも出会い、普段できない経験をしたことで、私の狭かった視野が確実に広がりました。これからの学生生活においても、将来教員になったときにも、カンボジアをはじめとする発展途上の国のために私にできることを見つけて積極的に取り組んでいきたいです。いつか必ずまたカンボジアを訪れたいです。

このような貴重な機会を設けていただき、本当にありがとうございました。

7. 鹿児島大学の海外フィールド実習報告

1) 鹿児島大学の海外フィールド調査実習

鹿児島大学総合研究博物館・教授 本村浩之

金沢大学の海外インターシップに合流し、鹿児島大学の海外フィールド調査実習を施した。昨年に引き続き2回目となる今回の実習では、鹿児島大学水産学研究科の学生2名(写真1,2)が参加し、アンコール遺跡公園内の魚類相を調査した。

参加学生の2名はふだん海水魚の研究をしているため、淡水魚に関する知識はほとんどない。そこで、今回、淡水魚の調査の仕方や標本作成法を学ぶため実習として、アンコール遺跡公園内のアンコール・ワット環濠(写真3)、西バライ、北バライ(写真4)、およびスラ・スラン沐浴場遺構における魚類の調査実習を行った。筆者らはこれら4水域の魚類調査を継続的に行ない、魚類相の季節や経年変化を記録している。

晴天に恵まれた西バライでは、金沢大学・小松短期大学のインターンシップと合同で調査実習を行った(図版5)。インターンシップ参加者は、曳網や投網での採集調査を見学し、魚を網から外して集める作業を体験した。およそ1時間で500匹ほどの魚を採集することができた。

採集した魚はホテルに持ち帰り、標本作成と撮影を行った(写真5,6)。魚は学術標本として半永久的に管理・保管される。姿かたちは残るが保存液に入れると色彩が消えてしまうので、保存する前に写真を撮り、生鮮時の色彩を記録しておくことが重要である(写真7)。

調査実習の合間にインターンシップの参加者とも交流を深めることができた。調査実習



写真1. 修士2年の稲葉君



写真2. 修士1年の萬代さん



写真3. アンコール・ワット環濠の調査

は今回も無事に終わることができたが、これは金沢大学の塚脇さんによる入念な事前準備とアプサラ公団職員のご厚意によるものであろう。今回の調査実習では、滋賀大学の石川さん、埼玉大学の荒木さん、小松短期大学の木村さんにもお世話になった。ありがとうございました。



写真4. 北バライで魚採り



写真5. 魚の鱗を広げる「展鱗作業」

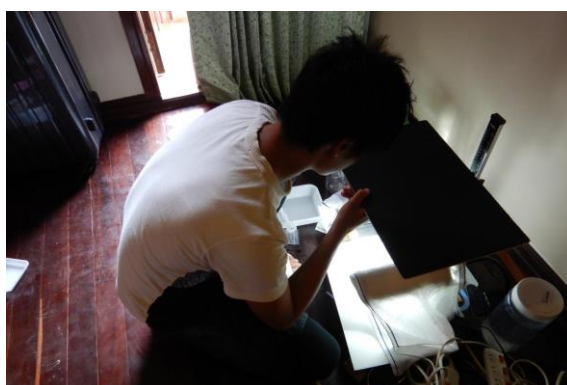


写真6. 写真撮影



写真7. 西バライで採集されたフグの仲間の標本写真（体長 48.7 mm）

2) シェムリアップにおける魚類相調査実習

鹿児島大学大学院水産学研究科修士課程 1 年 萬代あゆみ

2017 年 8 月 26 日から 9 月 2 日までの 8 日間、所属する研究室が行う魚類相調査実習に参加するためにカンボジアへ渡航、シェムリアップに滞在させていただいた。以下にそこで行われた実習の様子を記したい。

今回の調査はアンコール・ワット北西部と南東部それぞれのお堀、北バライ、西バライ、そしてスラ・スランの計 5 地点において行われ、すべて淡水魚の採集であった。私自身の専門が海水魚ということもあり、普段から淡水魚を目の当たりにする機会は少ないため、生では見たことのない魚が沢山採れることを楽しみに採集地へ向かった。

カンボジアにおける魚類相調査実習では、アプサラ公団の職員の方に同行して頂き現地の漁師の方と採集を行った(写真 1)。私たちと行動を共にくださったのは和やかな雰囲気漁師御一家であった。採集には曳網と投網が用いられた。御一家の夫婦が長さ 3 m、高さ 1 m ほどの曳網の両端をそれぞれ持ち、服を着たまま肩につかるほどまで水へ入る。そして、網を水面に対して垂直に立て、網で水を押すようにして数 m 進むと岸に近づき網を上げる。するとそこに、日に当たると透き通るような半透明の体色をもつ大量のグラスフィッシュをはじめとして、コイやドジョウ、ナマズの仲間がかかっていた。それらを私たちが漁師一家と協力して網から外し、採集バケツの中へ入れる。ひとつの最終地点につき 5 回前後網を曳いていただいた。曳網採集の傍らで、投網による採集も行われた。1 回の採集で 2 リットル標本瓶 3 本分ほどの魚が採れていたように思われる。採集にはいつも一家の小さな男の子がついて来ていたが、手網で淡水ダツやフグの仲間を採集するなど、彼もまた凄腕のフィッシャーマンであった。



写真 1. 現地の方々の魚類採集

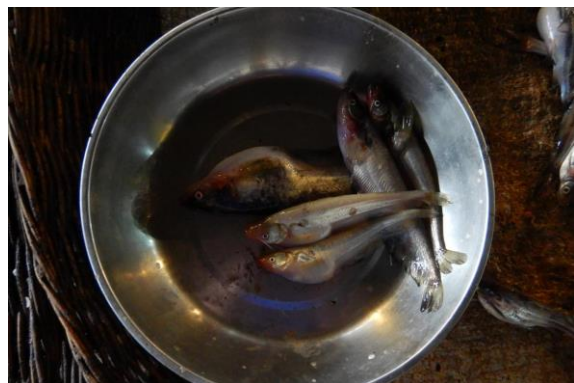


写真 2. 市場で購入したナマズの仲間

そのほか魚市場での採集も行った。今回訪れたクロム市場は、所狭しと魚が並び、新鮮な魚が籠を飛び出して床で跳ねる様子が観察されるなど活気が感じられた。市場では 10 cm

前後のナマズの仲間を数匹購入した（写真 2）。市場採集で反省すべき点のひとつは、魚を触るためにゴム手袋を装着したことである。市場の魚たちは、私たちにとって研究材料だが、そうでない方にとっては食料である。考えてみればそれをゴム手袋で触るといのは大変失礼なことだった。

採集した魚は採集場所と日付を記録しておき、学術標本として登録・保管する。標本として登録する魚はまず水洗いをして、体についた汚れやごみを取り、標本番号タグを振り分ける。タグの振り分けられた魚の各鰭を広げ、鰭の立った、魚が活着しているときのような状態で体を固定したのち（写真 3）、デジタルカメラで写真を撮る。魚は処理を施すと体色が抜けるため、生鮮時の色彩を写真で残



写真 3. 鰭を立てて体を固定した魚

しておかなければならない。色彩も、標本に関する大切なデータのひとつである。写真撮影後、写真や標本そのものを元にして、その魚が数ある種の中のどれであるのか図鑑や文献を用いて調べ、種名を記録した。連日朝から昼にかけて採集を行い、昼から夕方、ときには夜も標本作成を行った。調査では現地の漁師の方々や職員の方々のサポートを受け、これまでに標本が得られていなかった種も採集されるなど良い成果を挙げることができた。お世話になった現地の方々には厚く御礼申し上げたい。

滞在中は、魚類調査実習以外の場面でも貴重な体験をさせて頂いた。印象に残った出来事として、アプサラ・ダンスというカンボジアの伝統舞踊を鑑賞したことが思い起こされる。アプサラの語源は古代インドの神話に登場する天女の名前アプサラスで、アプサラ・ダンスは古来より神に祈りをささげるための踊りであったという。色とりどりの腰巻きに煌びやかな装飾のついた金色の冠、冠



写真 4. アプサラ・ダンスを踊る女性たち

と同色の耳飾りや腕輪を身に着けた踊り子たち（写真 4）。クメールの微笑みと呼ばれることもあるという彼女たちの、艶やかな手指の動きに見入るばかりであった。

また、採集や食事のための移動の際、トゥクトゥクを利用するのも現地生活の楽しみのひとつであった。カラフルな車体と陽気な客引きで、乗る前から心躍ったものである。客引きに声をかけられるたびに立ち止まって返事をしていてはきりがないため、いつも歩みを止めることはないのだが彼らはあの手この手で通行人の気を引こうとする。思わず振り

返ってしまったのは、通り過ぎた背中に投げかけられた「どこへ行きたい？アンコール・ワット？東京？」という客引き文句。海を渡ることさえ難しくないかのように言われると、どこか希望が感じられて面白かった。

さらにインターンシップに参加していた他大学の学生の方との交流の場を設けて頂いたことも記憶に新しい。何度か食事をご一緒させて頂き、カンボジアでのインターンシップの目的や内容、それぞれの大学で学んでいることなどについてお話を伺った。同じ場所で自分とは異なる経験をしている学生と交流することができて、食事の時間がより有意義なものとなった。またインターンシップに参加していた学生のうち半数の方には、西バライでの魚採集を体験して頂いた。網に絡めとられた魚を外すのには少しコツが必要で、手指に魚の棘が刺さるなど暑いなか辛かったのではないかと想像するが、真摯に取り組む姿に感銘を受けた。

国外での魚類調査実習、ましてや世界遺産における採集というのは様々な許可が必要ということもあり容易に体験できることではない。本実習では今後必ず自らの研究やフィールド調査に役立つと思われる貴重な経験をさせて頂いた。今回参加を受け入れてくださり、現地での安全な生活をサポートして下さった各機関の先生方ならびに職員の方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。最後に、これまで見たことのない淡水魚の姿を数多く見せてくれたカンボジアの豊かな自然と、クメールの微笑みに守られた美しい国に感謝したい。

3) カンボジアでの淡水魚類調査実習

鹿児島大学大学院水産学研究科修士課程 2年 稲葉智樹

「アンコール・ワット遺跡のお堀内で魚類調査ができる」。指導教員である本村先生のこの一言で、すぐに参加の意思を表明した。普通に生活していればまず体験できないこの貴重な機会を、逃す手はなかった。また今の私は海水魚の分類を研究しているが、元々は熱帯魚が好きなこともあって、かつて多くの淡水魚を飼育していた。近所のペットショップで見た海外産の淡水魚を現地でこの手で採集したいという強い好奇心が湧き、調査当日が待ち遠しくて仕方がなかった。

日本から飛行機で約7時間、大きなトラブルもなく無事にカンボジアへ到着した。翌朝、まずは魚が売られている市場へ向かった。売り場の面積は広くはなかったが、市場では大小様々な淡水魚がバケツや籠に入った状態で売られており、売り買いする人々で賑わっていた。一番初めに目に入ってきたのは 50 cm 程の大きなライギョの山だった。彼らは水の入った容器内で活かされていたが、時々元気な個体が容器を飛び出し、市場の通路を這い回っていたことに衝撃を覚えた。店の方々は特に気に留める様子もなく、なれた手つきでサッとライギョを抱え、素早く容器内に戻す。日本の鮮魚店ではなかなか見られない光景にしばらく見入っていた。



写真 1. 2 日目に訪れた活気ある魚市場

さらにその翌朝、今度はより大きな魚市場へ向かった。かなり広くまた訪れた日が平日の月曜日ということもあって非常に混雑していた。ここでは初日に見られなかったパンガシウスなどのナマズやトゲウナギ、さらにはミズヘビまで様々な種類の魚が売られていた

(写真 1)。私個人としては日本の熱帯魚店でしか見たことがない魚達を目の前にして、彼らの観賞魚としての一面とは違った面を見ることができ、非常に勉強になった。

その後は帰国までにアンコール・ワット、西バライ、北バライ、スラ・スランで魚類採集を行った。現地を実際に目で見るまでは入り組んだ小さな水路で調査を行うイメージを持っていたが、実際



写真 2. 遺跡周囲の広大なお堀

は遺跡が非常に巨大なためお堀も同じように大きく、対岸までの幅が軽く 100 m 以上もあった (写真 2)。場所によっては水深も深く慣れていない私たちには危険なため、現地で漁業を営む一家に協力していただき採集を依頼した。彼らは 2 本の棒の間に 3 m ほどのネットを張った大きな漁具を使い、浅瀬を探っては魚を追い込んで採集していた。地点によっては私も手網を用いてガサガサで魚を追い込み採集した (写真 3)。



写真 3. 手網を両手に採集する私

主に採れたのは一般的にグラスフィッシュと呼ばれる透明な体をもつ魚で、多いところでは一度の追い込みで 100 匹ほどが揚がった。ネットが水面から引き上げられる際、グラスフィッシュの体が日光に照らされキラキラと光り、非常に美しかった。この魚は以前飼育した経験があるが、それが大量に採れるため壮大な眺めだった。漁師さんが陸に上がると魚を網から丁寧に取り外し、素早くクーラーボックスに入れる。ゆっくり作業をしていると魚の鮮度がどんどん悪くなってしまうため、とにかく時間との戦いだった。

このようにして魚を採集した後はそれらをホテルに持ち帰り、種類を調べ、防腐処理を施したのちにきれいな標本にして保管する。そのなかで各鱗を小さな針で広げて固定し、体の状態が良いうちにデジタルカメラで撮影し、鮮時の記録としてデータを残す。これらの処理を行うことで、標本とその情報を半永久的に世に残すことができる。どの場所にどんな種類の魚がどれだけ生息していたのかという情報は学術的に非常に貴重なものとなるため、必然的に作業にも熱が入った。一番大変だったのは、採集した魚が一体どの種類なのかを調べ明らかにすること (同定) だった。図鑑や過去の記録を頼りに属までは比較的簡単にたどり着くのだが、そこから更に絞って 1 種に同定することが困難を極めた。初めは全く判断できずに先生に尋ね、図鑑とにらめっこする時間が長かったが、調査を繰り返していくうちに種類をだんだんと覚えることができた。

食事の面でも非常に興味深かった。ホテルの近くにある中華料理屋では、ナマズの揚げ物がメニューにならんでいたのが目に留まり早速注文した。料理がテーブルに届くのとその迫力に圧倒された。20cm ほどのナマズ 2 匹が素揚げになっており、頭の骨がゴツゴツしていて兜のようだった (写真 4)。味付けは塩のみ



写真 4. ナマズの揚げ物

というシンプルな料理だったが、身は大変柔らかくふわふわしており美味しくいただくことができた。カンボジア料理は味付けが日本人好みのものが多く、他にも伝統的な肉料理であるロックラックをはじめどの料理も非常に美味しかったことが印象に残った。ホテル近くのスーパーにも何度か立ち寄ったが、日本では見ることのできないような魚たちがトレーに詰められ販売されていた（写真5, 6）。

私達からみれば魚は標本にするための貴重なサンプルだが、現地の方々からすれば貴重な食料である。これらの魚を見ながら調理方法や味付けを想像することが楽しく、新鮮だった。また魚ではないが、ベーカリー店では甲殻類(?)のような形をしたパンが売られていた。不思議な表情と形をしており、非常に興味深かった（写真7）。

またインターンシップに参加している学生と交流する機会をいただいた。皆物事に対する好奇心が非常に強く、それぞれが自分の情熱を持って活動していた。採集された魚をネットから取り外す作業を手伝っていただいたが、皆楽しそうに目を輝かせる光景を見てフレッシュなエネルギーを感じた。私達を含めてお互い勉強している分野が異なるため、食事会などで親睦を深め交流することで私にとって勉強することが多く、非常にいい刺激になった。

今回の調査では一生に一度あるかどうかという経験をさせていただき、私の人生の中で忘れられない出来事となった。また滞在を通して人と人とのつながりの大切さを実感した。今回私が調査に参加できたことは、金沢大学の塚脇先生をはじめ、アプサラ公団職員の方々、私を調査に誘ってくださった本村先生、小松短期大学の木村先生、滋賀大学の石川先生、埼玉大学の荒木先生、インターンシップに参加していた学生の皆さんなど、多くの方々の



写真5. パック詰めされていたトゲウナギ



写真6. ブロック状で販売されるナマズ

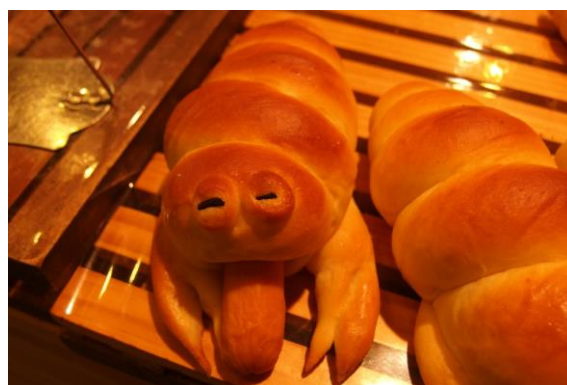


写真7. 甲殻類のような不思議なパン

ご厚意と協力があってはじめて実現できた活動である。この場をお借りして熱く御礼申し上げます。今後も自分の興味のアンテナを常に張りつづけ、好きなことに情熱を持ち、人と人との出会いを大切にしていきたいと思う。

8. 金沢大学の海外インターンシップに参加して

滋賀大学教育学部環境教育講座・准教授 石川俊之

今回、金沢大学の海外インターンシップと同時期に学術調査でカンボジアに滞在し、インターンシップに一部参加させていただいた。2週間のインターンシップの日程の後半の一部であったが、参加した学生さんたちの様子や、引率教員やチューターの学生さんたちとの交流で得られた印象から、この海外インターンシップの特徴を考えてみた。

私の滞在中に海外インターンシップに合流させていただいた場面は、アンコール遺跡群でも著名なバイヨン寺院、バンテアイ・スレイ寺院、タ・プローム寺院の見学である。また、海外の滞在での楽しみのひとつである食事にも、一部ご一緒させていただいた。

私自身は、東南アジア最大の湖沼であるトンレサップ湖やその集水域の水環境を研究対象にしている(写真1)。アンコール遺跡群を訪れるのは、環濠や水路の調査のためであり、遺跡そのものについては書籍で読んだきりでそれ以上関心をもつことはなかった。今回、インターンシップに参加した学生さんたちから、遺跡をみて純粋に驚く様子や、建造の仕方、建造当時の人々に想いを巡らせる



写真1. トンレサップ湖での水環境調査

ような言葉が聞くことができ、素直なカンボジアの味わい方を再確認できた思いがした。一方で、私たちが調査している水環境と遺跡の関連や、遺跡を中心とした観光産業の発達と水環境の関連についてインターンシップに参加した学生さんに説明すると、率直にそれは重要ですねという反応が返ってきて嬉しく感じた。

また、アンコール遺跡群が森林や水環境に囲まれた生物にあふれる場所であることも、インターンシップに参加した学生さんはよく感じ取っていたようである。例えば、バンテアイ・スレイ寺院では鳥の群れや、水たまりのカエルを楽しそうに撮影していたのが印象に残っている。私がインターンシップに合流したのはちょうどインターンシップの1週目が経過したところである。それまで、アプサラ公団の業務を通じて森林景観の管理や地域社会の支援に携わることで、遺跡が建物だけでなく周りの森林や水環境、人々の営みも含めてアンコール遺跡群を俯瞰できるようになっていたのだろう。

また、タ・プローム寺院では、シロアリの塚を見つけ、インターンシップの学生さんにシロアリの暮らしについて説明を行った(写真2)。シロアリが屋外にいることにも驚くほほえましい学生さんたちであったが、働きアリと兵隊アリの違いを見分け、兵隊アリの立派な顎の戦闘力の高さを木の枝やノートの端で確かめている姿を見られ、熱帯の自然の面白さ

に少しでも気づいてもらえたと思う。

私が所属している滋賀大学教育学部では、屋外での実習科目を複数担当しており、大学生を引率して体験を通じて学ぶということについて試行錯誤している。その中で、非常に悩ましく思うのは「体験」と「知識の習得」の両輪をいかにバランスよく動かしていくかである。

今回、金沢大学の海外インターンシップで感じたのは、事前の指導が細かく行き

届いており、体験の意味を参加者が正しく理解していることである。インターンシップ1週目が終わったところに、観光客がこぞって訪れるバイヨン寺院、バンテアイ・スレイ寺院、タ・プローム寺院の3つを訪れているというのは、観光目的のインターンシップ学生がいたとしたら、「長いおあずけ」であっただろう。しかし、この3寺院を訪れたインターンシップ学生の様子からは、それまでの1週間の体験を通して遺跡の保全について自分の知識や考え方としてしっかり持ち、3つの寺院の状態の違いや保全の方向性についてしっかり考えながら見学しているように感じた。

また、インターンシップにおけるチューターの存在が非常にうまく機能していることにも感銘をうけた。インターンシップの学生は複数の学部・大学から参加しており、普段行動を共にしていない、初めて組んだ仲間である。このようなグループが慣れない海外で行動するためには、現地のエキスパートである引率教員だけではうまく引率できないであろう。なぜなら、引率教員からすれば想像もできない単純なことで悩み、想像もできないケアレスミスがありうるからである。これが、普段から行動を共にする、例えば同じ学科の実習であれば、互いに励ましあい、注意しあうことができるだろう。初めて組んだ仲間では、自分たちの経験値に近く、一方で頼りになるチューター制度が不可欠である。このような人材を確保することは非常に難しいことは想像に難くないが、私の見る限り、今回のインターンシップのチューター諸氏は非常にうまく機能していた。

さらに、この海外インターンシップの特徴として、ひとつのカウンターパートがいて、滞在中はカウンターパートの様々な業務を経験していくという点があげられる。多くの大学や団体による海外研修では（私の所属する大学でもそうだが）、カウンターパートは存在しても、滞在中には広く浅く現地の文化等を経験する形がとられることが多い。このような形式は参加者にとって一日一日と変化に富むであろう。しかし、経験から深く学ぶという目的を考えると、このカンボジアでの海外研修の体制は、非常に教育効果が高いと思う。また、参加学生も、研修を続けていくうちに、カウンターパートとの信頼関係が構築されることや、自分の貢献が認められることの充実感を得られているものと感じる。

最後に、引率教員として7年間奔走してきた塚脇教授、一昨年度より参加している木村



写真2. タ・プローム寺院でのアリ塚の解説

准教授の奮闘ぶりも書いておきたい。カウンターパートであるアプサラ公団の多忙さの中、参加学生のために日夜調整を行っていること、信頼できる現地在住の方から安全のことや美味しいレストランの情報を絶えず集めていること、自動車の運転手やトンレサップ湖のボートの操縦士との信頼関係を大切にしていること、現地の子供にも大人にも友好的に受け入れられるよう、ちょっとした

振る舞いまで神経を巡らせていること、まだまだ書き足ませんが、少しぼんやりとしている私でも滞在中にしっかり拝見させていただきました（写真3）。

最後になりますが、このような充実した海外インターンシップの体制のノウハウが継承されていくことを期待しています。



写真3. アプサラ公団水管理部門にて

9. 資料

2017年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要

1. 参加者

(1) インターンシップ学生（金沢大学・小松短期大学）

- 須永 珠緒（金沢大学人間社会学域国際学類 国際社会コース 2年，グループ 1）
- 北野 絵理佳（金沢大学人間社会学域人文学類 人間科学コース 3年，グループ 1）
- 東野 香菜子（金沢大学人間社会学域国際学類 米英コース 2年，グループ 2）
- 埴崎 未緒（金沢大学人間社会学域国際学類 日本・日本語教育コース 3年，グループ 2）
- 杉田 枝穂（小松短期大学地域創造学科 臨床工学ステージ 1年，グループ 3）
- 洪 ハンナ（金沢大学人間社会学域国際学類 国際社会コース 2年，グループ 3）
- 米沢 諒哉（金沢大学人間社会学域法学類 総合法学コース 3年，グループ 3）
- 森田 愛加（小松短期大学地域創造学科 航空・観光ホスピタリティステージ 1年，グループ 4）
- 宮川 愛理（金沢大学人間社会学域国際学類 ヨーロッパコース 2年，グループ 4）
- 田中 裕之（金沢大学理工学域環境デザイン学類 環境・防災コース 3年，グループ 4）

(2) チューター・アシスタント

- 河本 麻実（金沢大学大学院自然科学研究科環境デザイン学専攻 2年，8月18日～9月3日）
- 田原 綾女（名古屋工業大学大学院工学研究科博士前期課程 2年，8月20日～30日）
- 福井 美乃（鹿児島大学大学院連合農学研究科博士課程 2年，8月26日～9月3日）
- 塚脇 理人（横浜市立大学国際総合科学部経営科学系 2年，8月20日～9月3日）

(3) 連絡教員

- 塚脇 真二（金沢大学環日本海域環境研究センター・教授，8月16日～9月4日）
- 木村 誠（小松短期大学地域創造学科・准教授，8月20日～9月3日）

(4) 埼玉大学

- 荒木 祐二（教育学部生活創造講座・准教授，8月28日～9月1日）
- 小林 京（教育学部学校教育教員養成課程 2年，8月28日～9月1日）
- 浅野 冴佳（教育学部学校教育教員養成課程 2年，8月28日～9月1日）
- 萩村 真奈（大学院教育学研究科教科教育専攻 2年，8月28日～9月1日）

(5) 鹿児島大学

- 本村 浩之（総合研究博物館・教授・館長，8月27日～9月4日）
- 萬代 さゆり（大学院水産学研究科修士課程 1年，8月26日～9月3日）
- 稲葉 智樹（大学院水産学研究科修士課程 2年，8月26日～9月3日）

(6) 滋賀大学

- 石川 俊之（教育学部環境教育講座・准教授，8月26日～9月1日）

2. カンボジア側受入機関・責任者

Hang Peou (カンボジア国立アンコール遺跡整備公団副総裁, Deputy Director-General,
Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap,
Cambodia/金沢大学環日本海域環境研究センター客員教授)

3. 各グループの担当業務

グループ 1 : アンコール世界遺産の地域住民支援事業 (クメール・ハビタット)

グループ 2 : ルンタエク・エコビレッジの整備事業

グループ 3 : 北バライ貯水池の環境保全・観光整備事業

グループ 4 : 西バライ貯水池の環境保全・観光整備事業

4. 全体日程 (2017~2018年)

- 3月6日(月): アンコール遺跡整備公団と打合せ (シェムリアプ)
- 4月3日(月): 第1回実施委員会 (実施概要の確認)
- 4月7日(金): インターンシップ説明会 (金沢大学人間社会学域国際学類生対象)
- 4月12日(水): インターンシップ説明会 (金沢大学全学生対象)
- 4月12日(水): インターンシップ参加者の募集開始 (金沢大学)
- 4月25日(火): インターンシップ説明会と参加者の募集開始 (小松短期大学)
- 5月24日(水): インターンシップ参加申し込み〆切 (金沢大学)
- 5月25日(木): 第2回実施委員会 (金沢大学: 参加学生の選考会)
- 5月26日(金): 選考結果を応募学生へ通知 (金沢大学)
- 5月31日(水): インターンシップ参加申し込み〆切 (小松短期大学)
- 6月1日(木): アンコール遺跡整備公団と打合せ (シェムリアプ)
- 6月1日(木): 選考結果を応募学生へ通知 (小松短期大学)
- 6月9日(金): 第1回インターンシップ事前研修 (金沢大学)
- 6月14日(水): 第1回インターンシップ事前研修 (小松短期大学)
- 6月28日(水): 第2回インターンシップ事前研修 (小松短期大学)
- 7月6日(木): 第3回インターンシップ事前研修 (小松短期大学)
- 7月7日(金): 第2回インターンシップ事前研修 (金沢大学)
- 7月13日(木): 第4回インターンシップ事前研修 (小松短期大学)
- 7月21日(金): 第5回インターンシップ事前研修 (小松短期大学)
- 7月27日(木): 第6回インターンシップ事前研修 (小松短期大学)
- 8月2日(水): 第3回インターンシップ事前研修 (金沢大学/小松短期大学合同)
- 8月8日(火): 第7回インターンシップ事前研修 (小松短期大学)
- 8月10日(木): 第8回インターンシップ事前研修 (小松短期大学)
- 8月17日(木): アンコール遺跡整備公団との最終打合せ (シェムリアプ)

- 8月17日(木)：第9回インターンシップ事前研修(小松短期大学)
- 8月18日(金)：第10回インターンシップ事前研修(小松短期大学)
- 8月20日(日)～9月3日(日)：インターンシップ実施期間(※委細は別記)
- 10月10日(火)：インターンシップ報告会(小松短期大学)
- 10月11日(水)：インターンシップ報告会(金沢大学)
- 10月11日(水)：インターンシップ事後研修(金沢大学/小松短期大学)
- 11月24日(金)：インターンシップ報告会(金沢大学人間社会学域国際学類生対象)
- 1月31日(水)：インターンシップ報告書の出版

5. 渡航日程と現地での活動(2017年)

- 8月20日(日)：金沢/小松→小松空港(13:30)－MU558便→(15:35)上海浦東空港(18:55)－MU513便→(22:15)シェムリアプ、ホテルにチェックイン
- 8月21日(月)：アンコール遺跡世界遺産の見学(午前：プラサット・クラヴァン、スラ・スラン、プラダック村、アンコール・トム)、インターンシップ始業式～グループ業務の決定～グループごとに業務担当者との打合せ(午後)
- 8月22日(火)：クメールハビタットでの授業と北スラ・スラン村の視察(全グループ)
- 8月23日(水)：北バライの視察(グループ1, 3)、西バライの視察(グループ2, 4)
- 8月24日(木)：西バライの視察(グループ1, 3)、北バライの視察(グループ2, 4)
- 8月25日(金)：古代集落ロヴィア村とポック市場の視察(全グループ)
- 8月26日(土)：トンレサップ湖見学(午前)、自由行動(午後)、鹿児島大学・滋賀大学グループ到着(夜：翌日から合流)
- 8月27日(日)：バイヨン寺院・バンテアイスレイ寺院見学(午前)、自由行動(午後)
- 8月28日(月)：アンコール・ワット寺院とタ・プローム寺院の見学(全グループ)、埼玉大学グループ到着(午前)合流
- 8月29日(火)：タエク村での説明会とバンテアイ・サムレ寺院の見学(全グループ)
- 8月30日(水)：鹿児島大学グループの西バライ魚類採集の見学・補助(全グループ)
- 8月31日(木)：タ・プローム寺院での植樹祭に参加、ルンタエク・エコビレッジの見学(全グループ)、埼玉大学グループ帰国(夜)
- 9月1日(金)：担当職員とのフィードバック(午前)、副総裁・担当職員による口頭試問(午後)、担当職員・公団関係者らとのお別れ夕食会(トンレチャクトムク・レストラン)
- 9月2日(土)：自由行動(終日)、ホテルをチェックアウト、シェムリアプ(23:10)－MU514便(機内泊)→(9月3日4:30)上海浦東空港(9:15)－MU557便→(12:35)小松空港→金沢/小松

※MU：中国東方航空

2017年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

2017年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

加藤和夫（金沢大学人間社会学域国際学類 教授・学類長）

木村 誠（小松短期大学地域創造学科 准教授）

小原文衛（金沢大学人間社会学域国際学類 准教授）

古泉達矢（金沢大学人間社会学域国際学類 准教授）

辻谷友紀（金沢大学学生部学務課教務係 主任）

塚脇真二（金沢大学環日本海域環境研究センター 教授）

発行所	金沢大学人間社会学域国際学類 金沢大学環日本海域環境研究センター 〒920-1192 石川県金沢市角間町 TEL (076) 264-5455 FAX (076) 264-5468
-----	--------------------------------------------------------------------------------------------------------

印刷 発行 印刷所	2018年1月31日 2018年1月31日 前田印刷株式会社 〒924-0004 石川県白山市旭丘 2-16 TEL (076) 274-2225 FAX (076) 274-5223
-----------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------

